定價參拾五錢

郵稅金六錢

『新潮』定價表

本誌定價	郵稅
一部 金二十錢	一錢五厘
六部 壹圓廿錢	郵稅共
十二部 二圓卌錢	郵稅共

郵券代用ハ一錢切手ニテ一割增

廣告料
五號活字二十七字詰一行一回ニ付三十錢
半頁七圓
一頁十二圓

注意
○御注意ハ一切前金ヲ要ス
○代金領收證ハ差出サヽルニ付雜誌ノ到着ヲ以テ金員落手ト御承知アリタシ
○御注文ノ節ハ住所姓名詳細楷書ヲ以テ御認メヲ請フ
○應答ヲ要スル信書ハ必ス返信郵稅御封送ノコト

毎月一回十五日發行

明治四十一年七月十二日印刷
明治四十一年七月十五日發行

本刊 定價金卅五錢

編輯兼發行者 東京麴町區土手三番町廿七 中根駒十郎

印刷者 東京神田美土代町二丁目一 島連太郎

印刷所 東京神田美土代町二丁目一 三秀舍

發行所 東京市麴町區土手三番町二十七番地 新潮社

まだ色々御話し致し度い事もありますが、此度は大分御顔揃の御話しがある様ですから、私は之て御免を蒙つて置きましやう

『國木田獨歩』完

の野心は次第に銷磨せられて了ひました、但し全然失なつたのではない、彼が後年西園寺侯の許へ高等食客然と置て貰い、日夕侯に親炙して其談を聞いたのも、幾分政治的希望が交つて居たに違ひなく、又或時は千葉縣から衆議院議員の候補者として打て出やうと思つて、多少其準備に着手した事もあります。

以上の事實が彼が政治的野心のあつた人物なりし事を證據立てると共に、其胸奥には常に満々たる覇氣のあつた人物たりし事を示すものであらうと思ひます。

▲懸賞小説の當選と落第　獨歩の逸事の中で、餘り人に知られて居ない面白い事がある、それは彼が萬朝報の懸賞短篇小説募集に應じて、三回の中二回だけ當選した事で、之は恰度獨歩が霞ケ丘に退隱んで居る時で、貧乏な彼の一生中尤も窮して居た時代ですが、當時未だ獨歩の小説は何所へ持つて行ても容易に買て呉れないので、或時ふと想ひ着いて萬朝報の懸賞小説を書いて、他人の名を以て之を朝報社へ送つた、處が幸いにも當選して十圓の金が入つた、之に味を占めて其後二度送つた處が、一篇は當選したが一篇は落第した、當選した二篇はたしか「無窮」と題するのと「驟雨」と云ふので、落第したのは獨歩集の巻頭に出て居る「富岡先生」です、但し其時の「富岡先生」はあんなに長いものではなかつたので、あれは其後書き直して長いものにしたのです、稀代の作家も窮しては懸賞小説を競爭し加之も後年世間の讃稱を博せる一篇が見事落第をさせられたなどは、誠に面白い話ではありませんか。

と呼び、或は

政界眞に慷慨の事のみ、革命なるかな、革命なるかな、天我國民を救ふ、必ず茲に革命を下し給ふを疑ふべからず、されど革命も外科的荒仕事也、其害も亦多し、思ふて國家と此生民との前途、現狀に至る、熱涙に堪へざる也、眞に熱涙に堪へざる也

など〻書いたのもある、二十四年の大津事件の時郷里の山口縣麻郷から一書を寄せた書中には

魯太子一件如何

可笑、可怒、可哭、亦或る意味に於て可喜

外交とか政論界とか云ふ者は不思議千萬の者にこそ、大臣、議員、學者、新聞記者、書生、悉く狂氣し（後略）

など〻書いたのがある、尙當時の手紙の中には

政界は如何、田舍に在りては裏面の事情もわからず、只だ新聞紙がたよりに候、チト御觀察の奇拔なるもの御聞かせ下され度候

と云ふ様な文句を書いて、分りもしない私の處へ聞きに寄越した事が毎々ある、之等の事から見ても、獨歩の志が政治に在つたのは爭ふべからざる事實です、然し其後生活方面の事情と、文學に對する天才が漸々發揮せられて、自分でも其天職を自覺する様になつてからは、政治上

暴に任せての喧嘩で、それが又非常に強く、イザとなれば直ぐ爪を立て丶敵手をガリ〳〵引掻くのが癖で、「ガリ龜」と云へば當時の喧嘩仲間には却て恐れられて居たと云ひます、此僞名は彼か幼名を龜吉と云つたから來た名である事は申上るまでもありません。

それから青年後の獨歩を知つて居る人には不思議に思はれる事ですが、彼が幼少い時は非常に數學を好んで、實際また其才があつたと云ふ事です、自分でも能く得意になつて其話しをして居ました、算術や代數の難解しい問題に對して、如何でもして之を解釋しやうと苦心し懊惱するのは、僕に取ては無上の樂みであると語つて居た、然し此樂みは文學や宗教を味はう様になつてからは、全く廢めて了つたやうです。

▲政治家たるの素志　上京して早稻田の英語專修科に入り、次で英語政治科に進んだ、其目的の政治に在たのは云ふ迄もない、然も彼は熱心なる急進主義で、明治政府の施政には絶對的反對を唱へて居た、當時の書翰などを見ると數々政界の事に就て、憤慨した語氣を漏らして居るのが澤山ある、詩を作れば……獨歩は其な下手な詩を作つたものです。

聞說近時政界難、獨在客窓撫長劍

など丶云ひ、歌を作れば

大神の御心われは知らねども
日の本の民救はざらめや

獨歩の逸話一二三

田村江東

私は獨歩とは只舊い友達と云ふ丈で、筆を持つ職業こそして居りますものゝ、素より詩人でも小説家でも何でもありませんから、文士としての獨歩に就ては、殆ど申上る程の考もなく、假にあつたとしても、彼の稀有な天才に對して、局外の漢が無益ぬ觀察を下したり批評をしたりするのは、何の益もない事ですから、之は差控へる事に致します。依て此には永い交際の間に、聞いたり見たりした事の中で、私の差當り記憶に存して居る事を、二三申上げましやう、或は斯樣な話の中に、却て獨歩の眞面目が現はれて居るかも知れませんが、無趣味んと思召しの事は、構はず御取棄てを願ひます。

▲少時の意氣　私の朋友となり始めたのは、十八九歳の頃からですから、其前の事は存じませんが、其頃でも隨分元氣旺盛、意氣軒昂と云つた樣な性質で、活氣が常に眉宇の間に現はれて居ましたが、聞けば是前の小學時代には、尙一層の元氣であつた由で、殊に名代の肝癪持と來て居るのですから、年中他に衝突して、議論は素より屢々喧嘩などをしたものだ由です、然し御承知の通り體格は小さい方で、實際の腕力と云ふものが強くは無つたのですから、只威勢と亂

▲其時は、どうしたのか池を二つ三つも取り變へましたが一疋も釣れませず、終ひには癇癪を起して「寒いので魚が無性をして出て來ないから追ひ出してやる。」と云つて、池の中を釣り竿で掻き廻されたものであります。

▲其時、二日ばかり滯在されましたが、其所の景色が大變氣に入つて、此所に是非別莊を建てると云つて、村長を賴んだり何かして、土地を見て廻られました。そして、僕が死んだら、此所に墓を建てゝ、停車場の名所を記す樣に、「詩人獨歩の墓、これより何町。」と書くのだ、然うすれば、天下の文人は皆此所で下車すると云つて笑はれました。

▲其時、一夜、村の人々を集めて話をされました。お話の要領は覺えて居りませんけれ共、題は「捨て身の兵法」と云ふのでありました。日露戰爭後でありましたので、露西亞に勝つても油斷をしてはならぬ、亞米利加と云ふ恐ろしい敵があるから、遊ぶ時には遊んで、働く時には大いに働かねば可けないと云ふ、誰れでも能く云ふことであります。然し、村の人達はこんな面白い話は之れまで一度も聞いたことがないと云つて、それから村にいろんな遠足をするとか云ふやうな極つた遊びが出來ました。それは全く國木田さんのお話が原因なのであります。

した。

▲それから、國木田さんは非常に珍らしいもの喜びをする人で、何か珍らしいものがありますと、その喜ばれることゝ云つたらお話にならぬ位でありました。御馳走でも料理屋から取つたりなぞしたものは喜ばれず、まづくても却つて手製の料理を情味があると云つて、非常に喜ばれました。田舎に來られました時にも、味噌汁を出しましたら、此味噌汁は誰がこしらへたのだと聞かれますので私がこしらたのですと云ひますと、おいしいおいしいと云つて喜ばれ、晝も味噌汁夜も味噌汁翌朝も味噌汁、と云つたやうに、味噌汁ばかり、喜んで召しあがりました。

▲別に道樂と云つてはありませんでした。玉突と、碁と、釣りぐらゐのことでありましたでせう。碁は別に上手の方ではありませんでした。ぜせ〳〵した打ち方で、負けると怒つて、碁面を亂して了ひ、どうしても勝たねば承知の出來ない人でありました。

▲田舎に來られた時は二月の雪が降つて居る時でありました。其寒いのに簑笠と云ふ風采で、池に釣りに出かけられましたが、自分の姿を見て、非常に好いと云つて笑はれました。私はお菓子を重に詰めて、土瓶にお茶を入れて持つて行き、お茶を召し上れと云ひますと、「なんだ、氣がきかない、先刻から貴女の土瓶を下げた姿を見て、其中には酒が入つて居るだらうと、樂みにして居たのに、お茶とは氣がきかない、寒い日に如斯所に居る時には、酒を持つて來るものだ。」と云つて叱られたことがあります。

ますから、始終傍に居らねばなりません。それで一時其女中を頼んで來たのでムいます。所が、國木田さんは、嫁入り前の忙しい中を好く手傳ひに來て呉れたと云ふので、其お禮として嫁入り後の心得を、三時間ばかりも諄々として說いて聞かせられました。所が、終ひには其女中が泣き出しました。國木田さんのお話しは、極く眞面目なお話しで御座いました。其後も、其女中から便りの端には、屹度、國木田さんが訓へて下すつたやうにして居ると云ふことを書いてムいます。

▲其田舍に來られた時のことでムいます。車が見えましたので、二三丁迎へに行きますと、逢つて直ぐ「すつかり田舍者になつて了つたな」と聲をかけられました。そして車に從いて私も家へ歸りますと、未だ挨拶もしない中から、座敷から、床、押入、臺所から湯殿、便所、果ては戶棚まで開けて、家中の檢査を濟まし、齋藤弔花の家だから定めて小さい家だと思つたら之れは案外大きい家だと云つて、それから初めて挨拶をしたのであります。所が、今度はお互に物をも言はず、只、ホロ／＼泣くばかりでありました。一體、國木田さんは極く情にもろい人で親密な間柄の人に久し振りで合ふと、喜んで嬉し泣きに泣く人でありました。

▲其くせ、私は外の人を別にこはいとも恐しいとも思つたことはありませんですが、國木田さんだけはこはい人と思ひました。別に何所が恐しいと云ふこともありませんけれど、些つと間違つたことを言ひますと遠慮なくつけ／＼叱られますので、何だか恐しいやうな氣が致しま

は決して話しませせん、大勢集めるとか、少なくとも私が居りませんと、僕の話を弔花君一人に聞かせるのは惜しいと云つて、お湯に入つて居りましても、出るまで待つてそれからいろんな話を初められたものです。殊に赤坂に居らした時代には、能く宅にお出でになつて、アラビアンナイトの話をして下さいましたが、子供を初め、大人まで皆面白がつて、國木田さんのぐるりを取り巻いて、それから〳〵と責め立てゝ聞きました。今夜は夜も更けましたから、又次ぎは明日の晩にと云ふやうなことを云つて、歸りがけに今日は十圓がところを話したとか、二十圓がところを話したとか云つて、僕の話は皆自ら文章を成して居るから、筆記して置くと金になると云つて笑はれました。

▲それが、殊にお酒に少し醉はれると、其喋べられることゝ云つたら、お話しすることのあれくらゐ好きな人も滅多にありますまいと思はれます。それに、洒落や警句が非常にお上手で、自ら然うしたことが口を衝いて出るのであります。然し、醉ふて居られましても、お話しに依りますと非常に眞面目で、私共が一時田舍に引き込みまして、大阪府下の古曾部と云ふ所に居りました時、國木田さんが神戸に來て些つと立ち寄られました其時のことでありますが、私の家に居ました女中が、嫁入りすると云ふので暇を取つて宿へ下りましたが、國木田さんがお出でになると、私は前申したやうに、國木田さんの傍を離れて臺所などのことも出來ず、若し、お話し中でも些つと立ちますと、人が折角話をして聞かして上げて居るのに立つと云つて叱られ

て、便所に行つたなり其所にへたばつて了はれたものであります。

▲其夜のことですが、眞夜中の二時ごろ人力車に乘つて歸りに、ステッキで車夫の頭をポカ〳〵なぐつて仕方ないので、車夫はステッキを取り上げて了ひますと、今度は泥靴のまゝで背を蹴つて、車夫が非常に閉口したと云ふことでムいます。

▲それから斯う云ふこともあります。弔花が醉つぱらつて歸りますと、其後を追ふて國木田さんも來て、門の所でいきなり「弔花を出せ、殺して了ふから。」と大變な勢ひなのでムいます、弔花は弔花で、二階で國木田の奴を叩き殺して了ふと力んで居るのでムいます。何のことか分りませんけれども、何分お互に泥醉して居りますので、「弔花を殺して了ふから出せ」と云つて非常な勢ひの國木田さんを止めて、(私には其場合別に何とも言はれません。)いろ〳〵なことを話して居りますと、其中段々醉ひが醒めて來ますと、今迄の勢ひはけろりと止んで二階に上り、オイ蕎麥を喰べに行かうと云つた調子で、二人仲好く蕎麥屋に出かけ、歸りにはお互に先刻のことは忘れて了つて、仲好く別れて歸つたこともムいます。

▲然し然うした亂暴をされますのは、大醉の餘りでムいまして、少しぐらゐ醉はれた時は上機嫌でペラ〳〵實に好く喋られます。國木田さんは、一體不斷でも喋ることが大好きで、能く宅になぞ來てもお話しされましたが、その又お話が上手で、實に面白く、且つお話の材料も多いし、それに多方面なので、どんな人に對しても話が向くのです。宅に居らしても、弔花一人に

等の品ではなかつたのでせう。幾ら撒いても香ひません。其時、恰度私の宅に、他所から戴きました一瓶十幾圓とかの上等の香水がありましたものですから、其事を話しますと、そんな上等の香水を弔花君や貴女に持たして置くのは惜しいものだから、此方に寄來せと云はれるので、お母樣が出京された折に、送つて上げましたら、非常に喜ばれまして、大事にして少しづゝ使ひ人には決して使はせられなかつたさうであります。

▲喰べ物も亦隨分やかましく言はれた方で、何所の何でなければ食へないなどゝ言つて居られました。お菓子は、初めはちつとも喰べられませんでしたが、病氣になつてからは大變お好きになりました。そして、新杵の菓子でなければ食へないと云つて居られました。

▲お酒は隨分飮まれた方でムいます。芝の櫻田本鄕町に居られた時は勿論、大久保の方に移つてからも、酒は銀座の加六から取られたくらゐであります。

▲お酒の上は、別に惡いと云ふ方ではありませんでしたが、餘り醉はれると、隨分亂暴された方でムいます。泥醉されたのは餘り見ませんでしたが、一度、宅でお飮みになりました時、一座に居られました三島霜川さんに喰つてかゝり、火箸を燒いて、今にも突くやうにされました。然し、三島さんは餘り酒はあがらず、それにおとなしい方でムいますから、別に相手にもなられませんので、喧嘩と云ふ程の喧嘩ではありませんでしたけれ共、お二人の間に私取入りますと默つて了はれますが、退きますと直ぐ又初められました。其時は隨分べろ〳〵に泥醉され

際の忙しい中を、わざ〳〵大久保から銀座まで、足袋を買ひに使ひを出したぐらゐでムいます。

▲洋服を着るやうになつてから、靴を始終穿かれました。然し、其靴は決して東京では買はれません。わざ〳〵神戸まで注文して取り寄せました。そして東京の靴は、どうも高くて悪いから困る。靴は神戸に限ると云つて居られました。然し下駄の方は一向何でも關はなかつたやうで御座います。

▲帽子には餘り好みはなかつたやうで、病氣になられましてからも、古い少し破れた帽子を冠つて居られたくらゐでムいます。

▲石鹸などは、始終極く上等のものをつかはれました。鎌倉に放浪して居られます時分でも、石鹸は必ず、東京へ注文されましたもので、毎朝叮嚀に顔を洗つて鏡に向ひ、櫛を入れると云ふ風であつたさうです。そして、清潔好きの人ですから、手なぞ何時でも、其上等の石鹸を以つてきれいに洗つて、汚して居ることなどは見やうたつて見られませんでした。

▲そして、國木田さんは非常に香水の好きな人で、その香ひを非常に喜び、始終使つて被居いました。鎌倉に放浪時代、宅の齋藤や、原田東風さんなどゝ一緒に居ました時にも、國木田さんは何時でも香水を使つて、使つた後は瓶に墨をつけて置いてそれを透しては見、若し少しても其しるしより減つて居ると又使ひやがつたとごぼしたものださうであります。先日も病院に參りました時、香水を使つて居られましたが、茅ケ崎で買はれたものですから、どうせ餘り上

たゞ、こまぐ\しいことにまで注意して居られました。御自分も、兵子帶なんか少し汚れると直ぐそれを苦にして、洗はせると云つた風でした。それで、着物なぞは別に凝ると云ふ方ではありませんが、風采は些つと氣取る方でありました。然し、厭や味なところは些つともありません。

▲初めは、大抵和服ばかり召して被居いましたが、晩年――近事畫報社時代には、大抵洋服のやうで御座いました。洋服でも和服でも、別に好みはありませんでしたけれども、品物はなる丈け上等のものを買ふやうにして居られました。病中南湖院でお寫しなすつた寫眞に着て居られます黑いインバネスの裏なども、一番品物の好いのをと、特に選んでつけられたので御座います。

▲寢具なども、好いのが欲しいと云ふので、羽二重のかけ蒲團に、麻の敷蒲團をこしらへるつもりで、それを買ひにお使ひの人が出京すると云ふ所でありましたが、遂ひに拵らへない中に、亡くなりましたのは、誠に殘念で御座います。

▲襦袢は能く長襦袢を着て被居いました。長襦絆など着ると云ふと、何か風采が厭味のやうに思へますけれ共、決して、だら〳〵した所は少しもありませんでした。

▲足袋は銀座の何とか云ふ足袋屋のものでなくては穿かないと云つて、茅ヶ崎へ參る當時も、東京を出立する其日になりましてから、外の家の足袋では何うしても厭だと云つて、其出立間

と一分一秒でも時の經つのが惜まれる、僕も自分が此世に存在した印に遺して置くと思ふと、血を吐いても搆はぬから夜通しでも書いて見たい、是非書いて諸君の厚意に酬ゆる』と熱心に云はれた言葉が耳の底に殘つて居る。

今、墓畔を去らんとして其日の事を思ふと、云ひ知らぬ感慨が胸一ぱいになつて、移ろひ易き草の葉色も眼に泌む計りである。

墓地は先考の墓と隣んでゐるのだ。（六月二十九日）

獨歩氏の嗜好

齋藤清子

▲國木田さんは、どちらかと云ふと、着物の縞柄とか、色合ひとか云ふことには餘り關はない方で、風采などに就ても、別に苦にする方では、御座いませんでした。然し、何分潔癖な人で、身體はきちん〳〵として、着物なぞも、垢のつかないものでないと着られませず、垢のついた着物を着てだらしのない風をして居ると、人のことでも、やかましく言ふぐらゐで、子供さん方にでも、洟を拭けとか、帶をきちんと締めろとか、顔を洗つて貰へとか、絶えず然うし

少し右へ傾けて」と注意をする。

眞山氏が「奥さんも貞ちやんも最早お歸りになつたら宜いでせう」と烈しい雨を氣支つて聲をかけると牧二氏も「お歸りなさい」と言葉を合せる。さりながら永い別の殘惜しさは人も我も變りは無い、悄れ返つた面持を掠めて墓所の雨は更に痛ましい追慕の念を促がして降りしきる。遂に墓標は立てられた。月桂樹は植ゑられた。雨の青山に今日から獨歩氏は新墓の主となられた。

僕が先生に逢つたのは四月十九日茅ヶ崎南湖院へ見舞つたのが始めてゞある。先生に逢はんが爲めに茅ヶ崎の停車場に下車した僕は其時始めて湘南の海の音を聽いたのであつた、再び僕が茅ヶ崎の磯馴松を潜つた六月廿三日は既に先生が柩の裡に眠つて居られる時であつた。而して三度先生を青山墓地に迎へた時は最後の告別をすべき悲しき日であつたのだ。故に僕は最も晩く先生を識り最も迅く先生に別れたのだ。

始めて逢つた先生は頗る元氣で二時間餘りも打解けて話された、丁度菜の花が咲き殘つて遲櫻が蕾を解く頃で、先生は寢臺に僕は椅子に砂雲雀の聲を聽きながら種々な世間話に時を移した。

其時枕元にあつた二十八人集をいぢくり乍ら

『人間と云ふものは吾儘なもので、健全な時はぶら〳〵して居ながら、さア先が無いと極る

て來る、黑い法衣を裾短かに着て紫の袈裟をかけて穴の側に立つて高聲に最後の經を讀み始める。

――遺骨が地下におろされたと思ふと、人夫は穴の兩側にかゞんで幾筋かの麻繩を手繰る。一齊に息を凝して一心に人夫の手先を見詰る。讀經の聲は高くなる。軈て故人の遺著、武藏野、獨歩吟、獨歩集、運命、濤聲の五卷を收めた陶器に「君の遺骨と共に永遠に傳ふ」と友人總代として小栗先生の書かれた一通をも添へて埋められた。寂しい雨の降るに任せて墓標は既に運ばれた、白い布で捲いてあるが布が濕つて墨色が明瞭讀まれる、「獨歩國木田哲夫之墓」の九字は故人に深い緣故のある德富蘇峰氏の筆である。

斯くて讀經のうちに先生の長男虎雄君が、カーキー色の洋服に泥だらけな短靴の儘田村三治氏に手を曳かれて、小さい土塊を拾つて穴の裡へ投げ入れると、奥さんはコートの裾をつまんで同樣に土塊をなげる。白地紋附に紋綸子の袴をつけた貞子孃も、伊藤龜雄氏に抱かれて審かしさうに眺めて居たみどり孃も、收二氏も親族知己も代る〲今更の樣に儚ない土塊を採り上げる。――恁うして雨の青山原頭に先生の遺骨は埋められたのである。

人夫は忙しさうにざくり〲と鍬をいれて穴に土を落す、僧侶は歸つて行く。小栗先生は絽の羽織を疊んで懷中に押込み尻を端折つてゐる、月桂樹を植ゑる爲である、田山先生のフロックの肩は水を浴びた樣に濡れた。盛りあげた土に人夫が墓標を立てるのを、田村三治氏が「今

式を終つて向側の杉山と云ふ家に行く。先生の遺骨を墓地に見送る人々が集まつて居るのだ。僕は横降りの雨に濡れながら四五人で軒に這入つたが、腐つたやうな庭木の葉ががさ〳〵飛沫に騒いでゐる。と小栗先生が傘もさゝずに新聞の反古で根を包んだ月桂樹を二本抱へて飛石傳ひに「酷い〳〵」と云ひながら這入つて來た、何れも二尺位あらう一本の方の葉が茂つて一本の葉は少なくて寂しい。

軈てぼつ〳〵墓地へ行く人があるので、僕も櫻菴氏と共に大通へ出る。久しい雨に叩きつけられた路上の石か柔かくなつた靴の底を突くのと、腰から下がびつしより濕つた心持の寒さつたらない。二町許り降られて行くと前方の傘が右へ曲る、「國木田家墓地」と書いた立札についてぶよ〳〵した赤土の路の兩側は見渡す限り大小の墓の林で、活々した柵の綠が雨に沈んで動いて居る。先生の墓所の附近には大きな樹は無い、坂勾配の遠くに黑ずんだ立木が茂つて、雲も浮ばず鳥も飛ばず、襲ふやうな土の香が鈍い日影に漂ふて、不相變雨はいよ〳〵細かに降る。傘をさして墓地の圍りを取捲いた人達は寒さうな顏を見合せて居る。ぐるりと遠廻りして近づいて見ると、黑い桐油の外套を着た人夫が二人切りと起つたり屈んだりしてゐる。一坪四方位な地所を靑竹と苗木で結つた扇骨木垣に新らしい木の扉が開かれて、堀り返された土塊が盛りあげて穴の口が見える、何とも云へない胸苦しさを覺えた。

其内には奥さんやら子供衆やら收二氏やら皆な揃つた。屈强な年若な坊主が傘をさしてやつ

つかと進んで弔辭を讀む。花袋先生の弔辭に、君の遺骸を火葬に附したのは故人が朝夕目馴れた松並木の涯の露の繁き處であると云ふ意味の言葉があつた、吐き出す樣な調子と悲痛な辭句とには切りに嗚咽歔欷の聲が起り、奥さん始め手巾を顏に當てゝゐるのを見て竊かに涙を呑んでゐた兵卒があつた、恐らく後に殘つた方の心に引くらべての涙であらう。早稻田學友總代島村抱月氏が言文一致の弔文を捧げる、次で龍土會總代中澤臨川氏は弔辭を展げて讀始めたが俄かに顏色が變つてぶる〳〵と手が震へる聲も亂れて今にも倒れさうになる、――滿堂唾を呑む音だにない、變り果てた獨歩氏の靈前に進んで此感あるもの蓋し臨川氏のみではあるまい。辛うじて朗讀を終つたのは氣の毒で正面に見てゐられなかつた。其から舊獨歩社總代滿谷國四郎氏、早稻田大學校友會々長高田早苗氏(代理)の弔辭朗讀が濟む、齋藤弔花氏は恭々しく最後の告別の辭を述べて退いた。

燒香が始まると虎雄さんが田村氏に手を曳かれて可憐らしく頭をさげる。後から奥さんが左右の手に貞子さん、みどりさんの二女を連れて香を燻べ、泣腫した眼に涙をためて禮拜した。順序に燒香が終ると會葬者は思ひ〳〵に退散する。

雨は些との間もやまずに降つて日は益々暗くなる。

此時から齋場前の靑桐の葉に一層激しく雨の脚が亂れる、風さへ加はる、――六月二十九日朝來の梅雨は切りに靑山の空に灑いで薄暗い晝さがりである。

を見上げる――。

遺族席には白襟紋付の奥さんを始め婦人が四五人、虎雄さん、貞子さん、みどりさんが靜かに控へてゐる、其後に收二氏、小栗田山兩先生、眞山君を始め知己親友の人々がならぶ。

齋壇の御簾は金襴の縁をとつて重げに青い。其前の壇に置かれた遺骨の壺は白布で包んで花輪で飾つてある。蠟燭が二本果敢なげに明るく灯つて紅、紫、青の花蕋に冷たく映ると、卒塔婆に書いてある「爲天眞院獨歩日哲居士――」の字が動ぐ樣でならない。西園寺侯爵家から贈つたものを始めに五對の佛花は左右にならべられてある。雨で暗い場内には花の香が折々妙に鼻を掠める。

と青山圓通寺住職導師日勝僧都は白ちやけた光つた法衣を纏つて六人の伴僧をつれて座に就いた、髯の長い鼻の高い有難さうな僧都である。

經が始つて悲しい聲が擴まると寂として咳一つするものがない、時々かん〳〵と鉦を叩く、更に哀が深い。二人の僧が立上つて雙鉢をとりあげて、くる〳〵と廻して擦り合せると鈍い濁つた音が胸にこたへる。南無妙法蓮華經と僧都の聲は低くなる。――外は雨が激しく、齋壇の蠟燭は心なくぽつと燃え立つ。――首を垂れて、腕を組んで、眼を閉ぢて多くの人は默想に沈んでゐるのだ。

暫くして引導が終ると田村三治氏が故人の履歴を朗讀する、左の前列にゐた蘇峰氏がつか

青山齋場の光景

平井晩村

山王下で電車を降りて辻俥の庇で新町の方向を訊くと、「あの國木田様ですか」と云ふ、さうだと云ふと朝から幾度もお供をしたからと乘車をすゝめる。

楫を卸した右側の門に幌のうちから「國木田」と書いた新らしい表札が讀まれる。黒いコートを着た奥さんは格子を開けて出懸けられる處だ。「皆さんは」と云ふと最早青山へ行つたとの事で急いで雨の中を齋場に向ふ、午前九時。

齋場の受附には吉江君の顏が見える。兎や角して居るうちに酷い雨を冒して集まる會葬者の俥と傘が絶間なく續いて來る、十時となると既に休憩所は詩人文士を以て埋められて了ふ、あれは誰、あれは誰と密と名を聞いて居る人もある、當代文壇に知られたあらゆる方面あらゆる階級の人々を集めた當日の齋場は、確かに華美を盡した權門の葬列に見られない崇高いものがあると感じた。

定刻となるとどや／＼と齋場に這入つて左右に行儀よく並べられた椅子に掛ける、天井の高い所爲かがらんとして格別寒い様に思はれる。幾百人かの會葬者はずらりと顏をならべて齋壇

見せ度いものだと言つて居られた。それから私が書いた釣師氣質といふ本を失くして非常に困つて居る、何卒一册送つて呉れとのことで、早速送つてやると獨歩君非常に喜んで、それが屆いた時の返事には殆ど釣のことばかり書いてあつた。「君が得意の時には僕も得意になる、君が失望した時には僕も亦失望する」それから又「これは獨り現在のみならず未來にも然うあり度い」などゝ書いてあつた。

博覽會で買つたといふ釣竿は大小の對になつて居る鮒竿だ。成程立派なもので一尺位宛何本となく接ぐやうになつて居るのだが、私に送つて呉れた時取り遺したのか、末の細い方が少々不足して頗る殘念に思ふ。この釣竿は病中にも非常に愛して居たさうで、早くよく癒つてこれを使はねばならぬと言つて居たさうだ。あれだけ熱心になつて大事にして置きながら買つて以來一度も使はなかつたのだから獨歩君も定めし心殘りであらうと思ふ。實は私も未だ檢べて見ないが、今度よく檢べて置いて、大に釣つたら一つ獨歩君の靈前に備へやうと思つて居る。何しろ惜しい人を死なして了つた。

したものだ。當時國木田君はそれを讀んで、非常に面白い、是非一度連れて行つて呉れ〳〵とよく云はれた。が釣は芝居や寄席と違つて、波が立つとか風の吹き工合が悪いとかで釣れるつもりの奴が些少も釣れないやうなことがあつて誠に困る。素人を始めて連れて行くには如何してもそれらの困難があつて暫く一緒に行くことも出來なかつたが、鯊だけは外の釣と違つてそんな憂もなければ叉極く容易くもある。そこで或る日獨歩君と平塚斷水君倚その他に二名ほど社中の人を伴つて始めて鯊釣りに出掛けた。柳橋・傍の東屋といふ船宿から舟を出して品川沖で一日面白く釣り暮らした。久しい後のことだから詳しいとは覺えぬが、今も非常に愉快な日であつたと覺えて居る。たつた是が一度きりで其後一緒に行つたことゝない、釣に關する逸事といふやうなことも殆ど知らぬ。只國木田君は幼時から釣が好きであつたとの話は聞いたが、東京へ來てからは一度も行つて居なかつた。こちらで始めたのは私と一緒に品川で鯊を釣つたのが最初で、それからポツ〳〵とまた始めたらしい。何んでも野田に友人が居てヤマメ釣りか、鮒釣りかによく出掛けたといふことを聞いて居る。まあ私の考へる所では淡水魚の小さなきやしやな釣が好きであつたらしい、釣の方法も疎大な側ではなく纎細巧妙といふ方であつたと思ふ。

病氣にかゝつたといふ事を聞いて一度大久保の家へお訪ねしたが、もうその折は茅ヶ崎の方へ越して居られた。そして病中よく手紙をよこして僕が博覽會で買つた秘藏の釣竿を是非君に

聲」の中にある「鎌倉夫人」の、夫婦と戀と情の定義を下した一節も苦心せられたさうで、氏はそれを暗記してよく僕等に語られた。

氏の小說の中には、氏に背いて去りし不貞の戀人が書いてあるのが多いやうだ。併し、氏は其の戀人のことを話すには客觀的で、別に好意も持つてゐなければ、憎んでも居ないと云つた樣子であつた。ある時、新橋停車場で昔の戀人に會はれたさうだが、其の時は只輕く握手を交して別れたとのことだ。

▲氏の如きは、ある時勢にあれば、必らず革命家であつたに違ひない。あのやうな猛烈な革命家が出來たら溜らないであらう。今更何と云つても仕方はない、獨歩氏はもう此の世の人で無くなつたのだ、惜しいことである。（談話）

釣の獨歩

石井研堂

國木田君が獨歩社を創始して新古文林を出して居る時分に私はあの雜誌に月々釣の記事を書いた。今月は鯊の季節だとか、今月は何の季節だとかいふことを書き込んで、それを小說體に

▲僕が結婚した時、氏は媒介人になつてくれられた。其の時氏は謠曲の代りにと云つて、卓上演説を試みた。「鼹鼠」と云ふ演題で、長かつたが要は、夫婦の和合の破れるのは、多くは兩方の側の舅姑などが、もぐらもちになつて堀り崩すからである、どうかそんなことの無いやうに希望する——と結ばれた。

今年の春、僕の家に赤ン坊が生れたので命名を賴むと、氏が少年時代に崇拜してゐた檢事に一雄と云ふ人があつたからと云つて、その名をつけられた。瓊音君のは女のお子さんだつたので、氏が理想の女として居る少女があるので、其の名の「みよ」をつけられたさうである。

▲氏には燃犀な批評眼があつた。繪畫を見る眼などは確かなものであつた、下らない新聞記者などよりどの位うまかつたか知れない。併し常に作家が批評するものでない。と云つて、發表するのを厭はれた。曾て僕等が展覽會の批評をしやうとした時も、その理由を以て、懇々說明して差止められた程である。繪心は少年時代からあつたらしい、確か「運命」の中にある「畫の悲み」などは、氏自身の回想だらうと思はれる。

作の苦心もよく聞かされた。此の一頁の中でどこを苦心したと思ふか——などゝ云ふ質問を出されたこともある。「濤聲」の中にある「帽子」の冒頭の一節の中に「二三十軒の田舍町が出來てゐる」と云ふのがある。其の「出來てゐる」の一句は非常に苦心を經て得られた言葉で、その一句でなければ、押付けるに適當な文字はないと云つて居られた。それから、同じく「濤

觸れられるのを嫌ふ點が少なくも二三個所はあつた、無論全部ではないが――そんな處が、自らローマンチックな點となつたのだらうと思ふ。と、それは僕も感じてゐる、どこかに通行禁斷のところがあつた。城壁と云つて好いか――譬へば、家事向のことは、どんな友人にでも打明けられ無かつたことなどが、或はそんな點なのではあるまいか。

▲氏は「妻君は貴重な財産で、離別なんかするのは非常な不利益だ」と云はれた。それは五年なり、十年なり費やして、自己の趣味に合ふやうに訓練し、感化させたものを、僅かなことで離別などしては、更らに又新らしき勞力が要するではないかと云ふにあるのだ。

治子夫人が小說を書き初められた時のことである。僕が行つて一緒に酒を飲んで居ると、氏は夫人に出て來て酌をしろと云はれる。すると夫人は、今本屋から原稿をとりに來て急いで居ますからと云はれる。氏は直ぐに罵倒を始めた「お前達の小說が何になるのだ、それより客をもてなす方が、女の仕事ぢやないか。」と云はれる。それから「只ありのまゝを描け、女には作るやうな力はない、ありのまゝを書けばやゝ見られるものが出來やう。」と云つた。そして、婦人の作などは愚劣だと見向きもしなかつた。寧ろ罵倒のみされたのである。世間では夫人の小說は氏が添作するのだらうと云つた人もあるが、跡方もない噂である。

夫人の小說にも警句があつて中々面白い。氏は東京生抜の人間は警句が想像以上にうまいと云つて感心されたことがある。

間に紛議の生じた時、僕は氏の處へ相談に行つた。そして只事件の概略だけを話すと、其の中の人間も知らないで、適當な正しい判斷をしてくれた。非常な想像力があつたのだらう。其の外家庭のいざこざを相談しても、極めて、細かい事迄想像して、正當な解釋をつけられた。好く分つて居たのである。

▲氏は後悔と云ふことをしなかつた人である。後悔する者を笑つた。過去のことについて、後悔したり、嘆いたりするやうなことは絶對に嫌つた。自分でも無かつた。そこが強い處だらう、そしてまた若い處なので、常に若々しい氣を保つて居て、愚痴や卑怯を罵つた、氏の心には少しも疚しいことがなかつたのであらう。誰にしてもかくありたいものだ。どんなゑらい人でも死後曝露してはその人の人格を傷けるやうな秘密が多いが、獨歩氏にはそれがない、幾ら惡いと思はれることでも返つて曝露した方が氏の人格がよく現はれる位である。つまり少しの僞りも無いからである。

▲氏は出不精の人で滅多に人を訪問するなど〻云ふことがない。恐らく田山氏の宅へだつて行かれたことは眞(ほ)んの數ふる位しか無いだらう。僕の家へも、僅かに六七度しか來られたことがない。

てく〳〵歩くことが嫌ひ――最も佐伯に居られた時分は、随分山野を跋渉したさうだが――で、そんな風な點は、何となく貴族的であつた。田山氏も云はれた。獨歩君にはどこか、人に

▲氏の晩酌の膳には、いろ〳〵の料理が少しづゝ一ぱいに並べられてあつた。そして、正宗ホールの酒をやるのだ、その食品を調理する爲め、夫人は態々料理講習會に通はれた位である。氏には「女子禽獸論」と云ふ持説がある、到底女は駄目だと云ふのだ。よく聞かされたものだ。晩酌の時なども盛んにやるので、母堂も夫人も下女迄が、終ひに成程と合點する迄獨歩氏は幾度も幾度も説明して聞かしたさうだ。夜は客がなければ、そんなことでも云つて、陶然として醉つて寢て了はれたやうである。

氏は一體に蒲柳の質だから、酒の爲めに咽喉を痛めることが屢々あつた、醫者にかゝつて、硝酸銀でやけば直ぐ癒るのだが、それをやると嘔吐するからと云つて、怒つたものだ。醫者にかゝるのは絕對に嫌ひであつた。肺病なども前から多少故障があるのを自覺して、醫者の斷定を避ける爲めに、殊更醫者を嫌はれたのではあるまいか。

尤も肺病の原因については、曾て神戸に觀艦式のあつた時、出張してひどく醉つて、舍弟收二君の宅へ俥で歸つて庭へ下りやうとする刹那、どうした機みか俯伏しに倒れ胸を打つたことがある。どうもそれが原因らしいと自分でも云つて居られた。要するに氏の病氣は酒と事業が重なる素因を成したのであらう。

▲氏は直覺と云ふことをよく云つた。友人などの妻君が出產する時など、「僕の直覺では女だ」とか、さう云ふことをよく云はれた。實際氏には鋭い直覺の力があつたのだらう。曾て僕の仲

氣が弱いのである、優しみのある人と云ふことが分るではないか。併し氏から怒られても、皮肉を云はれても、決して悪感は起らなかつた、矢張り人格の力だらう。

▲氏は朝起きるとすぐ酒を飲んだ、夜中に目が覺めた時にもコップで飲まれたさうである。盃は足のついたコップの非常に好いので、それでなければ氣に入らなかつた。飲み出すと酔倒れる迄痛飲すると云ふ癖があつたから、隨分奇談がある。

いつか、或る所で、僕と氏と外に一人、丁度三人で飲んでの歸り途で、僕が洋杖を空に投げ上げると、櫻の枝にかゝつて落ちなくなつた、どうしてもとれない。僕が大いに惜しがると、「君だけぢや氣の毒だ」と云つて突如、自分のまだ買つたばかりの新らしい洋杖を折つて了つた。すると他の一人も折ると云ふ面白いことがあつた。まるで子供のやうだ。

民友社に居られた時分にも、本所あたりの顔役を、酒の上で散々なぐつて、一問題起りかけたことがあつたさうだ。あの小さい體でと思ふと驚く。渾身すべて元氣が横溢して居るのだらう。

曾て品川の海に網船三艘を浮べて、網をうたせたことがある。すると向ふの船に獲物があつて、此方にない。醉うて居たので、獨歩氏は憤然として、船頭のうち方が悪いのだからなぐると云つて、猛烈な勢である。それを無理やりに押止めたので、後で「小杉は亂暴だから體中が痛い」と、云はれたことがある。

には古くからお房と云ふ下女が居る、獨歩氏は貧乏に馴らせる訓錬がうまいので、下女まで、そんな風な愚痴は云はず、きりまはしが中々うまい。「竹の木戸」のお徳と云ふのはお房がモデルであるさうだ。

▲氏は作品を見ても分る通り、彼の位犀利な觀察眼のあつた人だから、肺腑の底迄も見拔くと云ふ風があつたが、時とすると人を信用し過ぎて、反つて背負投げをやられたことが度々ある。自分から巧む事をしない氏は人に巧まれて賣られた。併し氏はいつも、「無暗に邪推するものぢやない、親用する方が餘程好い」と云つて居られた。

▲氏はかくの如く眞摯であつた、氏には少しも嘘が云へなかつた、巧むことが出來なかつた、策を弄することを嫌つた。世間では氏を稱して、策士の如く思つた人もあるらしいが、大なる誤謬である。始め一寸會つた位では、あの俊敏な風采だから誰でも誤る、自分もそんなに思つたことがあるが、後になつて其の誤りであることを悟つた。

▲氏は平常からから言はれた。「自分の世間に對する出所進退は極めて小心である。」と、實際臆病であつたらしい。近事畫報社で社員を止させるにしても、中々これが云へなかつた。斷乎として、斷ることが出來なくて、七日も十日も氣を揉んで其の儘に延びたやうなことがよくあつた。

▲平常は、誰彼の見境もなく、怒鳴つけたり皮肉を云はれても、いざと云ふ時にはそんなに

僕や吉江君は何事によらず相談を持ちかけた方である。精神上の煩悶などを云つても、一々それを聞いて、正しい判斷を與へられた。其他一身上のことについてもよく相談相手になつてくれられた。併し、自分から好んで他人の秘密に立ち入らうとするやうなことは毫末も無かつた。「君あの事はどうしたい」など〻自分の方から云はれたことはない。文壇には後進に對して、何か生活の方法を立てるとか、口を見つけて世話などをする人があるが、獨歩氏にはそれが無い。成程親切で、何事に依らず相談には乘つて呉れるが、食ふに困るとか、口を見つけてくれとか云つて哀願したつて、そんな事では獨歩氏を動かす事は出來なかつた。第一氏はどんな場合にもそんなことを念頭に置かなかつた人である、生活問題などは殆んど第二で、そんなことに少しもくよ／＼せられたことはなかつた。

▲氏がいつも貧乏であつたもそれ等が原因であると思はれる。貧乏などは少しも苦にしなかつたのである、近事畫報社時代も僅かな月給であつたし、獨歩社は始めから借金だらけ、一生貧乏を續けられた人である。一月として滿足な晦日を越されたことは無かつたやうだ、貧乏なんか平氣で見て居られたのだ。それに治子夫人は好く分つた人で、愚痴は噯にも溢さず始終獨歩氏を助けられた內助の功の多かつた人である。財政上の難局と云ふと直ぐ夫人に向けられるのだが、それを少しも不服とせられなかつた。又どんな無理を――例の我儘から云はれても、夫人は一度として楯突くやうなことは無かつた。沼波君も夫人を賞められて居る。獨歩氏の家

を吐かれる。「欺かざるの記」の中に蘇峰氏を惡く書いてあるとか云ふ噂があるが、あれは決して深い意味があるのではなく、例の戀愛時代に思ふやうにしてくれなかつたのを、やんちや氣から怒つて日記に書いたのださうで、蘇峰氏のことは死ぬ迄大いに重んじて居られた。

▲氏は自分自身から讀書は餘り爲ないやうに云はれて居るが、これは實際である。つまり學究的の讀書を非常に馬鹿々々しく思はれたのだらう。病氣になつてからは、「碧巖錄」などを見られたが、近來一番面白く讀んだのは、「成吉思汗」だと聞いたこともある。「水滸傳」も愛讀書の一つであつた。熱があつたり、不快な時など必らず讀んだ。「水滸傳」は僕も好きなので、酒を飮んだ時など、魯智深や其他篇中の人物になつてよく語つたものだ。氏は細かい部分々々の文章の好い處なども指摘して賞讃された。併し文壇の人々などとは、矢張ツルゲネーフだとかモーパッサンだとか、そんな話をされたやうである。外のものを讀むのは嫌ひで寧ろ苦痛であつたらしい、親友の作品なども餘り讀んでゐられなかつた。

▲獨歩氏にとつて最も重要な友人は田山花袋氏であつたらう。田山氏のことはよく噂された、氏の人格に感心して居たやうである。慥か年齡も同じだと聞いてゐる。

▲あれ位如何なる場合にでも元氣の好い人は無からう。第一悄げると云ふやうな事は少しも無かつた。僕等は氏の爲にいつでも勵まされたのである。

の態度が眞摯で、熱があつて、意氣がある。人を感動させずには置かぬと云つた風があつた。氏は此の意氣と云ふことは非常に尙ばれた。氏にはそんな古くさい（好き意味の）點があつたのだ、つまり人生意氣に感ずと云ふのを尙ばれたので、病氣で入院せられてからでも、京橋かどこかのある一讀者が「獨歩集」の精細な批評を書いて送つたことがある。氏は酷く感動して、この人一人の爲めにでも、それに報ゆるものを書かなくちやならぬと云はれた程である。

▲氏は玉突をやられたが、それが又無類に下手なので、どうしても進歩しなかつた、どこへ行つて見ても氏より弱い人は無かつたやうである。煙草は無暗に喫む方であつた。病氣になつてからでも、醫者に隱れて、無理に喫まれたさうである。僕が去年禁烟した。すると、獨歩氏はそれを嘲つて「そんな愚劣極る努力をする必要はないぢやないか。」と云はれたが、後病氣になつてから、だん／＼酒が飲めなくなつて、いつかなど、天麩羅屋で一本の酒が飲み得なかつたので、「俺は餘義なく酒を止さなくちやならん」と嘆息されたことがある。

▲政治には青年時代から興味を持つて居られたさうだが、近時畫報時代に、政事論が始まつて、伊藤と西園寺を論じたことがある。伊藤は世間で云ふやうにずるい人ぢやない。西園寺も眞面目で、あれが眞實（ほんと）の宰相の器だと云はれたこともある。他人のことは餘り批評などしなかつた。或はこんなことを口に出すのが嫌ひだつたのかも知れぬ。又彼奴（あいつ）は嫌ひだとか、こんな風な好き嫌ひもなかつたらしい。客には極めて好かつた、誰にでも面白く話をして、例の氣焔

▲いつか、そこで獨歩氏が醉つぱらつて暴れたことがあつた。誰も手が出せないので、頗る手古摺つたが、おやぢ先生大いに怒り、一杯機嫌もあつたので、木劍を出して來て、ひねくつて威張つたやうな珍談もあつた。酒を飲めばかうで、盛んに氣焔を吐く、我儘を云ふ、隨分暴れることもある。その我儘には誰でも弱るので、これが過ぎると癪に觸ることも度々あつた、僕が入社して、まだよく氏を了解して居ない時分、ちよつとしたことから盃の投げ合ひをやつて、將に擲り合ひにならうとしたことがあつた。併し氏の我儘は決して「我慾」から出るのぢやない。そこが面白いのだ、全くやんちやの我まゝなのだから一時はむつとしてもどうにも怒られない、又感じの惡くない我儘のやり方である。誰でも獨歩氏の我儘には弱つたらしいが、惚れた弱味で、いつでも特別の意義を以て許すの餘義ないことになる。

▲氏には道樂と云ふものがなかつた。衣類などでも贅澤をするやうな噂もあつたが、あれは決して道樂ぢやない。何でなければならんと云ふやうな堅くるしいことはなく、何でも擇り好みはなかつた。僕等にもよく云つた。人間は小さつぱりとした風をして居なくちや不可ない――と、實際さうであつたのだらう。酒を飲んでも、只面白く飲むだけで、他所で寐泊りするやうなことは滅多になかつた。坐談のうまいことは評判であるが、誰に云はせても、彼れ位うまい人は無からうと云つて居る。それが酒を飲むと、益々流暢になつて、更に面白くなる。

▲話は隨分多方面に渡つたやうだが、多くは、文藝のこと、精神的のことが主であつた。そ

其三角餅屋が、丁度、前國木田氏の居つた家に住んで居る。私は深くその奇縁に驚いて、早速此の事を獨歩氏に知らせやうと思つたが、未だ知らさないうちに、獨歩氏は長逝されてしまつた。

獨歩氏の一面

小杉未醒

▲獨歩氏は人も知る如く中々の酒豪で、到底僕等の及ぶ所ではなかつた。先づ風葉君なら、好い相棒だつたらうと思はれる。よく行つたのは京橋の正宗ホールで、僕なども時々お供をしたものだ。其處は豆位で一寸やると云ふ所だが、酒が非常に好い。獨歩氏はその酒でなければ飮まないと云つた位である。「號外」と云ふ小説(「濤聲」の中にある)が、あれはそこから出たのだ。あの中の人物も皆なモデルがあるので、老彫刻家などは僕も二三度會つたことがある。氏の話によると、あの小説は醉つぱらつて居て、夜中に起きて筆を執つたのださうだ。

▲面白いのは、正宗ホールの主人である。矢張り酒が好きで、始終飮んで居る。そのおやぢが又獨歩氏が非常に好きなので、此間の葬式にも來て居たやうである、感心なおやぢだ。

と共に、又聞くのも上手であつた。輿に乘つて話す時には實に天馬空を驅けるの思ひがあつた。自分でも始終言つて居られた。讀む、話す、聞く、其間に得がたいヒントを得る、切實に或る物に觸れることがある。此の三つは我が生命であると。

時候は最も青葉若葉の候を愛された。そして、「あら尊うと、青葉若葉の日の光り」と云ふ芭蕉の句を愛吟したものである。

輿に乘ると芭蕉を讀み、唐詩選、三體詩を聲を上げて吟ずる癖があつた。特に三體詩中の經過此地無限想　一望悽然感廢興　維水古都秦二世　漢王秋草漢諸陵と云ふ詩を高吟する。それは端然と座して手を正しく膝の上に置き、眼を瞑り、身體を搖つて、眞に感慨に堪へぬものゝ如く吟ずるが常であつた。

義太夫も喜んで聞いた。一體、音樂に對する智識はなかつたが、聞くのには非常に趣味を持つて居られた。殊に野趣のあるものは好んで聞いた。其中に於て、自然を感ずる分子の多いのを喜ばれた。話が又昔に返るが、青年時代鄕里に在つた時、下僕が每夜義太夫の師匠の所に、山越えをして通ふのに從ひ、共に月を踏んで、義太夫を道々やりながら行つたとのことである。其時の感想を描いた作品がある筈だ。

それから圍碁が好きであつた。而も笊碁ではあつたが、好きなことは一通りではなかつた。

獨歩氏の作物中、名は忘れたが三角餠のことを書いたものがある。私が昨年鄕里に歸つた時、

つたものやら分らぬ、方々聞き合して見たもの丶、固より喧嘩をして出たのだから、別に行く先も言つて置いてない。漸く聞き當てゝ二番町の家に行き、青筋を立てゝ怒つて見たが、最う引移つて了つたものだから仕方なく、其所に荷物を解いて、二階の六疊に落ち付いた。其隣りに今の夫人の實家の人々が住んで居られて、自然近づきとなり、遂に結婚されることになつたのだ。誠に妙な緣で、どんなことがあつても、他に移つてはならぬと云つた澁谷の家を、收二氏が喧嘩をして引き移つた爲めに、乃り今の夫人と結婚することになつたのである。今の夫人は實に感心な方で、獨歩氏にとつては內助の功が大きい。不如意な苦しい生活の中に、不平なく處して、始終變ることなく盡された。

獨歩氏は、番町から、次ぎは赤坂の氷川町、原宿などゝ引き越されたが、最も生活の苦しかつたのは霞ケ關時代で、當時收二氏はシヤムに行かれ、一家は四人暮して、一ケ月四圓五十錢と云ふ家賃の隨分見窄らしい家を借れてゐた。獨歩氏は其苦しい中を、毎日郊外散步して、色々な思ひに耽けられたもので、武藏野に在る「小春」と云ふのは其頃に出來たものだ。それから「忘れ得ぬ人々」は、其頃風呂敷にパンを包んで、入馬川、多摩川などの邊りを步き廻つて實際見た人物や、戰爭當時に接した人々を書いたので、非常に得意なものであつた。

獨歩氏の最も好まれたのは談話であつた。大抵の人が自分の話すことに興味を持つて、聞く事を餘り好まぬものである。獨歩氏にも然うした傾きはあつたが、然し、話すのも上手である

在る詩には、其當時の感想が多い。失戀の後、頭が非常に鋭くなつて、全然詩人的の性格となつた。そして其失戀の苦悶の未だ醒めぬうちに書かれたものに、熱の迸る作物が多い。小說の中に在る戀、それは大抵前の夫人との戀を土産にしたものだ。

澁谷時代は一人で坊さん見たやうな生活をして居られたので、田山花袋氏などは非常に心配し、それではならぬからと云つて、明治三十年四月であつたと記憶する、獨步氏を連れ出して、日光のあるお寺で少時暮らされた。

今の治子夫人と結婚されたのは日光から歸つてからのことで、實に偶然な緣である。澁谷を去つて日光に行かれる時、其留守を引き受けたのは、收二氏と荒川と云ふ人と、私と三人である。獨步氏は出發の際に、どんなことがあつても此の家を捨てゝはならぬと固く言ひ置いて立たれたものだ。澁谷も其頃は今とちがつて、全で田舍で、漸く家と云つては坂下に牛乳屋があつてお茶の代りに牛乳を飲むと云つた風であつた。獨步氏の借りて居られたのは、何とか云人ふの別莊で、非常に氣に入つて居た家である。

其家を、留守中の收二氏と荒木氏が差配の大工と喧嘩して、皆飛び出して了つた。そして麴町の確か二番町であつたと記憶する、其所に引き移つた。獨步氏はそんなことゝは知らず、六月日光から歸つて、東京に着いたのは夜、早速澁谷の家に歸つて見ると、家は空いて居る。別莊守をして居た大工が、其傍の小さい家に住つて居たので、何處に引き移つたか聞いて見ても、何所に行

獨歩氏の人物の半面がよく現はれてゐると云つた。
それから、獨歩氏の製作を通じて、熱烈火のやうなものがある。あれは一面獨歩氏の性格其物にも依るであらうが、一面には獨歩氏の戀が原因して居ると思ふ。獨歩氏が戰爭より歸つた當時、佐々木信子と云ふ女と戀をしたことがある。佐々木信子と云ふ人は、父も母もクリスチヤンで、殊に其母は非常な交際家で、其當時先づ女の才子であつた。從つて信子さんも一通りならぬハイカラで、お互に出入する敎會で戀が成り立つた。非常に熱烈な相思の戀であつた。で、德富蘇峯氏と植村正久氏とが中に立つて、靈南坂の敎會で結婚式を擧げた。其當時の獨歩氏は、生活上得意の時代ではなかつた。漸く民友社からの僅かな月俸で一家の生計を立てゝ居られたので、實を云ふと家政は隨分不如意勝ちであつた。で、ハイカラで節操のない信子さんは、遂に獨歩氏を捨てゝ逃げて了つた。逃げられても信子さんに對する獨歩氏の愛情は決して變らなかつた。幾度か元の通りになつて吳れと、折衝したものであるが、遂に一旦破れた二人の間は元に返すことが出來なかつた。其間の消息に就ては、いろ〳〵の事があるが、誰しも若い血氣にはやる時代の事を追想して見ると隨分冷汗の出ることが多いものであるから、餘り立ち入つて云はぬことにする。兎に角其後も戀に關する問題はあつたやうだが、信子さんとの戀が一番最初の純なるもので、破れた當時の獨歩氏の煩悶は實に深かつた。其後寂しい澁谷に移つてから、獨り鬱々として樂しまず、「君を想ひて」などゝ云ふ風の詩をよく作つた。『山高水長』中に

獨歩氏は前にも云ふ通り、クリスチャンで、極めて謹直な人であつたが、十年以來酒を飲み出した。然し、道樂の少ない人で、話題は餘りなかつた。湯ヶ原などでも、只酒を飲んで、だだつ子のやうに荒れ廻つたものである。酒を飲まない前と、飲み出してからとは、性格の根本に變りはなかつたであらうが、表面は確かに變つた所があつた。全體酒を飲むまでは、總ての事に對して一向かまはない性の人であつたが、酒を嗜むやうになつてから、食物選みが八ヶ間敷くなり、玉突きなどの平民的でない遊びも初められた。以前は只菓子を食つて茶を啜り、詩を吟ずるぐらゐのものであつた。

獨歩氏は極めて短氣な人であつた。人が冗談を云つても、初め一度や二度は唯笑つて聞いて居るが、押してしつこく云ふと、忽ち怒つて、時に依ると鐵拳などが飛ぶこともあつた。尤り、極めて眞面目なところがあつたのだ。

曾つて赤坂氷川町に居た當時、非常に貧乏して、何時でも、俺れに五萬圓を持たしたらすてきなことをやつて見せると口癖のやうに言つて居た。何か氣焔を吐いて終ひになると、其五萬圓のことを口にする。で、そんなら蠣殼町に行つて相場でもやつたら好いだらうと云ふと、馬鹿ア言へ、蛎殼町の相場など誰がするものか、俺れはニユーヨークに行つて相場をやるんだと云つたものだ。此の一語が獨歩氏の奇想天外より來る思想を能く示して居る。德富蘇峰氏の甥に當る松枝彌市と云ふ人（其當時國民新聞に居た）も、此のニユーヨークの相場一件を聞いて、

鳥」など其他二三である。數としては少ないが、其時代の感化が、いろ〳〵な作品の上に表れて居るのは事實である。

郷里に續いて佐伯、それから武藏野、次ぎは鎌倉もある、湯ヶ原もある、戰爭もある。が、それ等は作物の舞臺としては用ひられて居るが、思想上密接なる感化は受けて居られないやうである。

湯ヶ原は獨歩氏の生前最も愛した土地である。獨歩氏が湯ヶ原に行くやうになつたのは、初め私が三度ばかり行つて、湯ヶ原の天地がすつかり氣に入り、其事を獨歩氏に話したのだ。私は元來話が下手なのだが、それでも感じることだけは感じて居たと見え、獨歩氏は行かない前から私の話に依つて湯ヶ原の天地の樣を深く感じ、非常に興味を持たれた。そして其うちの或る話には、殊更深い興味を持つて、それを材料として書かれたのが、運命の中に收められた「湯ヶ原より」である。あれを書く前なぞ、田山花袋氏や其他の人々にあの話を聞かせて喜ばれたものだ。そして、未だ湯ヶ原を見ない前に書かれたものだが、湯ヶ原の風景や空氣が非常に明らかに出て居る。その感じの鋭敏なのには、全く驚いてしまつた。獨歩氏の天才たる面影は斯う云ふ所にも現はれると思ふ。湯ヶ原に行つてから後に書いたのなら、今少し好く出來ただらうと云つて居られたが、後、親しく自分で湯ヶ原の景色に接して書かれた作物が日本新聞に出て居たが、「湯ヶ原より」程明かに湯ヶ原の空氣は出てゐなかつたやうに思ふ。

然に對して研究し初めたのは、鄕里の山中に於いてが其第一歩であつた。また借りて居た家が面白い家庭で、主人と云ふのは餘程潔癖な人で、三人の子供を殘して自殺して了つた。殘つた子供と云ふのは娘で、一番姉が丁度私と同じぐらゐの年であつた。獨歩氏は、一室に籠つて讀書に耽る。倦むと外に出でゝ自然に親しみ、歸つては自分の感じたことを話して、暖かい家庭の團欒を樂しんだものである、其頃山口の奇人として有名であつた白井小助だの、富永有隣などゝ云ふ人の所に出入して、其感化を大分受けられた。富永老人は維新時代の志士で、伊藤博文などは大分困らされたものだ。獨歩集中にある富岡先生と云ふのは、此の富永老人をモデルにしたものである。

　獨歩氏が、此の平生村の山中に於て得た所の感銘が、其殘した製作の三分の二以上は占めて居る。次ぎに獨歩氏の作物を司配した自然は豐後の佐伯である。佐伯には矢野龍溪氏の推薦で鄕塾の敎師として明治二十六年に行つて一年ばかり其所の自然に親しまれた。が、自分アンビシアスな時代なので、二十七年日淸戰爭が初まると同時に、國民新聞の聘に應じて、從軍記者として、戰地に赴かれた。佐伯時代は一年であるが、其短かい一年間に於て、自然に對する憧憬と愛着とは深く獨歩氏の胸に刻まれた。其時代に於て受けた感情は、平生村時代の自然に對する感想と相待つて、獨歩氏の一生を通じて司配し、そして製作上に於ける材料を、非常に多く供給した。それが作物となつて表はれたものが、武藏野中の「源叔父」運命中の「馬上の友」「春の

獨歩氏は銚子で生れたのであるが、郷里として最も記憶に殘されたのは、幼時の長い間親しまれた山口縣熊毛郡平生村である。當時嚴父は既に判事を止めて、其淋しい山の中で、元村長か何かして居た人の、由緒ある舊家を借りて住つて居られた。

實際の所は、私は收二氏とは年も同じであるし、其所の小學校時代からの友人で、其關係から獨歩氏と親密になつたやうな次第である。で、獨歩氏には友人として深く交はつたと云ふよりも寧ろ愛された方である。初めて會つた時も、私は未だほんの田舍小學校の子供だし、獨歩氏は最う早稻田の生徒で六ケしい本なども讀めるので、色々な話を聞かされたものだ。そして私は獨歩氏に對して兄さん〳〵と呼んで居た。

獨歩氏も其時は、何から何まで今とはすつかり違つて居られた。今の機敏な犀利な、何の方面から見ても才子であると云ふことは、其當時から、何も知らない人が見て直ぐ知つたぐらゐであるが、熱心なクリスチャンで、酒も飮まず、煙草も吹はず、どんな炎天の日でもハンカチーフを持たず、傘もさゝないと云つたやうな、非常に堅苦しい人であつた。それで、愛讀書と云つては、先づ聖書が第一で、ウオズオースの詩集なども熱心に愛讀された。其時分にも政治の方面に野心があつたので、ウォーズオースなどのやうな純詩人のものばかりでなく、カアライルだの孟子だのと云ふものも愛讀して居られた。で、一面には極めて熱心なるクリスチャンで、政治の方面に野心を持たれたと同時に、自然の美しさを最も密接に感じられたのは其時代で、自

獨歩氏が生涯の半面

戀の國木田獨歩――自然の大なる感化

岡　落葉

國木田獨歩氏とは大分舊くからの友人である。私は餘り世間に出ないので、獨歩氏と私とに、深い交遊があつたことは、極めて小數の人より知つて居らぬ。然し獨歩氏と友人としての關係は隨分深いのである。年も大分違ふが、舍弟の收二氏と殆んど同じやうに愛されて居た。私との交遊は只個人としての關係で、舊くからて、獨歩氏に就て話せばいろんな事があるが、私との交遊は只個人としての關係で、舊くから獨歩氏の家庭に出入して居るので、獨歩氏の家庭の方面に於て知る所が多い。

私が獨歩氏に初めて會つたのは、獨歩氏が二十一歳の時。丁度徵兵檢査を受ける爲めに、早稻田から其鄕里山口に歸省せられた時のことである。鄕里に就ては未だ明らかに知る人が少ないやうであるが、嚴父は播州龍野藩の人である。家の本生は淡路で、郡は忘れたが其所に行くと今でも國木田の姓があると云ふ事である。然し、幼少の時から其所を出られて、全くは龍野藩で育つた。母堂は下總銚子の人で、嚴父が曾つて其地に於て判事をして居られた時に結婚されたのである。

○原稿は中々書き澁りの方でした。家の方が困るからと云つて賴みましても、そんなことでは決して書きませんでした。原稿締切の前になつて、せつぱ詰まらなければ筆を執らないのでした。國民の友に「忘れ得ぬ人々」だの「川霧」だのを書きました當時も、收二さんが、印刷の組みを開けて、待つて居るのだから早く書いてくれと催促しますと、午後三時迄に書くとか、明日の午前十時迄に書くとか云つて、能く喧嘩でした。

○子供は非常に可愛がりましたが、又、非常にうるさがりもしました。

○おかずには、隨分口やかましい方で、私も苦勞致しました。お酒を飮むものですから、食べても食べなくても、いろ〳〵の皿を數々膳の上に並べないと小言を云ふのです、一皿ぐらゐではどうしても承知しませんでした。

○之れは別のお話ですが、昨日の萬朝に眞山さんの悪口が大變出て居りますが、あんな事は全で事實無根で、どうしてあんなに間違はれるものかと驚いたくらゐであります。眞山さんとは病院で始めてお目にかゝつた程の極新しいお馴染ですが、長い間茅ヶ崎にお出でになり、殆んど一日も缺すことなく、病院へお通ひになつて看護して下さいました。其骨肉も及ばない御親切には、良人も死ぬ迄深く感謝して居りました。然るに其最後にあんな記事が新聞に出たのですから、なんだか御氣の毒で堪りません。

て餘り好い感情を持つて居なかつたものですから大變に怒り、身體が大きい人でしたから、苦もなく宅を抱いて交番に連れて行つたのださうです。二人の男に連れられて歸りましたが、非常に口惜しがつて、短刀を持ち出し之れから行つて殺して來ると、大變な元氣でどうしても止まらないのです。下女は恐ろしがつて泣き出すし、ほんとに困りましたが從つて來た二人の男の人も共々止めて漸く寢かしましたが、私に行つてどう云ふ譯で交番などへ連れて行つたかそれを談判して來いと申しまして、格子の外に突き出して、どうしても聞きませんものですから、仕方なく夜の十二時過ぎ子供を二人連れて、其社長の宅に行きましたら、向ふでも大變氣の毒がりまして謝まつたこともあります。

○又、何時の事でしたか、大晦日に田村三次さんと、ビヤホールで大喧嘩をしたことがありましたさうです。譯は能く知りません。然し、醉ふての上でムいますから、一寢入りして起きるとケロリと忘れて了ふのです。

○文藝の話など、昔は能くして聞かせました。鎌倉に居まして、文藝界などに書いて居た時は、趣向に就て、今度は何う云ふことを書くと云つては話して呉れましたが、近來になつてからは、餘り然うした方面の話は致しませんでした。

○病中は、わけても何彼と無性になりまして、只、お友達の方が訪ねて下すつて、お話するのを何よりの樂みとして居りました。

は可けないとか、進退動作に就ても能く申しましたし、些つとふくれた顔をしても、それに就て理屈を――人間學の講義を長々と初めるのです。人の機嫌の惡い顔が大嫌ひでありました。

○元は餘り酒を飮まない方でありましたが、能く飮むやうになつたのは、報知新聞社の外交記者をして居りました時代で、其時は小說家になると云ふ氣は少しもなく、政治家になるつもりで、其方に野心がありましたから、政黨の人達と、能く紅葉館に飮みに行きました。最も盛んであつたのは、近事畫報から獨歩社時代にかけてゞムいます。

○酒の上は好い方ではムいませんでした。少し飮んだ時と、すつかり大醉した時は好うムいましたが、生醉いの時には一番困りました。

○遊びなぞには、お友達とのおつき合ひなら度々行きましたけれ共、一人では決して行きませんでした。酒は家で飮むのが一番うまいと申して居りました。

○喧嘩が好きで、好きと申すとをかしうムいますが、まあ好きなのでせう、外に出ては能く喧嘩をして來る人でありました。時には、電車の車掌なぞを相手にしたこともあります。人の喧嘩でも、俺れが引き受けると飛び出す方でした。

○或時斯う云ふことがございます。ある小さな新聞のやうなものに關係して居りました時、其の社長の家に醉つて行つて、何か癪に觸つたことがあつたと見えて、主人を散々罵倒した上、亂暴をして、どうかした拍子に硝子を壞したのださうです。所が、其社長と云ふ人は、それま

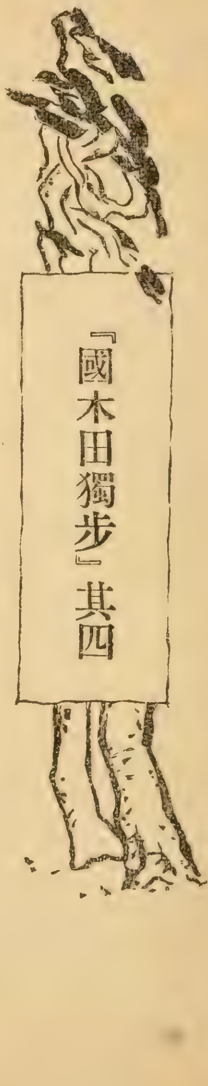
子供の世話などは、隨分口やかましく申しました。

○自分の身のまはり計りではなく、出歩くのも無性で、滅多にお友達の方をお訪ねしたこともありません。然し、散歩は非常に好きで、人の起きない朝早くから能く出かけたこともあります。私も度々日比谷などへ連れ出されて、迷惑したぐらゐで御座います。酒を飲まない以前は、眞面目な手紙を能く出したやうですが、酒を飲むやうになつてから、筆を執るのも無性になりまして、手紙も碌に書きませんでした。

○樂みと申しては、別に何もありませんでした。何分飽きつぽい性分ですから、直ぐ止して了ひます。玉突きなどもやりましたが、餘り好きではありませんでした。碁も打ちましたけれど、ほんの笊碁で、別に熱中すると云ふ程でもありません。まあ、樂みとしては釣りぐらゐのものでせう。やまべ釣りに、わざ〳〵下總まで行つたことも御座います。

○釣を初めましたのも極く近年のことで。鎌倉に居ました時、能く滑川に沙魚釣りに行きましたが、其時から釣りの面白味を覺えたやうで厶います。戰時畫報に居ました時には、忙しい中を、品川に沙魚釣りに出かけました。

○人に話をして聞かせることが非常に好きで、夕飯の時には、何時でも六ヶ敷い理屈を話して聞かせました。私の妹など、兄さんの家に居ると、色々なお話を聞くから怜悧になるけれど、宅に歸ると馬鹿になつて終ふと申して居ました。そんな風では可けないとか、こんな風で



家庭に於ける獨歩

國木田治子夫人

○別に取り立てゝ申上げる程のことも御座いません。家ではどちらかと云ふと嚴格な方で御座いました。それで女中なども、初めは恐い人だと寄り付き難くがりますが、性質を能く知つて了ひますと、好い旦那さんだと申すやうになります。

○お友達の方は、初めは些つと仲が好く見えますが、何分短氣で、直ぐ癇癪を起し、少しの遠慮もなく、思つたことはずん／＼云ひますので、遂に仲が惡くなることがありますけれど、それを通り越して了へば離れても離れることが出來ないと云ふぐらゐ親密な仲になつて了ひます。一體に癇癪持ちでしたから、親しく接しない方からは能く誤解されました。

○自分は無性でしたけれ共、室の散らかつたり、人のだらしない風が嫌ひなので、掃除とか

釋迦と同じ實感に觸れることを願つたのである。驚きたい、恐れたい、戰きたい、悲みたい、泣きたいと云つたのは、則ち然うした實感を透して間接に、求めて求め得られない眞個の信仰を求めた切實な苦しい聲で、現代人の餘儀ない矛盾撞着の苦悶を訴へた最も哀切な響きである。

獨歩氏は誠の詩人であつた。人物には缺點もあつたやうだが、然し又多くの長所があつた。病床に於ける獨歩氏の動作には、余の接した限りに於て以上の外別に取り立てゝ云ふ程のことはないやうに思ふ。然し、其心的經過に於ては必らず大なるものがあつたに違いない。南湖院の一室、其の病床に横つて、獨歩氏は何を思ひ、何を考へたか、絶えず瞬を凝らして物思ふ樣、自分の眼底には其姿が明らかに見える。然し、此の余の眼に浮ぶ獨歩氏の姿は、遂ひに形なき幻影に過ぎぬだらうか。

怒らざるを得ずして怒る人であつた。或る時、文學者以外の人が、文學のことに就て云々したと云つて、泣いて怒つたことがあつた。其誠實の氣には實に胸を打たれずに居られない、吾れ〳〵は肉を慄はしながら聞いた。

病床に在つては、生死宗敎の問題に就て、深く考へられたやうである。宗敎を求めたいと云ふ切實な願ひ――と云ふと輕薄になる、即ち求めずにはどうしても居られない人であつた。然し現代人通有な、求めて求め得られない悲みがあつた。茫々極りない大自然に直接面と面と相接して、眞底から驚き懼れたいと切實に願つたのも、漠々とした大砂漠の中に一人立つて、千古に亘つて介立する吾が生の荒涼を心から悲みたいと望んだのも、蒼々茫々とした天を仰ぎ渺々果てしない海を眺め、地に伏して人生孤獨の寂寥に衷心より泣きたいと云つたのも、求めて求め得られざる眞個、誠の意味に於ける信仰を得たいが爲めであつたらう。

眞個に大自然の大威力に恐れ戰き、人生の空漠を悲しみ吾が生の孤獨と悲哀を切實に痛感して、何物にも捨てられ、何物にも賴る力の世の中にない、絕望の谷底に落ちた深大な實感を痛感して、求めざるを得ずして餘儀なく求めた信仰に非ずんば、眞個の意味に於ける信仰ではない。虛僞の信仰である。キリストが四十日四十夜茫々とした曠野を夢のやうに彷徨ひ歩いたのも、釋迦が山中に遁れて、九年の間苦行したのも、皆此の實感に痛切に觸れて、餘儀なく彷徨はざるを得ずして彷徨ひ、遁れざるを得ずして遁れたのである。獨歩氏は即ち此のキリストや

斯う云ふことがあつた。風のない空の晴れた天氣の好い日、然し、濱には高い波が白く〳〵煙のやうに碎けて居た。看護婦の背に負はれて外に出られた。遠く沖は汐に煙つて、空氣の透明な日には墨繪のやうに見える大島も、其日は見えなかつた。鎌倉、葉山、江の島も一帶にぼうと煙つて、烏帽子岩の邊りに漁船が浮いて居た。見渡すと平塚の町々も見え、馬入河口には、かなり大きい帆船が三艘碇泊して、波に搖れるのまで明らかに見られた。獨步氏は看護婦の背で、空を見ては海を見、あつちに向かせ、此方に向かせ、只、あゝ好いなあと、それだけの感嘆の言葉を幾度も繰り返して發するのみで、終りに富士山が見たいと其方に向くと、生憎其日富士の姿は見えなかつたので非常に失望された。そして十分ばかり方々眺めて居られたが、疲れて苦しいと云つて、寢臺の上に歸り、苦しさうに息づかひして、病人には彌張り寢臺の上が好いと云つて笑つた。或る時に横濱から、わざ〳〵安樂椅子を買つて來て、それを擔架の代りに、外に出たこともあるが、彌張り寢臺の上が一番好いと、一度で止めて了はれた。

病床の獨步氏は、癇癪こそ起されたが、我儘こそ言はれたが、極めて餘裕のある病人で、滑稽なことを云つたり、洒落や警句を吐いては、自分も笑ひ、人も笑はせた。訪問者があると、來客に厭やな感を與へるのは嫌ひだと云つて、苦しい中を勉めて、談話などして、心を盡くされた。

、獨步氏は眞面目な人であつた。怒る時は眞個に怒つた。洒落や興味に乘つて怒るのではない。

姿に接し、心ゆくまで雲の姿に見入りたい、どうしても一度は然うした身體にならねば置かぬと云つて居られた。

獨歩氏の病室の窓の傍で、物佗びしい程靜かな春の空に、高鳴きする揚げ雲雀の音が、恰度獨歩氏の庭に飼つてある鳥のやうに、好く聞えた。岸を打つ靜かな波の音は、遠い〳〵世から響くやうに、茅ヶ崎の濱々に傳はる。獨歩氏は凝つと瞳を据えて、其靜かに緩く、然し、胸の底まで重く響く波の音と、高鳴く雲雀の聲を聞き入る。斯う云ふ時に限つて、默つて一語も發せず、室の中には一種の佗びしさが滿ち渡つて、人々の胸には堪へ難い哀感を覺える。すると、何時か獨歩氏の目から涙が流れて、眼尻から痩せて骨張つた横顔を傳はつて居る。其涙を見ると吾れ〳〵の胸もつい塞がつて了ふ。どうしたんですと聞いても、何でもないと云つて淋しく笑ひに紛らして了ふのが常であつた。

初夏の頃になつて、麥は刈られ、夜に鳴く蛙の聲も老い、雲雀は巣立つて、獨歩氏の窓にも聲を聞かなくなつた。そして獨歩氏は雲雀が近頃は鳴かない〳〵と云つて、あゝ、斯うして居ると變り行く野の有樣も分らないのだと倩々嘆息された。

獨歩氏は病床に在つて、實に深く――眞底から自然を慕ひ、自然を戀はれた。そして少し快くなつたらと、そればかり樂しみにして、我儘な人が苦い藥も進んで飮み、飮み難い肉汁も忍んで飮まれた。

け放つた夕の海を眺めながら夕餉の膳を樂みに、いざ歸らうすると、未だ歸つちや可けない。歸つたら承知しないぞ。と云ふ。這麼時には其餘りな我儘に腹が立つこともある。然し、考へて見ると腹を立てるのは此方が惡い。淋しい夕暮れを、一人此の病床に横はつて、細窓越しに見える侘びしい夕の空を眺め、胸に響く風濤の音を聞いて、獨り泣く病人の心持ちになつて見ると、斯うした我儘を云ふのも決して無理ではない。それに病人は我儘と知り其我儘を許されると信じて我儘を云ふのである。丸り子供のあまえるのと同じことである。至つて罪のない我儘で、可憐しいと云ふと無禮な言かも知れないが、其我儘が浸み〴〵と可憐らしくて堪らなくなる。時に依ると夜の九時ごろまでも置かれることがあつた。

獨歩氏は病床に在つて、絶えず野の姿に憧れた。そして、少し身體が丈夫になつたら、野を散歩して悠久な自然に親み、思ふさま青葉若葉の香を嗅ぎたいと口癖のやうに云つて、夫人や看護婦が野の姿を樂しむ料にもと、花を手折つて瓶に挿し、それを枕頭に飾ると、俺れは這麼瓶に挿した根の無い花などに慰められるのは厭やだ。栽培ず人の手を加へず自然に育つた野の花が見たい、俺れも這麼花に依つて慰められねばならぬやうになつたかと、涙を流して儚なげに泌み〴〵泣かれたが、然し、それを別に捨てるでもなく、彌張り其花を始終眺めて、せめてもの慰さめとして居られた。そして、獨歩氏はむく〳〵と白い、變化に富んだ夏雲の姿が非常に好きで、茫々とした茅ケ崎の濱、その砂山の上に寢轉んで、永遠の濤の音を聞きながら、天地自然の

獨歩氏の姿が明らかに生きて居る。然し、事實に於て死んだのだ。其姿にも、其聲にも、其笑顔にも、最早再び接することは出來ないのである。余は、余の眼に生ける此の獨歩氏の姿を永久に滅し度くない。何時までも、何時までも、南湖院に行けば會へるものとして置きたい。

　病床に於ける獨歩氏は、一言にして盡すと、實に小面の憎い程吾儘な人であつた。死ぬまで其吾が儘を通された。性來氣の短かい人と聞いたが、病氣になつてからは尚ほのこと、些つと氣に食はぬことがあつても、直ぐ癇癪を起して火のやうに怒る。罵る。駄々をこねる。然う並べ立てて見ると、如何にも始末の惡い病人であつたやうに聞えるが、實は却つて始末の好い病人であつた。怒るのも、罵るのも、駄々をこねるのも、わが儘を云ふのも、皆承知の上のことでこちらの出やうで直ぐどうにでも變る。何しろ、病苦を紛らす氣まぐれの癇癪なので、怒る時にはそれこそ心臟が破裂しさうに怒るが、時には、自分の怒るのが自分ながらをかしくなつて、つい笑つて了ふことも度々あつた。吾れ〳〵に對しては遉がに癇癪を起したり、怒つたりはしなかつたが、我儘は能く言つた。殊に青果氏などは、此の我儘で困らせられたことが度々ある。毎日朝の八時ごろから夕の六時ごろまで、晝飯を食ひに鳥渡宿に歸る外、ホカ〳〵と好い天氣を陰氣な病室に詰め切つて、時々は咳嗽の爲に赤くなつて、傍で見るに忍びない程ゲッ〳〵と苦しみ出したり、時には癇癪玉を破裂させる其病人を相手である。夕方になると氣はくさ〳〵して來る。何もしないとは云ふもの丶身體は疲れる。歸つて一風呂浴びて湯上りを、開

中村武羅夫

余は全く健康なりし獨歩氏を知らぬ、又死して冷たく永久に其眼を閉ぢて開かざる獨歩氏の遺骸にも接せぬ。故に、獨歩氏を思ふ毎に、先づ髣髴として余の眼底に浮び來る所のものは病蓐に横はれる窶れし獨歩氏の姿である。髪は白茶けて薄く、眼は鈍く潤みて光りなく、皮膚の脂は乾きて肉は削げ、咳嗽又咳嗽、限りなく頻出し來る咳嗽と、其呼吸必迫の爲めに安眠も得ないで苦みし痛ましき獨歩氏の姿である。余は獨歩氏の死を事實に於て信ずるも、死屍を目擊せざる余の眼には、死したる獨歩氏を思ひ浮ぶることは出來ない。余の眼底に於ける病める獨歩氏の此の姿は永久に生きて滅しない。

獨歩氏の死は事實である。眞實なる事實である、余は事實なるを信ず、信じながら而も尙ほ死したと云ふ氣にはなれない。單に事實を信ずると云ふ事を以て、此の死したと云ふ氣になれない其氣を打消すことは出來ぬ。死したことを信ずるのも事實であれば、死したと云ふ氣になれないのも事實である。獨歩氏の死を明らかに事實と信じながら茅ヶ崎南湖院の一室に行けば、何時にても、病める獨歩氏の姿に接し、其の聲を聞き、其の笑顏を見ることが出來るやうな氣がする。

死んだとは思へぬ。どうしても死んだとは思へぬ。生きて居る、生きて居る、余の眼底には

以前の通り、喀血の御蔭で暫く頓挫して居つた疳癪も少しづゝ頭を持ち揚げて來た樣でした。一旦止まつた喀血は更に同月の十五日に又ございました。此の時の量は一ォンス程で、數日間血痰が續きました當時少々下痢もあつたので御座います。次で二十一日に復一ォンス、其三日目の午後八時半頃、突然二ォンス程の喀血!! 之が最後で御座いまして、血の喀出と同時に何の苦悶もなくして獨歩國木田哲夫氏の玉の緒は永刧に絶え果てたので何の所置を施す暇も無かつたので御座います。其前夜は乾咳が多くて時々醒覺はしたが六時間は眠られたとのこと、當日の體温は午前中の最高が三十六度七分午後は六度三分で、至つて平穩であつたので御座います。食事の全量は熟粥三椀半、刺身一皿、鷄卵三個、生肉汁二〇〇瓦で、そして夕飯までも無事にお濟ませになつたのでございます。

　初めから終りまで非常に熱心懇篤なる注意を以て治療に從事せられた當院長のお心盡くしも終に其甲斐のなかつたのは誠に殘念なことで御座います、併しながら天命の盡くる處人力の又如何ともしがたきことでございませう。獨歩氏は曾て基督教徒のお仲間にお在りなされたとのことですが、少くも入院中の氏には信仰の影さへ見出すことは出來ませんでした。願はくは主イエスを信じ永遠の生命に入るの望を有たれんことを私共は日々切に祈りましたけれども、終に主イエスの袂にお縋りなさるに及びませんでした。私共は深く此のことを悼みます。

ぬ心配じやありませんか」

「それは左様です。けれども僕の友人は腸に穴が穿いて死にましたからネ僕も穴が出來たら駄目だと思つてます」

あとはお互ひに笑つて仕舞ひました。

衰弱は漸々加はるばかりで食氣も一進一退定まりませんでしたが比較的能く食べられた方でした。四月頃からでしたか、何といはれても安靜といふ禁制を破りたがつてゐた氏も流石に體力の衰憊を自覺されたと見えまして最早此頃じや假令院長がベッドから降りろと言はれても僕は動かない大人しくして居ると語られたさうで御座います、御承知な有名の疳癖家で思ふ樣にならぬと二言目には家族の人々へお見舞ひなされた鐵拳も其頃からだん〳〵少くなつたとのことでした。併し（呼吸器を安靜ならしむる爲に發聲を成る可く節減せらるゝ樣毎度御注意申上置きしに拘らず）談話は相變らずで來訪者と快談を試られる時などは數間離れた病室でもあり〳〵其聲を聽き取られる程でした。私共に對しては至つてくだけて居られたので、いつもニコ〳〵しながら輕妙な語調で話して居られました。あれで鐵拳を振りまはす人であらうかと私どもは不思議の一ツとして居たので御座います。前にも申しました樣に咳嗽は常に頻發して居りましたが仕合と喀血が無いので、喜んで居つたことでしたが、終に六月二日の午後排便をしやうとする際に頻咳し次で三オンス程喀血されました。其後は痰中に混血するのみで元氣のよいことは

つた馬入の河邊に釣に行かれ（但し何も釣れなかつたさうです）それから附近(あたり)の畑の中へ食事を運ばせて晝餐をして歸られたとかで、折角まあ心ゆく思ひはされたのでしたが、其後熱が昇つたので大層弱り込んで居られたことも御座いました。五月に入(はい)つてから突然右胸痛と呼吸困難が襲ひました、之は更に右側の滲出性肋膜を併發したのでした。之は間もなく輕快いたしましたが、熱は入院以來平温の日といふは至つて罕で、大抵三十八度内外から九度内外を往來して居ました。今一つの苦惱は咳嗽でございまして隨分いろ〳〵な手當(てあて)も盡しましたが、盛んに發(で)る時には奏功が無くて之が爲に屢々安眠をも妨げられました。氏は自分の病氣は治(なほ)るといふ自信があつたやうではありますが、併し肺に第三期の空洞症状が來たら助からないものと思ふて居られた樣で御座います。或日廻診のをり、

「先生！僕の肺に穴が出來たのじやありますまいネ」

突然の問に私は微笑(わら)つて

「若し穴が出來たとすればどうなさいます？」

「穴が出來ちや困る」

「出來たと言つたらあなたはお塡(ふ)さぎなさるお積りですか」

「それはできません」

「それなら心配したつて仕方がありません。出來たと知つても塡(ふさ)ぐことが出來ねば役に立た

今一つは、獨步氏には極めて咳嗽の多かつたことである。獨步氏ぐらゐ咳嗽の瀕出した患者に接したことがない。之れは餘り談話をされたのが原因して居ると思ふ。兎に角、前途多望の人が、あの若さで亡くなつたと云ふのは、返らぬことながら、實に惜みても尙ほ餘りある次第である。

南湖院第二副長　中村愛子

獨步氏は今年の二月四日といふ日生憎曇つた寒空に夫人に伴はれて當南湖院に來られたので御座います。當時病苦の訴へは咳嗽、咯痰、發熱、それから食氣が少し振はないのと、聲音の嘶嗄とで御座いましまして診斷の結果は兩肺結核の疑ひもあつたのでした。胸部の病症は既に隨分進行して居まして殊に左肺の方が著しかつたので御座います。短時間のそゞろ歩きをお許したのは入院後僅に數日の間丈で、濱邊に備へ附けの海氣室へも一、二度位は行かれたでせう。それから熱の經過がよろしくないので固く安靜を命じてベッドから降りることすらも許さなかつたので御座いますが、氏の鬱勃たる元氣は到底此の拘束に服することができなかつたものと見えまして廻診のをり「安靜に」と注意しますと、急いで二ツ三ツ點頭いてたしかに諾意を表はした人が、他の病室を廻つての歸りがけに見ると、もう病室外の砂原に出てベンチに腰を下してすまして日光浴を爲て居られるなども屢々で、殊に醫者の方でも困りましたのでございます。氏は非常な釣好であつたそうですが或日のこと秘密で誰かに背負さつて氏の病室からは四、五丁も隔た

來客の言葉に耳を貸されたやうである。

獨歩氏と同じ頃に入院した人で、獨歩氏よりは一層重態の患者があつたが、其患者は少しづつではあるが、次第に快方に向つて居る、それにつけても、其重態の患者に先立つて獨歩氏が長逝されたと云ふのは、醫員としての私の身に取つても、實に遺憾に堪へない次第である。文壇の爲めにも悲しむべき事である。

六月二日まで喀血を見ないで、突然其日の午後に喀血されたのは、意外の徵候か自然の徵候かとのお訊があるが、別に變徵と云ふ譯ではない、それを說明するには、いろ〳〵細かい内部の病理から說明せねば分らぬが、極く簡單に云ふと、肺が次第に惡くなつて、糜爛し遂ひに空洞を生ずる、其所で血管の方に故障を生じ、糜爛が血管まで及び、どうかした拍子に其所が破れると、喀血を見るのである。然し、安靜にして居ると血管の方に故障を生じても、時日を經過する其間に其所の血が固まつて了ふから喀血をしない。獨歩氏は、寢臺より降りて、西洋便器に依つて排便をしようとして、喀血されたと聞く。便器による其爲め胸部を壓迫され、それが喀血の原因となつたことゝ考へる。以上の理由に依り、熱發性の結核にても、喀血性の結核にでも、肺病に喀血を見るのは、先づ自然とせねばならぬ。

獨歩氏は每日定まつて發熱した。其溫度表に熱度の平熱を示すのは、つまり藥の力に依つてゞある。

も、自分の思ふ通りになされた。獨步氏が、今少し醫員の言葉を用ゐて、安靜に攝養されたなら、こんなに早く訃報を傳へることは無かつたらうにと、要するに愚痴ではあるが、誠に殘念に思ふ。

入院された當時、右肺も左肺も既に結核菌の爲めに犯されて、健全なる部分は漸く左肺の三分ばかりしかなかつた。然し、それ丈けの重態であつたけれども、醫員の云ふ通りに安靜にして居られたなら、全快は受合へぬにしても、少なくも今少し長く生き得られる事は明らかであつた。一つは壽命でもあらうが、我儘と、強情のために、死期を早めた傾きのあるのは、返す〴〵も殘念である。

病狀が甚しい重態に陷つてからは然うでもなかつたが、私共は、獨步氏に對して、殆んど賴むやうに、呉れ〴〵も安靜の必要なことを說いたが、どうも、あゝした勝ち氣な、短氣な性質の人であるから吾れ〴〵の思ふ通りの養生法をとられなかつた。

獨步氏は病院に居ても、非常に賑やかな方が好きで訪問客を大變喜ばれた。勿論來客は精神に慰樂を與へて好いには相違ないが、何分呼吸器病には、聲を出して喋べるとか笑ふとか、云ふことは甚だ惡いので、訪問客があつても、決して喋べらぬやう、なるたけ訪問者に喋らして靜かに聞かれるやうにと、幾度も注意したが、どうかと云ふと、病人の方が喋つて、訪問客の方が耳を傾けると云ふ方が多かつたらしい。然しひどく惡るくなつてからは、自分は默して、

のことは大久保に居た人達は皆誰でも能く知つて居る所である。

獨歩氏が日常の癖として、今でも眼前に髣髴として居るのは、同君が酒を飲まれる時の樣子で、立膝をして、右手に盃を持つて、盛んに警句を吐き乍ら、さも甘さうに飲んで居られた時です。隨分強い方でした。それで、のべつに餘り理屈を言ふものだから、料理屋や、藝者には何れかと言へば、餘り持てなかつた方で、一時烏森附近の料理屋などでは、國木田さんが御出でになると直ぐ解ります。這入られない前から、壁の土がぼろ／＼落ちますなどと言はれた位です、併しそんな事には一向頓着なして、隨分駄々を捏られたものでした。現に僕が知つて居る内でも、宿の亭主や、他の客などと喧嘩したり、藝者を張り飛ばした事などもありました。けれども如何に醉つて、夜が更けても、假令二時にならうが、三時にならうが、お宅へは必ず歸られました。（平塚篤氏談）

病院に於ける獨歩氏

南湖院長　高田耕安

病院に於ける國木田獨歩氏に就て、今茲に彼れ此れ云ふのは、故人に對して餘り好ましくないから、深くはお話し度くない。入院中も、どちらかと云ふと獨歩氏は吾が儘であつた。自分の爲さんと欲する所は、醫員の言も、看護婦の言も一切斥けて用ゐず、病氣に好くても惡くて

れたし、「二老人」なども、割合ひに早く脫稿された。

「渚」は散文詩のやうな形で小說を試みられたもので、獨步氏の絕筆は「砂漠の雨」と云ふ讀賣の日曜附錄に出た散文詩である。それに就て獨步氏は散文詩は自分が一番得意に思つて居たので、「砂漠の雨」は古くから自分の頭に置いてあつたものだと云はれた。

一月、南湖院に行く前は、生死問題に就て深く考へられ、終ひに死と云ふ言葉を聞き、死と云ふ文字を見ることも恐れて、頻りに植村正久先生に會ひたい〳〵と云つて居られた。僕なんかはキリスト教と云ふものをば、落第した者のやうな形に見えて居るけれ共、どうかして、此の生死と云ふ問題を眞實の意味で解釋する爲めに、自分が詩人であると云ふ事が、まだるつこいならば、眞の意味の宗教家にでもなつて、口で直ちにそれを傳へたいと、眞實に思ふ。最初青年の時代に、自分が眞個に思ひ極めて取らうと思つた道は、宗教家になるか、詩人になるか、此の二つより外ないと思つた。で、選んで自分は詩人を取つたのであるから、死ぬまで其詩人として盡したいけれ共、詩人として立つて居るだけの餘裕がないやうな場合には、直ちにそれを論文にでも書くか、直ちにそれを口で喋べるものになつて死にたい。」と云はれた。其頃の話は總べて、惻々として身に迫るやうに感じた。

そして、こまかに人と交つて行く上の事柄であるとか、自分の成すべき事に對して進むべき覺悟だとか、家庭を組織して行く上の微細なる點の注意まで、實に能く訓へられた。然う云ふ風

そして或る夜のこと、私は何所かの歸りに獨歩氏の宅へ寄ると、之れから君の所へ行かうとする所だと云ふので、一緒に出かけた。そして大久保の闇の通りを歩きながら、「個人々々なんて云ふ者は目的を以て生きて行くものだが、人間が全體として何を目的に進んで行くのであらうか、自分は一念其所に思ひ至ると、人生の空漠たるに、實に堪へられない感がして來る。詩人（獨歩氏の云ふ詩人は分類したる詩人に非ず、廣き意味に於ける文學者なり。）が實に巧妙なる筆を以て描き出した、人間とか社會とか云ふものを見ると、其筆が巧妙であればあるだけ、それ等の人も社會も遂には無くなつて了ふと云ふ感じが、一層鋭く胸に來る。で、吾れ〳〵が靜かに考へて見ると、タイムの流れが、實に大なるものであると、切感せずには居られない。」と、浸み〳〵した調子で言はれた。

最う其頃は發熱の度も高く、夕方などは實に苦しさうであつた。それでも少し工合が好いと、外に出て、十一月の末に一緒に私の借家を探したり何かして下すつたこともある。

十一月の末から十二月の末までに書かれた作物が、「竹の木戸」「二老人」「渚」などである。「渚」はまだ長く續く筈で、話だけはいろ〳〵聞いて居たが、書くに至らずして亡くなられた。「竹の木戸」は實際、あの隣りに、あゝ云ふ植木屋の夫婦が居た。「二老人」はやはり來る人がモデルである。獨歩氏の考では、放浪主義の人間と、非放浪主義の人間の二人を書いて見られたのである。それ等の作をする時には、最う身體は非常に苦しかつたのを、「竹の木戸」は徹宵して書か

ではない。」と云ふので、今度は木村博士の診察を受けた所が肺浸潤と云ふ診斷である。其時は最う既に立派な肺病であつたのだが、醫者もそんなことを本人には言はぬし、獨歩氏も唯咽喉が惡いとばかり思つて居たのだ。恐らく死ぬまでも、重態な肺結核とは思はれなかつたであらう。

九月の四五日ごろに、湊町に轉地して杉田と云ふ人の別莊へ行かれた。其時も始終手紙を寄来されて淋しいから遊びに來い〳〵と云はれたが、私は遂に行かずに了つた。行つた人は小杉未醒氏其他二三人ぐらゐであつたらうと思ふ。『日本』に揭載し初めた長篇小說「暴風」は、其杉田の別莊で書き出したものだが、病氣の爲めに中止して、其儘遂に完結することは出來なかつた。

それから雨聲會の時に一度歸京され、又湊町の方へ行つて、歸京したのは十一月の初めである。其時は非常にやつれ果てゝ、髮の毛なども薄くなり、元氣は盛んであつたけれども、何所か斯う淋しい賴りなげな影が見えた。其時能く人生とは何ぞやと云ふやうな問題が出たり何かして、どうも譯の分らぬ空漠たるものであるけれ共、自分はヒユーマニチイと云ふことに思ひが至り、其事をば實際胸に觸れたと思ふ時が、眞の生命であると感じた。「運命」の中にある「惡魔」の百十一ページから百十五ページまでを讀んで見て吳れ、然うすると君等の所謂人生の寂寞と云ふ事に對する自分の考がよく分るだらうと云はれた。

の所から高青邱の詩集と、私の所からバイブルとを送つた。ウォーヅォースのルーシイ、グレイ、ソリタリー、リクバーなどは、前から幾度となく讀んで居られたが、其時に又、新らしく心に感じて、ルーシイ、グレイの淋しき姿と釣りを垂れて居る時に逢つた老人との間に、同じ運命が行き通つて居ると云ふやうな思ひがして、「都の友へB生より」の一篇を書かれたのである。あの作の一番終ひに「吾れは只滿眼の涙の落つるに任せた」と云ふ其一句が自分ながら非常に胸に響いて、書き終つた時にも眞實に涙が流れて禁ずることが出來なかつたさうだ。

　湯ヶ原から歸つても、矢ッ張り淋しがられて、よく夜だの、朝早くだの訪ねて來られた。私達の行くのが三日も間があると、何故近頃來ないかと云ふぐらゐであつた。大久保會と云ふものをこしらへたのは其時である。何所か躑躅園邊りの家を借りて開くつもりであつたが、其運びに至らず、獨歩氏の宅で第一回を開いた。當時既に酒が惡いからと云つて、會でも決して酒は飮まないことにした。其時に集つたのは大町、戸川、片上、水野其他の人々であつた。其夜は獨歩氏の九州旅行の話やなんかで、別に大した話はなかつたやうに思ふ。

　八月の暑中休暇に、私は恰度歸省したので其頃のことは知らないが、醫者の診察を受けられたのは其間である。初は診斷されることを非常に恐れて人が何程勸めても、どうしても診て貰はれなかつた。それが八日の或る日窪田空穗君が來て、咽喉の惡いには、菊池と云ふ醫師が好いと云ふので、其所へ行つて見て貰つた、所が菊池醫師が云ふのには、「之れは咽喉が惡いだけ

へて居られた時であるから、其轢死者を見ても、痛切に社會組織の不完全を感じられたのである。

其後暫らく湯ヶ原へ轉地された。湯ヶ原には、その前三四度び行かれたことがあると思ふ。湯ヶ原が大變好きで殊に中西屋とは非常に別懇であつた。中西屋の若主人は軍人で、立派な教育もあり、文學の趣味も解して、獨歩氏の崇拜者であつたので、獨歩氏のことを兄さん〳〵と呼んで居ると云ふ風であつた。獨歩氏は行くと、其主人を相手にして溪流に釣りを垂れる。それから日金山、十國峠などにもよく上つたものだ。これらの山は、伊豆、駿河、相摸を一眸の中に見渡すことの出來る非常に景色の好い山である。殊に獨歩氏は、日金山の頂の景色を愛し、常に激賞して居られた。湯ヶ原と云ふ土地は、一帶相摸の海から、一里ばかり山に入つた所で、溪流があつて山が近く、其溪流には橋が四つばかり懸り、湯屋が皆瀟洒たる造作で、いかにもさつぱりした、若々しい感じを與へる所である。そして中西屋の別莊が少し小高い所にあり、眺望が中々好いので、何時でも其一室に居られた。其所を材料にして出來た作物が、「湯ヶ原より」と「戀を戀する人」とである。

最後に行つた時には、非常に淋しがつて居られ、箱根を越えて田山花袋氏が訪ねて行くと大變な喜びで、夜を徹して話をされたさうだ。そして田山氏の歸りに賴んで、何か讀む物を送つて呉れいと云ふとて、田山氏はチエホツフのブラツクモンクと、ウオヅオースの詩集と、小杉未醒氏

て置き給へ。」と云つて朝四時ぐらゐから起きては戸山ヶ原を散歩する。その歸りだと云つて、朝早く寄られたことが少くなかつた。

恰度其頃、例の散歩歸りに悲慘な轢死者を見られた。其前の晩、雨が地を叩くやうにしつきりなしに降つて居たが、朝方になつて小降りになり、次第に止んで來た。それで、長男の寅男君を連れて戸山ヶ原に散歩に出かけ、踏切の所に行くと轢死者があつた。死骸を線路から出して傍の草原の中に引き込み、莚を被せてあつた。見ると線路の上には、黑い血が流れて、レールの冷たい鐵には、赤い生々とした血が長く流れ傳つて居た。そして、線路坑夫らしい者が二三人と、村役場員のやうな者が二人ばかり、死骸の番をして居た。其坑夫等が集つて話し合つて居るのに、二三日前から此の邊にウロ〳〵ウロついて居たあの男だが、昨夜の雨で最うどうすることも出來ず、ずぶ濡れになつた上多少腹も空いて居たらうから、此の道に轉げ込んで居た所を轢かれたのであらうと云ふ。その死骸を見、其話を聞いて獨歩氏は非常に感動して、書かれたのが「窮死」で、其哀れなる轢死者は「窮死」の主人公である。つまりそれを書かれた意味は、死なうと云ふ意識があつて死んだのではなくて、自然の境遇がどうしても只一人の人間を死なさずには置かなかつた。一方から云ふと自然の無情だと云ふことゝ、一方からは人間の社會組織の不完全だと云ふことを問題にして書かれたのである。其頃は然うした問題を考

鳴いた。其聲が鈴を振るやうに如何にも美しいので、獨歩氏はすつかり氣に入つて了つて大事に飼つた。所が、湊に行かれた留守中に、どうした油斷からか逃げて了つた。歸つた後で其事を知つて非常に失望落膽し、病中でも其鶉の事を時々言はれて、心配されたさうである。然うした所にも、獨歩氏の半面の詩人的性格が窺はれて面白い。

吉江孤雁

獨歩社を解散した後、大久保に移られたのは四十年四月の初めで、四十一年の二月南湖院に入院するまで居られたのであるが、其間に、湯ヶ原に行き、常陸の湊に行かれたので、大久保に居つたのは、ほんの僅かな間である。

大久保に來られる前、即ち獨歩社時代から始終喉が痛いと云つて居られた。そして夕方は何時も定まつて發熱する。其時分からして、何所か空氣の好い處を選んで、二三ヶ月靜養せねばならぬと云つて居た。獨歩社解散後大久保に來られたのは、東京の中でも一番空氣が好いと云ふので、それで轉地のやうなつもりで來たのである。今考へて見ると、其頃から心の中に、餘程淋しさを感じて居たやうに思へる。夕方など話しに行くと、「今日、朝早く起きて、幾年ぶりで自然界に彷徨ひ、自然にゆつたりと包まれたやうな氣がした、そして朝の戸山ヶ原に立つて、青葉若葉の香ひを嗅ぎ、蒼茫極りない空を見て居ると、孤獨の感に堪へないで、ホロ／＼涙が

と云つたやうな、極めて簡單な、而も淸楚な會であつた。自分や大町桂月氏などは老人連中で、他の若い人々たちとはどうも話の調子が合はない。全然二つに別れると云ふでもなく、其所が妙な工合であつたが、獨歩氏は其中間に立つて、例の調子で、中々斡旋の勞を取られたものである。

その大久保會は昨年の八九月で、獨歩氏の病勢は大分重く、常陸の湊に行かれる前であつたと記憶して居る。

獨歩氏の釣りが好きであつたことは、人の皆知る所である。新聞にも出て居た。去年博覽會で一本の釣竿に大枚二十圓出して買はれたのは、獨歩氏の大久保時代である。賣り渡しの時間を待ち兼ねて、時計を見ながら直ぐ買ひ取つたものださうだ。然し、それを一度も釣りに試みず、死ぬ數日前、漸く寢臺の上で釣する眞似をして心をやられたとは、聞くだけでも涙が滾れる。

それから大久保時代に斯う云ふ事がある。獨歩氏の親類の人で、日露戰爭當時旅順から鶉を持つて歸り、其一つがひを獨歩氏に送つた。內地の鶉と違つて、形の極めて小さな可愛らしいものであつたさうだ。外でも方々飼つたが皆死んで了つて、獨歩氏の鶉だけ餌について助かつた。所が其鶉がどうしても鳴かないので、短氣な獨歩氏はじれ込んで、腹を立てゝ、終には其籠を力の限り宙に振り廻したことさへある。それでも鶉は何のことなく、其中或る朝、初めて

大久保に獨歩氏の來られたのは、確か去年の四月、芝の櫻田本鄉町から移轉されたので、獨歩社を解散すると直ぐであつたと記憶する。獨歩氏は餘り自分の家に來られなかつたが、長男寅男君と夫人とは能く來られたものである。寅男君の如きは、私の家に雛が飼つてあるので雛鳥が居たそれが非常に欲しくて、ひよこの小母さん〳〵と云つて始終來られた。そして、一番好いのを一羽上げる約束にして、其儘になつて居るくらゐである。

前にも些つと云つたが、獨歩氏の友情に篤い、時には己れを犧牲に供しても、親しい友の爲めに盡くすと云ふのは、忘るべからざる獨歩氏の美德であると思ふ。其一例として、近事畫報社が潰れて、矢野龍溪氏が退かれる時に、共に退いて居られたなら、大久保時代の生活の苦鬪もなく、又、あゝした病氣にも罹られなかつたであらう。獨歩氏の病氣は。全く獨歩社時代の過度の激勞にあると思ふ。何故龍溪氏と共に退かれなかつたかと云ふに、それは他にも種々な理由があるであらうが、近事畫報社を潰して了ふと、部下の人々が直ちに生活の爲めに差し支へる所があるので、自分一己の力で引き繼いで、更に獨歩社として經營されたものらしい。然し、それも失敗に終つて了つた。それが原因で逆境に立たれたのである。

それから獨歩氏の發議で、吉江孤雁氏水野葉舟氏などが世話役で、大久保會なるものが開かれた。回數は僅か二回であつたが、中々面白い會で、之れは大久保に居る文士連中が集つて雜談するのである。會は獨歩氏の宅で開いた。酒は出ず唯鰻飯を食つて菓子をつまみ、茶を啜る

はせぬ。と、自分でも始終口にして居られたやうに、其生活の苦しい中でも、決して其生活の苦痛を遁れる爲めに濫作すると云ふやうなことは毫もなかつた。其藝術的良心の正しかつたのには、唯感服するより外はない。然し、其裏面に夫人の功績の大きい事を忘れてはならぬ。生活の苦闘の中に立つて、其方面の經營に敏腕なる夫人は、一言の不平もなくして努められたのは實に敬服の至りである。

自分と獨歩氏との、文藝上の意見は、略々相通つて居た。何時であつたか、龍土會の席上で、獨歩氏と自分と大いに自然主義を論じたことがある。其席上では、獨歩氏の意見と自分とは正反對であつたが、歸つてから更に論じたら、歸する所は同じであつた。

其以前は知らぬが、大久保時代には、お互ひに餘り出歩かなかつた。獨歩氏が他を訪問されたことを滅多に知らぬ。然し、交遊は隨分廣かつたやうだ。それも文士とか藝術家とか云ふ方面の人々に限られては居ない。獨歩社時代に關係されたあらゆる方面の人々が集つて來たやうである。充り文士以外に廣く友人知己を持つて居られたのだ。

獨歩氏は餘り出歩かれないにも係らず、大久保に獨歩氏の居られた間は、何となく賑やかな氣持ちがしたが、大久保を引き上げられてからは、吾れ〳〵は皆淋しい思がした。茅ケ崎で早く大久保に歸りたい、是非一度歸ると云はれたのを聞いて、あゝ早く歸つて來られたら、どんなに愉快であらうと、何となく歸つて來られるのを待ち望んだ。

である。即ち、私には學校に出て教鞭を執ると云ふ藝があるのである。獨歩氏には新聞雜誌を經營する藝があつた。然しそれも多くは失敗に終つて居る。獨歩氏には絶えず、人として世の中に立つ以上は、何か事業をやらねばならぬと云ふ考へがあつたらしい。

　獨歩氏は極めて感情の强い、そして友誼に篤い人であつた。それだけ感情に動き易い、怒るのも怒るが、亦、些細なことにでも直ちに感激して喜ぶ。獨歩氏は珍らしいものが好きであつた。殊に珍らしい物を味つて、味覺を喜ばすと云ふことが好きであつた。自分の家などで、何か珍らしい到來ものがある。それをほんの少しでも裾分けすると無上に喜こんだものである。そして自分の家でも、何か變つたものがあると、直ぐ送り屆けて呉れたものだ。斯うした大久保の村的生活に於て、獨歩氏の人性に篤い所は、遺憾なく現はれた。先日病院でも言つて居られた、僕は大久保が好い、大久保が一番好きだ。出齒龜があつたつて何があつたつて、僕は少し身體が好くなつたら是非一度大久保に歸る。そして、元の家に入つて、家主に相談して今一間建て增しをして貰つて其所に入りたい。と云つて居られた。あゝ、其獨歩氏は最う亡くなられたのだ。思ふと人生の儚なさが浸み〳〵と味はれる。

　大久保時代に於ては、別に奇行逸話と云ふやうなことは、餘り見せず、又聞きもしなかつた。藝術上の煩悶とか、其他、別に心的波瀾は無かつたやうであるが、生活の方面では隨分苦鬪されたらしい。然し、どんなに苦しくても、筆を執つて、心にもないことを漫りに書くこと

ないが、好い惡いは別問題として、獨歩氏に會つて話して見ると、其談話の材料が各方面に亘つて廣いには驚く。獨歩氏は、小說以外に天地はないと云ふやうな、そんな狹い人ではなかつた。何を話しても、何を語つても面白い人であつた。それに、他の人々のやうに、小說の爲めに小說を書くと云つたやうな所が獨歩氏にはない、或は自分の臆測に過ぎないかも知れぬが、どうも小說を自分の思想なり、感情なり、乃至趣味なりを謳ふ、一つの方法として居られたやうである。自分が南湖院にて獨歩氏と最後に話した時、此の病氣が全快したら、社會的方面から大いに作をしやうと云つて居られた。社會的方面と云ふと或は社會主義などの爲めに小說を書くと云ふ誤解があるかも知れないが、獨歩氏のは然うした意味の社會的方面ではない。つまり、小說を絕對的立場に置かず、社會と相對的關係の下に置いて書くと云ふ意味である。此の意味からして獨歩氏は小說の爲めに小說を書く人ではないと思ふ。

それに、獨歩氏は單に小說家として滿足することの出來ない人であつた。絕えず何か他の事業を夢み、空想から空想を追うて、其空想を實現しやうとする人であつた。極端に云ふと、實は小說を書くのは、ほんの餘暇で、新聞雜誌の經營に、最も重きを置き多大の精力を其爲めに費されたやうである。

獨歩氏は自分に向つて、君等には藝があつて好い。僕には藝がないからいざと云ふ場合に困ると言つて居られた。獨歩氏の藝と云ふのは、筆を執る以外に他に食ふ道があることを云ふの

印象が薄れた頃、壯健な時分の獨歩君を思ひ出して、描いて殘して置き度いものと小杉君とも相談して居ることだ。

大久保時代の獨歩氏

戸川秋骨

國木田獨歩氏と自分との交際の日は、まだ極めて淺い。二十八人集などへ筆を執つて居るから、或は舊くからの親しい友人であるやうに思はれて居るかも知れないが、去年自分が田舍から出て大久保の人間となつてから、始めて會つたのだ。自分は獨歩氏に會ふまでは、其作物などに依つて人物を想像し、普通輕薄の人ではないと思つて居た。會つて話して見ると實に深く考へる人である。深く考へると云ふと語弊があるかも知れないが、總てを深刻に考へ、些細なことをも眞面目に思ふ人であると云ふ事を知つた。獨歩氏の人物の偉い所、つまり傑れた作物のある所以は、其深刻に考へ眞面目に思ふと云ふ所にあると思ふ。

普通大抵の小說家とか詩人とか云ふ人々は、自分の職業以外に融通のきかぬ者が多い、些つと會つて話して見ても、小說とか、乃至詩とか云ふ方面以外の事はテンデ話せない。それは、自分の職業に對して忠實であるとか、或は熱中して居るとかで、極めて好い事であるかも知れ

れぬといつて殘念がつて居た。それで小杉君や何かも心配して「外の方は少し止めて專心創作に掛かつたら如何か」と忠告したが行きがゝり上獨歩君も止すことが出來ず、ああいふ風になつて了つた。獨歩社時分には始終畫を描いてゐたが、僕でも小杉君でも報酬は定まつて居たけれど大抵取らずに濟んだ。それは國木田君の得であつたので、金は取れなくつても不平を言はず、みな一家族のやうに親睦してやれるところまでやつたのだ。然し心配の主になつたのは矢張り獨歩君で、何しろ奈何も餘程困つて居たやうであつた。それでも獨歩君は非常に餘裕のあつた人で、好きであつた所以もあらうが、近時畫報社が潰れて、いよ／＼獨歩君が引受けることゝなつた時分——他の人なら大混亂を生ずるやうな時分に、鷹見君の郷里へヒョイと釣に出掛けたりなぞして非常に餘裕を示して居た。鷹見君の郷里は野田の少し先きになつて居るがそこへはよく出掛けたやうだ。それから品川沖へもよく行つた。僕も二三遍一緒に行つた。そして獨歩社時代には大分行つたやうで、釣りに行つて船の中で酒を飲み持病の「痔」が惡くなつたと弱つて居たこともある。

繪畫に對する趣味はあつた、可なり解つて居たやうで鑑賞の目も利いて居たが、何しろ忙しく展覽會などへもゆつくり行かれず、格別批評などしたこともなかつたやうだ。茅ケ崎の方へ一番終ひに見舞に行つた時今度寫眞を撮つたから、それが出來上つたら一つ肖像を畫いて呉れといつたが、未だその寫眞を見ないうちに獨歩君は死んで了つた。いづれ、病中や死去の折の

たので獨步君が僕の引込み思案を笑つて付けた名だ。然しそれは決して惡口ではない獨步君は容易に惡口をいふ人ではなかつた。僕は寧ろ良い意味に取つて居る、然し性格はそれほど違つて居ても、僕の作品などには非常に同情を以て見て呉れて、交際は實に親密であつた。現に「一かりそめのなやみ」の題名も獨步君が大變に心配して付けて呉れた名である。僕は恁んな議論などせぬ性質だからいろ／＼な談話はしたが議論風になつたことはない。つまり普通の仕事の上の話とか相談とかに止つて居る、だから頗る平凡な付合ひで、然し又何處かに親密な所があるといつたやうな風のものである。で、僕は獨步社時代の君に就いて格別話すやうなことも記憶して居らぬ。その時分は小杉君が一番親密で意氣も投合して居たやうだから、同君が一番よく知つてるだらう。

僕が獨步君と知つたのは近時畫報社時代だ。その頃獨步君は編輯長で編輯會議などには社長の代りに出席して居た。それが戰爭が始まつて戰時畫報社となり、やがて獨步社となつたのだ。戰時畫報時代には畫家も大分澤山居たが、獨步社になつてからは小杉君と僕と田內君との三人で、田內君は温和しい仕事一方の人であつたから、まあ小杉君と僕二人と言つても宜いやうなものだ。獨步君がいよ／＼獨步社を起したのは夏時分で、それが翌年の二三月頃にはもう倒れて了つた。よほど難局に居たやうで病氣の原因もやはりその時分の心配にある。僕はその時分製作ばかりやつて居たのであまりよく事情を知らぬが、獨步君はよく自分でも專心に創作に掛

を見るに至つた原因であらうと思ひますが、何しろ驚く可き精力であつたのです。

獨歩氏が鎌倉に放浪してゐた頃、國民新聞社の編輯局に來て、戸の外から「何の某が居るかい」と怒鳴つて當時の編輯長の名を呼びながら戸を開けた。所が賣り言葉に買言葉で、其編輯長は「何の某はこゝに居る、なんだい」と怒鳴りかへした。獨歩氏は其れを聞くと同時にドアをぴしやりと締めて、ぷいと歸つてしまつた。それ以來決して國民新聞の編輯局に來たことはなかつた。其編輯長と云ふ人は極めて圓滿な好い人であるけれども、一面公人としては自分の威嚴や人格を少しでも害されると非常に怒る人であつたので、編輯長と云ふ肩書から獨歩氏の言葉を不快に思つたらうし、又獨歩氏もあゝした短氣な怒り易い人であつたから、そんな喧嘩も起つたのだ。自分は其事に就て一晩獨歩氏と議論をした。獨歩氏も下らず、自分も下らず、夜を徹してお互ひに一歩も讓らず議論した。其時、自分は獨歩氏は實に復讐の念の強い、極めて剛愎な感情の烈しい人であるとつくづく思つた。(吉野左右衛門氏談)

獨歩社時代の獨歩氏

滿谷國四郎

獨歩君と自分とは性格が餘程相違して居た。僕は此の通りグズグズした方、獨歩君はあの通り快活な、何方(どつち)かといふと烈しい方の人で、まあ殆ど反對な性格といつて宜からう。その頃畫報社で一同(みんな)が僕のことを翁々と呼んで居た。是は獨歩君が流行(はや)らせた綽名で、獨歩君等が酒を飲んだり遊んだりする時いつでも僕が外(はづ)して了ひ、その他の事でも大抵口實を設けて付合はなかつ

云ふ月は幾ら賣高が殖えても、宛にはなるものでない。此の機會に乘じて、何か目新しいもので、驚かさなくてはならぬ。と言つて、夢寐の間までも、將來の發展に就て、苦心して居られました。

其内に滿韓の風雲が、段々險しくなつて來たので、機を見るに敏なる君は、直ちに各新聞紙上に、戰端を開くと共に戰時畫報と改題する旨を廣告し、同時に小杉未醒君を韓國に、小山先生を佐世保に特派して、戰前の活動を盛んに描寫して揭載したので、此頃から、出版界に於る東洋畫報の位置は、稍々人目を引く樣になつたのです。

間もなく二月七日の旅順攻擊!!獨歩君の計畫は見事に的中しました。直ぐに月三回の發行になる、寫眞師を特派する、宛で火の樣に活動したのが、一々其の効果を現して來て、微々たる昨の東洋畫報は、一躍して有數の大雜誌となり、或る時は印刷が間に合はないで、機械に火を發したと云はれた位です。

此頃から、雜誌の方が非常に多忙なので、作物の方は餘り手を付けられぬ樣になりました。又實際暇もなかつたので、何しろ朝目が覺めると、枕頭にある市内の新聞全部、それから重立つた田舍新聞まで、隅から隅まで目を通される。これが何うしても二三時間はかゝります。夫が濟むと食事、續いて十時か十一時頃は編輯局に出て來る。客が來る。繪が屆く、寫眞の說明をする。各種の命令をする。其内には日が暮れて了ふのです。其の時の疲勞は、やがて這回の不幸

獨歩君は彼云ふ氣象の人でしたから、常に自分の作物が、世間から顧られないのが、內心餘程不平だつたので、時々僕等に、其の餘憤を洩された事がありました。(其頃でした。帝國文學の批評欄で、文藝界に載つた、何かの小說を二三行評して、其の冒頭に『此の作者姓は國木田名は獨歩、少しは文壇に野心のある男と見えたり』と云ふ樣な事が書いてあつたので非常に憤慨された事がありました)随て自分の作物を、誰々が愛讀して居ると云ふ話をすると、無上に喜ばれる、それで臨川君とは、一見直ちに百年の知己となられたのです、爾來臨終まで、臨川君とは、肉親の兄弟も及ばぬ樣な、深い親みを續けて居ました。

初めて東洋畫報を發刊してからの君の苦心などは、實に慘憺たるもので、計畫の大體は龍溪先生が、凡て立てられると云ふ事になつて居りましたが、其の帷幕には、大小となく君が參して居たので、殆んど君一人に成つたと云つても、宜しい位なのです。出版界も當時は誠に活氣の無い頃でしたから、東洋畫報も、折角苦心をして作つても、經費は每月缺損續きで、夫れも隨分多額なものでしたので、經營者の內には早くも廢刊說が一再ならず唱道されたのでしたが、君と龍溪先生とは、頑として聞入れない。それで三十六年も終つたのです。

三十七年の正月に、何か一つ奇拔な事をして、人氣を集めなければ、維持が立てぬと云ふので、親ら『親子』と云ふ小說を書いて、金貨百圓の寶さがしを遣りました(總體の考案はチット、ビットから取つたのです)所が是が妙に人氣を呼んで、急に賣高が增したけれども、正月と

です。それで早速右の原稿を持歸つて、色々窪田君や何かと相談して『山彦』の方から僅か拾圓を贈る事にして、翌日其金を持つて、往つたのです。すると非常に悦ばれて、あれ丈書いて拾圓とは、情ない樣だが、他の書店から、百圓呉れたよりも嬉しいと云つて、大變に喜ばれました。其の原稿は『運命』の卷頭にある『運命論者』です。

當時は君も非常な逆境に居られたのを、龍溪先生が近事畫報を發刊する計畫があつたので、態々君を鎌倉から、引出された時なのです。それで逆境とは云ふものゝ、鎌倉に居られた頃程では無かつた樣ですが、先生からの手當と云つては、極めて僅かな金で、それでは兎ても生活する事が出來ないので、此頃から再び文筆に親まれて、重に金港堂の諸雜誌に獨得の文を寄せられました。けれども勿論、世間では、何とも噂すらゑませんでした。

併し知己は、充分に獨步君の偉大なる作物を尊重して居ました。中澤臨川君なども其の一人で、三十六年の春でしたか何か近事畫報（當時は東洋畫報と云ひました）の初號に、科學的の原稿が欲しいのだが、誰か書いて呉れる人はあるまいかと云ふので、僕の友人に、今ま工科大學に居る中澤と云ふ人がある。此人は疾うから、君の作物を愛讀して、非常に畏敬して居て、文學の方に多大の趣味を有して居るから、此の人に賴んで見たら宜からうと云ふと、大層に悦ばれて、それでは早速紹介して呉れ、一緒に訪ねやうぢや無いかと云ふので、相伴つて本鄕眞砂町の假寓に訪問しました。これが獨步君と臨川君と相交はれた最初です。

て、赤阪の奥樣のお宅へ來て吳れ、原稿が出來たからと云ふ端書が來たので、早速御訪ねして、貰つて來たのが獨歩集にある『湯河原より』です。其時の御話に、君の方へ遣る積りで、『第三者』と云ふのを書いたのだけれど、餘り長くなつたから、文藝に送つたと云つて、詳しく其筋を語られ、結末で、二人が情死に終る點などは、餘程得意の樣でした。

靑年會舘で、何かの會の折に、『淺薄なる動物あり、其名を女と言ふ』と絕叫して、滿場を驚かした君の持論は、女子禽獸論と云ふのでした。『第三者』は此の思想から、互に相愛せる男女に、思ひ切つて冷酷な觀察を加へたものだ。文藝倶樂部の事だから、僕なんかの作は、半年經つて出るか、一年經つて出るか、解らないが、出たら是非讀んで吳れたまへ、可成苦心したものだ。と言はれた言葉は、今だにあり〳〵と耳に殘つて居ます。

夫れから又暫く鎌倉に御出で、恰度三十六年暮の二十五日でした。今度は芝區櫻田本鄕町に居を移したから、遊びに來い、外に賴みたい事もあるから、出來るなら明朝來て吳れと云ふ端書が來たので、直に御伺ひすると、やがて筐底から、一綴の原稿を出して、何とかして此の原稿で金を調達して吳れまいか、幾らでも宜い、實は僞うなのだ、と云つて語られた所に依ると、『小天地』にもやつた。『文藝』にもやつた。『新小說』にもやつたが皆な斷はられて了つたので、實に癪に觸つて堪らぬ。僕の作としては隨分苦心したものなのだが、何うも讀者に向かんそうだ。幾らでも宜いから、何とかして吳れ、出來れば稍正月らしい正月も出來るんだ。と云ふの

改良するのに苦心せられたやうである。獨歩社が解散して氏が病氣保養に常陸の湊に行つて居られた時分にも、病氣さへ好くなれば、再び出版をやつて見たいと云つて居たから、出版事業には餘程興味を持つて居つたことゝ思ふ。

平塚篤

獨歩君と僕とは、そんなに古い知己では無かつたのですが、ふとした事が縁で、非常に親密になり、年少な僕は、常に兄とも、師とも畏敬いたし、獨歩君も、僕を非常に可愛がつて、全で一時は弟の様に、いたはつて呉れました。

初めて遇つたのは、何時でしたか一寸忘れましたが、何んでも民聲新報をやつて居られた頃です。僕は其頃は何しろ十六七の腕白盛りでしたが、文學が最も好きで年齢よりは多少ませて居た故か、武藏野などは、大好きな書の一つでありました。其後窪田君、水野君、吉江君、中澤君などと共に、山彦と云ふ小さな雜誌を發刊したので、何うか獨歩君の作を載せたい。是非何か書いて貰ひたいと云ふ、一般の希望から、僕は度々手紙を出して、當時鎌倉に居られた君に原稿を頼んだが、中々書いて呉れない。時に端書に、泊り掛けで遊びに來い。何も御馳走はないが、由比が濱の濤聲と、僕の氣焔を聞きに來い。徹宵して大に語るから、と云ふ様な事を書いてよこされましたが、遂に折がなくて、鎌倉には御伺しませんでした。所がそれから暫くし

其の年の九月、僕は歸朝した。それからも、ちよく〳〵社へ遊びに行つてる內に、ずる〳〵に社員の一人となつたやうな譯だ。其頃社は櫻田本鄕町から兼房町へ移轉して居た。可なり廣い家で、元は何でも鳥屋であつたさうだ、道理で、間數が馬鹿に多い、十二間位は結構あつただらう、前の方の二階が編輯室で、後の方の二階が氏の住居して居た處だ。其の頃は社も全盛だつた。世間では、よく獨歩氏が盛んに金儲けをして居ると云つた。實際さう思つて居た人が多かつたらしいが、それは非常な間違ひである、獨歩氏は社宅（？）に居て、餘り多からぬ月給で編輯長をして居られたので、決して金儲所の騷ぎぢやなかつた。

僕はかうして獨歩氏と相識つたので、作品よりも何よりも先づ其の人物を識つたのである。作品などは餘程後に出た沼波瓊音君の「獨歩論」に依つて識つた位で、それ迄は少しも讀まなかつた。實際作品については、沼波君に啓發されて始めて分つたやうな次第である。沼波君と獨歩氏との關係を世間では妙に解釋する者があつたが、あれは僕が紹介して始めて二人會つたので、「獨歩論」が出て餘程後のことである。

當時、社は全盛であつた。月三回の畫報が一回に三四萬も賣れたさうであるから、一ヶ月十萬以上出た割合である。それからが盛んに種々なものを亂發した時代に入るのだ。そんなに賣れたのも、僕は獨歩氏が勉强の結果であると信じてゐる、實際氏は出版に關して興味を持つて居られたからでもあらうが、實に熱心で驚く可き勉强家であつた。常に新らしい考案をして、雜誌を

繪畫の方には小山正太郎氏が主任であつた。

僕は始めから社員となつたのではない。三十七年の正月に特派員として傭はれたので、直ぐに戰地に向つて出發した。それ迄は「國木田獨步」と云ふ人があるか無いかと云ふことも知らないし、其の人が文豪であるなどゝは勿論知らない。第一僕は氏の作品など見たことも無かつたのだ。獨步氏と始めて會つたのは、戰地に出發する日に新橋の停車場であつた。僕がプラットホームを步いて居ると、誰か知らんが、小さい男が僕の傍へ駈けて來て、手をひッぱつて、「僕が國木田だ」と、酷く醉つぱらつて、盛んなことを云ひながら勵ましてくれる。初對面と云ふやうな感は少しも起らない、僕は面白い人間だと思つて出發の途についた。

これは後に聞いた話であるが、其の時獨步氏は非常に醉ふて居たので、プラットホームで入場券を遺失した。改札口へ來て幾ら探しても無い。

「無いぢや困る。」と、驛夫が云ふ。

「無い者を何故入れたのだ。」と、獨步氏は非常に憤慨して、一場の議論が初まり、とう〳〵驛長室に引ッぱり込まれる。獨步氏は益々憤慨する、盛に驛長を罵倒し出す、「下らない規則に拘泥して、紳士に無禮をする」と、かうだ。驛長も流石に弱つたことだらう、あの熱辯で滔々とやられては、堪つたものでない。僕の兄も見送りに來てくれて、丁度其れを見て、恐ろしい元氣の好い人だと魂消げたさうだ。

の活動的なそれと反して、專ら悠々として意を養ふ時代であつた。そして獨歩社經營の念もやはり鎌倉時代に生じ、企畫されたものであると思ふ。

獨歩氏は釣が最も好きで、碁もやり、玉も突いたが、思ひ切つて下手な方であつた。玉は僕と同時に同處で始めて、一時は隨分熱心にやつたが、中々上達しない。それでも例の負けじ魂で、幾ら強い人に對しても、必ず對で無ければ突かず、自分よりは、百も二百も上の人に向つて、遠慮會釋もなく、色々理論を講義する。だから今でも玉屋の小僧が、國木田さんと言ふと、直ぐに「文句澤山の玉當らず」などゝ云つて、笑つて居る位です。鬪球も中々上手であつた。（平塚篤氏談）

近時畫報社時代の獨歩氏

小杉未醒

僕が近事畫報社と關係したのは戰爭の初まつた頃だから、創立當時のことは熟くは知らぬ。何でも獨歩氏は鎌倉に居て非常に貧乏して居られたのを、矢野龍溪氏が招いて、編輯を任かせたので、獨歩氏も其の知己に感じ、大いにやる積りになつたのだと聞いて居る。始めは「東洋畫報」と云つて居たのが、「近事畫報」となり、「戰事畫報」となつたので、獨歩氏が編輯長で、

した。

「運命」ですか、あれは先刻も云つた通り度々戻つて來た。今でこそ……此頃でこそ獨歩々々と崇拜もするが、あの時分には獨歩の進んだ思想がわからないでキッパリ刎ね付けた連中が未だ其處等に澤山居る筈です。人間といふものは輕薄なものさ………あの「運命」だつて他の人なら得意氣にその趣向を誇す所だが、國木田君は然うでなかつた。如那ゝいふ長椅子みたいな砂地に自身横はつて見て、此處へ恁う德利を隱して、恁う煩悶を抱いた人を立たして、書いてみたいとボンヤリ言つただけで、格別自慢もせず、傑作だとも感せず、それは不思議なほど恬淡なものであつた。

講報社時代が國木田君の物質上の盛時で大分遊んだやうだが、鎌倉當時の生活は平々凡々たるもので別に遊びもせず、時折酒を土瓶に入れて濱邊に出て友達と一緒に飲む位なもの、そして後はいつでも角力だ。負ける癖に平氣でよく角力を取ると言ひ出した。まあ一種の達人と云つて可なりであらう。

國木田君は始めから終り迄殆ど不遇で濟んだ。比較を取るではないが、若し眉山君だつたら國木田君のあの冷遇の十分の一でも耐え切れなかつたらうと思ふ。何しろ國木田君は細君が實に好い人で、同君も大に助けられたことゝ思はれる。

然う、ひッくるめていふと獨歩君の鎌倉時代は極めて呑氣な不得要領なもので、獨歩社時代

へ國木田君が歸つて來て大笑ひをしたことがある。何しろ同君の無頓着と來たら呆れるほどのものだつた。

高山君が鎌倉に來た時、國木田君はそれを知らなかつた。樗牛の家に先づ行つたのは正岡君で、碁を打ちに出掛けたのだ。後で國木田君もやはり碁で行つた。その頃の樗牛といへば聲名隆々たるものであつたが、國木田君は決して屈して行つたのではない、と言つて批評するやうなこともせず、例に依つて例の如く悠揚として行つたものだ。そして後にこんなことを言つた「高山君の學問は博いがあまり碁などを打ちに行つては肺が傳染りさうで險呑だ」と。然ういうた獨歩も肺で死んだ、何だか感慨が深いやうな氣がする。

國木田君が鎌倉を去つたのは私より少し早かつた。歸京すると間もなく戰時畫報を出した。あれは日本に於ける畫報の嚆矢で立派に成功した。後で私等も寫眞畫報を出して一寸商賣敵みたいな變な工合になつたが、然し共倒れに倒れて了つた。それは兎に角、國木田君が常人より數年前に豫知し直覺した鋭敏さは返す〴〵も敬服すべきである。

その時分の作品?、然う別に無かつたやうだ。その頃私が冒險ものを書いて居たので、よく冒險ものゝ材料など話して聞かして呉れた。いつも一種の不思議なロマンチックなもので、薄暗いランプの下で老爺が陰怪なことを語るといつたやうなものだつた。國木田君は自分が冷遇されるにも拘はらず、私のものが出ると非常に喜んで呉れるし、細君もまた喜んで呉れま

る。ステーションなどで日本人が線路を横ぎると驛員が目を四角にして小言をいふが、西洋人が行ると何とも云はぬぢやないか、此小屋などは生意氣だ、打壞して了へ／＼といふ勢で、一同が一緒に力を協せてウン／＼押し始めた。一間四方位な小屋で可成丈夫に建てゝあつたが、到頭メリ／＼と言ひ出して半倒れになつて了つた。連中大喜びで尚も勇んで押し倒してゐたがふと四邊を見廻すと莫方で朦としてるのでよくは分らぬが大勢の人間が一塊りになつて此方を見て居るやうだ。ヤア見付つた逃げろ／＼と一生懸命松原の中へ逃げ込んで、アヽ非道い目に遇つた、取ッ捕らないでよかつたと銘々胸を撫で下ろした。それから翌る日になつて素知らぬ顔をして例の場所へ行つてみた。すると小屋は無殘にも半倒れになつて居る、愉快々々と手を打つて喜んだまでは善いが、偶と近傍にズラリと藻が掛け並べて干してあるのを見て、ヤア昨夜人だと思つて逃げ出したのは藻だつたわいと大笑ひした。

それから細君が用があつて一寸歸京したことがある。獨歩君も亦行くといふので泥棒でも入ると困るから時々見に行つて呉れといふから、それでは釘付けにでもして行つたら宜からうといふと、その通り釘付けにして出掛けた。ところが四日立つても五日立つても歸らぬ。何でも一ヶ月位歸らなかつたらう。如何したのか知らんと或る日二階から見て居ると、妙な風體の男がこつそり入つて障子襖を持ち出す、此奴怪しいぞと飛び出して見るとそれは家主で、一ヶ月も歸らぬし何の便りもないから最早來ないのだらうと思つて造作を始末しに來たといふ。其處

田君は深い自信があつた所以でもあらうが頗る平氣なもので「又冷遇れた仕方が無いさ」位なことで、決して世人がいふ如く不明な社會を罵るやうなことはなかつた。さればと言つて知己を後世に求むるといふのでもなく、まあ全然の樂天主義であつたといつても差支なからう。然し政治問題には大分激論をやつたやうだ。私等が聞かされたのも多くは政事問題や時事問題に關する不平で、自分一身の生活難に就いては一言も云はなかつた。是も凡人に出來難い所であらう。

何しろその時分は他日の雄飛を期して暫く勢を潜めるといふ形で、只もう無邪氣な無頓着なものであつた。國木田君は釣好きで有名だが私はその頃一遍も同君が釣りに行くのを見掛けなかつた。只汚い一本の釣竿を持ち出して自分の庭の池で小さな鮒を釣るのを一寸々々見たばかり。鎌倉の海邊は釣りにはあまり適しないが、それでも我慢して出掛ければ少し位の獲物はあるのに國木田君はマルッキリ出掛けなかつた。後で釣好きと聞いて私は餘程不審に思つた。

然う〳〵、滑稽な話が一つある。原田東風君だの、田山君だのその他の連中皆一緒になつて或る晩養生院前の海岸に出掛けた。ところが其處へ西洋人が海水浴の際衣服を脱ぐ小屋が立つて居た。それが連中の癪に障つた。何だ海水浴をやるんなら衣服は砂の上に脱げば宜いぢやないか、何もこんな所へ來てまで隱れて衣服を脱ぐ必要が何所にあるか、天眞爛漫に、赤裸々な自己を示す勇氣が無い位なら寧そ海水浴なぞ止めたが宜い。一體異人奴馬鹿に威張つてゐやが

にも頗る目先が利いて居た。三十四五年頃國木田君は「サクセス」といふ横字雜誌を購讀して居たが、自分でも恁んな「成功(サクセス)」といつたやうな雜誌を出したいと言つて居た。數年ならずして必ず成功を急ぐ時代が來る。生活難もそれに伴ふて來るに相違ない、といふのがその頃の君の持論で、尙他に「ホワイ」又は「ハウ」と云ふ題名で、如何にして生活すべきか、といふやうな記事を載せる雜誌を出さうぢやないかと相談を受けたことがあるが、その頃の私はまだ年も若く目先も國木田君ほど利かなかつたので輕々に聞き流して了つた。然し國木田君は何所迄も正氣で此の計畫は是非實行したいものだから何卒秘密にして置いて吳れと念まで押した。ところがそれが洩れたのか、然うでないかはわからぬが、その翌年か翌々年かに村上濁浪君が終に「成功(サクセス)」を發行した。立派な成功とは云ひ得られまいが、兎に角一通りの成功はした。其時代が果して來たのだ。實に國木田君は數年の前早く既に今日のタイプを豫知して居たものといはねばならぬ。同君の思想が獨り文學上のみならずあらゆるものに向つて時代思潮に數十步を先んじて居たことを敬服せずには居られぬ。是も同君が讀書するにも亂讀はせず、一冊の本と雖も精細に注意して、文學以外のものを決して疎外しなかつた結果であらうと思ふ。

　背中合はせに住んで居た八ヶ月ばかりの間に、私の幼稚な頭腦で書いた冒險ものなどがドシ〳〵受けられるに引反へて、あれほど明晰な頭腦と一流の腕前とを持つて居るにも拘らず國木田君は非常に冷遇された。「運命」なども送つた本屋から何遍返へされたか知れぬ。然し國木

しいものだつた。何か書いて居るかと思つて行つて看ると別段書いても居ない。書いて居る時、然う憶か「運命」を書いて居る時だつたらう、そんな時行つても平氣なもので、「君一石打たうか」とよく碁などを始める。尤も碁はその頃私より少し强かつたが、何にしても悠々たるもので、迫らず焦らず綽々たる餘裕を常に示して居た。

その頃一人の書生が來て居てそれは大分飮酒家らしかつたが、その頃の獨歩君はあまり酒は强くなく、飮むとすぐ飯々と呼んで居た。やはりその時分だ、正岡藝陽君が永住の目的でやつて來るし、田村江東君や齋藤弔花君もやつて來て國木田君の家に居た。齋藤君は今でこそあゝ温厚であるが其時分はズボラで仕方のなかつたものだ。それに僕などの連中が一緒になつて散歩に海岸に行く、すると屹度國木田君が角力を取らうと云ひ出す。砂だらけになつてよく取つたもんだ。角力は矢張りその書生が一番强い、次が僕か正岡君、國木田君が一番弱かつた。然し先生特有の負惜みで「ナニ角力なんかに負けたつて……」と大氣焔だ。

實はその頃殆ど收入の途は無かつたのだが、然し目算はあつたのだらう、相變らず悠々たるもので、商賣人が來さへすればドシ〳〵何か注文する。これは後で云つたことだが「天下廣しと雖も鎌倉ほど住み易い所はない」と言つてゐた。何故かといふと東京などと違つて、注文さへすれば持つて來るからだと。是も國木田君の無頓着な例の一つだらう。

それから今一つ感服するのは國木田君は非常に目先が利いて居た。文學以外のあらゆる方面

か好い家はあるまいかといふ。然う云はれたところで私は未だ國木田君がどの位の收入があるといふことも知らないのだから一寸返事に困つて居ると、如何な家でも可い二圓五十錢でも五十圓でも介意はぬとのことだ。私は逢ふと直ぐから國木田といふ人は風變りな面白い人だと感じた。そんならといふので私の家と同じな持主の村田久兵衛といふ鎌倉の豪家の別莊が丁度私の家の後ろに空いて居たのを幸ひ其家へ國木田君を周旋した。其處には一寸した池などが堀つてあつて、氣の利いた構えだつたので獨歩君が非常に喜んで、一週間ばかりして來ると言つて置いたのが三日もたゝぬうちに既う家族を引連れてやつて來た。私はその時母と一緒に居たので、引越早々困るだらうと思つて、その晩母に飯を持たせてやると、國木田君は「今夜は蕎麥でも取つて食はねばなるまいと思つて居た所だつたが」と非常に喜んだ。

國木田君はいつも元氣滿々たるもので、始終大議論を始める。そしてよくこんなことを言つた。「自分は長いこと貧乏して來たのでこんな家に入つたのは今度が始めてだ」と其家には池があつたので自ら『池の御前の別莊』と呼んで「何だ、君等は書生上りの癖に赤い西洋館などに住んで俗惡極まるぢやないか」とよく罵つたものだ。

夕方になると妻君や子供を連れて濱邊に散歩に行く、細君が實に好い人で――。一體國木田君は他の文士のやうに決して細君や子供を煩さがらなかつた。何か書いて居る時に子供が傍へ行つても平氣なもので、筆を擱いて抱いたりなどして居た。あんな神經質な人にしては實に珍ら

「牛肉と馬鈴薯」は、、民聲新聞に入つて、赤坂氷川町窮居時代に作つたものである。雜誌小天地から賴みに來て、書くことは書いたが〻非常に得意のもので、大坂の小雜誌などに載せるのは惜しいと云つて居た。其後鎌倉時代に德富蘆花氏がやつて來て、「牛肉と馬鈴薯」を非常に褒めて、「あゝ云ふ物を書いて貰ひたいものだ。」と云つた。それを聞いて獨歩氏はホク〳〵喜び、「蘆花さんは、あゝ云ふものを書いて貰ひたいと、自分のことを賴むやうに言はれる。」と云つて居た。其時代蘆花氏の賛美は、千人の味方より嬉しかつたのだ。

獨歩氏は友人と家族的に交遊することが好きであつた。で、余の家などには能く一家打ち連れて、子供の手を引いて來られたこともある。そして「家庭に風波の起るのは虛僞が原因である。吾れの一切を暴露すれば決して風波を起す憂ひがない。」と虛僞を憎んで自分の感情は至つて卒直に、少しの覆ふ所もなく赤裸々に披攊して居た。

押川春浪

然う三十四年頃になりますかね、丁度私は學校を卒業したばかりで、鎌倉の長谷の觀音下の或る別莊を借りて住んで居た。すると二ヶ月ほどして國木田君がやつて來た。尤も私は未だその頃國木田君を知らない、只文壇では一流に居るべき人だと思つて居た位で、未だ國木田君その人は知らなかつたのだ。ところが或日ヒョッコリ訪ねて來た。そして家を持ちたいが、何處

ざるを得ず。」と書いて「うず」と訓じた。獨歩氏は何時でも、如斯き些細な所にも酒落を云つたものだ。然し獨歩氏の眞相は眞面目な人であつた。彼れは其眞面目を覆ふに、輕快洒脫、極めて飄逸なる態度を以て人に接し、自己の思はざる洒落を云ふ。

文章の些細なる所にも神經質であつた一例に、斯う云ふ事もある。嘗つて田舍に居た當時、堤に上り村家が一眸の中に立ち並ぶのを見て、其作「田舍敎師」の中に「何處其所の堤の上に村が出來て居る。」と書いた。大抵の人は「村がある。」と書く。然し、自然界に村が出來て居ると云ふのは面白い言葉であると、自ら褒めて居た。

獨歩氏は極めて理窟の好きな人であつた。鎌倉時代の或る時、正岡藝陽と相撲を取つた所が負けさうになると獨歩氏は逃げ出した。すると正岡は「土俵の外に出た相撲は負けだ」と云ふと、「此所には土俵はない。鎌倉の濱一帶が土俵なのだ。勝ちたいなら此所まで來て勝て。」と云つてさつさと逃げたことがある。

獨歩氏は獨り砂上に仰臥し、兩掌を組んで後頭を支へ、蒼茫極まりない蒼穹を仰いで、雲の變化を見入り、深い〳〵冥想に沈んで、人間の運命の不可思議を考へるが好きで、鎌倉時代は殆んど毎日のやうに濱に出ては砂上に横はつて居た。そして、時には逗子葉山の山水を遠望して、深い追想の感慨に耽り、人生の凋落を痛むの情に堪へないもの丶やうであつた。

獨歩氏は其以前から、深い懐疑を人生に抱き、殊に靈肉の問題に就いて心を惱まして居た。

た。東京に歸りたいと云ふ念はあつたやうであるが、家が好いのと、風光の明媚なる爲め、どうしても離れられないと云つて居た。

其當時も生活には隨分困つて居た。然し、夫人も然うした生活には强い方で、何の不平不滿もなく、極めて愉快な日を送つて居られた。そして時々出京して其當時淺草田町なる夫人の實家の離れに籠城して小說を書いた。「運命」中の「惡魔」其他二三篇は其時に出來たものである。

獨歩氏は小說を書くに、一枚草稿を書くと、直ちに一枚だけを書き直す。で、全部書けた時には、淨寫も出來て居るのである。決して他人に筆耕をさせなかつた。脫稿すると必ず自らルビーをつける。其點に於て獨歩氏は極めて細心で、「若しルビーを不忠實にするやうなれば、到底完全なる小說を作ることは出來ぬ。文章の妙は人の知らない所に存する。例へば仁と云ふ字を書いて<u>じん</u>とルビーをつければ、何とも言へぬ妙味のある所でも<u>ひと</u>と書いては何でもない場合がある。」斯ういふ人の知らない所に苦心したものである。

德富蘆花も言つたが、獨歩氏の作品はユーモアに富んで居ると、實際である。獨歩氏の作品を通じて確かにユーモアの分子はある、比喩にも富んで居る。警句も甘い。然しそれ等のすべては決して作られたるものではない。獨歩氏の天性ユーモアを有する所以である。獨歩氏が湯ケ原より手紙を寄來した時に「山あり、川あり、酒あり、友あり、如斯き所に居れば病ひ癒ら

獨歩氏は此の場合に處しても、決して自分の感興の充實せざる時には、如何なる事ありとも斷じて創作の筆は執らなかつた。そして「どうも斯う云ふ場合が一番大事である。困るからどうしても濫作することになるが、境遇に負けぬやうにせねばならぬ。」と云つて居た。其覺悟は死する迄持續した。獨歩氏が今少し書いたなら、生活も豐かになつたであらう。然し獨歩氏は生活の爲めに小說は書かなかつた。

其當時、正岡藝陽氏押川春浪氏なども鎌倉に居て交遊したものである。それで、相謀つて五行詩を書く事に相談したが、正岡や押川は毎日弓を引いたり、濱に出て相撲をとつたり、ちつとも書かない。獨歩氏のみは何か考へて居たやうであるが、之も遂ひに實行しないで終つた。

獨歩氏は極めて細心な所もあつたが、總ての事に對して放逸な氣質であつた。從つて、其當時の日本文學には餘り注意を拂はなかつた。只寢ても起きてもツルゲネーフの全集を手にして、耽讀して居た。

其頃夫人及び一家族は東京に殘して居たので、家族を引き寄せたいと云ふ希望はあつた。友情も篤かつたが、亦肉身を想ふの情も極めて篤く「生活は人生の全體ではない。富貴貧賤に係らず、親あり、妻あり、子あり、而して一家團欒せる生活が最も幸福である。自分には此の幸福なる家庭あり、尙ほ此の上金錢の慾を望むのは無理である。」と云つて居た。そして、東京に殘した家族を想ふの念極めて切に、余等の歸京したる後、遂ひに一家を擧げて鎌倉に住はれ

して泣いた。單にそれは醉うた上のみの言葉ではない。兩親の恩誼に就ては、感情の熱烈な人だけに、痛切に感じて、始終口癖に感謝の言葉を洩らして居られた。

鎌倉時代を自ら稱して蟄居時代と云つて居た。全く總ての人々と交遊を辭して――と云ふより窮居時代なので、餘り集つて來る人がなかつたのである。余と原田東風と三人で、別に何等生活上收入の成算あるに非ず、極めて茫漠としたことを當てにして日を送つてゐた。財政上の窮迫は云ふまでもないことで、隨分不規則な梁山伯的生活をして居たのだが、其間でも獨歩氏は極めて衛生を重んじ、毎朝の運動は怠りなかつた。事業をするには必らず體が健康でなければならぬと云ふ所から、常に清潔を心掛けて、余の如き蓬頭亂衣、餘り身邊を顧みないので、時に依ると、余を摑んで井戸傍に連れて行き、盥に水を汲んで頭を其中に押し込み、無理に洗はしたことがある。獨歩氏は性來潔癖家なので、他人のヅボラなのまで氣に掛けたのである。自分は毎朝鏡に面して形づくると云ふ風であつた。

其當時の收入の道は、漸く原稿を書いて、一作成るごとに之れを書肆に賣り、それを以て生計の費に當てた。無論得たる金は自分の有に非ざるも、何人にても使用するの權利はあつた。金あれば机の上に置く、それを何人が使用するも自由、決して咎める者はなかつた。原稿料を以て生活の費に供する事故、勢ひ濫作せざるを得ない。余と東風とは盛んに書いたものである、殊に東風の如きは、三日乃至五日と期日を限つて、安い大學館の原稿を盛んに書いた。然し、

原田東風君の影が一つ加つた。余は面倒臭いので話をせず、原田君は寡默、獨歩は能辯で、一人で花を咲かして居たが、「一體君等は能く其樣に默つて居るね。何か喋つて見る氣はないのかね。」と云つてゐたが、何か思ひ出したやうに、スベタ下駄を穿いて、チョコ〳〵と駈け出したが暫くすると一升德利を下げて來て、「原田君、君は飲み助だつたね。吾が黨の酒豪を迎ふる寸志だよ。近來久しく放浪生活に馴れて甘い酒も飮めまい、久し振りに飲んで大いにやつて給へ。」と肴にとて袂から目刺しを出した。原田君は茶呑茶碗でグイ〳〵飮む。獨歩氏も飮む。余も飲む。三人鼎座して大いに醉うた。醉うた時獨歩氏は形を改めて、「君、年は取り度くないね。」と沁み〳〵云つた。その朝、余と二人海岸の砂上に坐して靜かに風濤の聲を聞き、遙かに逗子葉山の翠色を眺めて「僕はあの山を見ると戀の痛みに堪へない。僕等は樂しくあの山裾で語つたことがある。今はそれを回想したり批評したりする地位に立つて居る。同じ調子で岸を洗ふ波の音が一刻一刻僕等の血を洗ひ去つて、遂ひには何を見ても聞いても、心に響かなくなるのだよ。あゝ、厭だ〳〵。」と顏をしかめた。其顏が今もあり〳〵と見えるやうである。

其夜獨歩氏は非常に醉うて、幼時の懷舊談を初め、自分の今日あるは全く父母の爲めで、父母は不如意勝ちな手元を苦心して、自分と弟收二とを何不自由なく、他の或る人々の如く、内職や苦學などの眞似をさせる事なく、學業を修得さして呉れた。自分は一念是に思ひ及ぶ毎に、父母の恩誼の大なることを切實に感じ、涙滂沱として下るを禁じ得ないと、其時も疊に伏

莊があつた。忘れもしない、それは春二月のことである。風の吹く、春寒膚を刺す如き日で。別莊の前には、大きな三抱へもある公孫樹が亭々として聳へ、遙かに風濤の響くを聞いて、妙に鋭く哀感を覺える午後であつた。獨歩氏は直ぐ其別莊が氣に入つて、早速借りることにした。別に荷物もなければ、家族もない。極めて貧しい風來の書生であつたにも關らず、信用して借して呉れた。

獨歩氏は其別莊が非常に氣に入つて「あつらへ向きだ。」と云つて喜んで、「之れから書くぞ、生れ變つたやうな氣がする。」と云つて、某氏の家から机を借りて來て窓の下に据ゑ「僕が書く間君は讀め、僕が讀み出したら君が書け、机一つに硯一つ、筆一本、さうして同時に二つの作が生れる譯だ。」と云ふ。余が「小説なんか何うでも好い。彫蟲の末技など僕等の欲する所でない。」と云ふと「そんな馬鹿を云ふものでない。大きな事は、小説が書けるやうになつてから言へ。」と戒められたが、さう云ふ御當人は餘り書かず、椽側に寢轉んでは雲の色を見てゐたが、いつか「あゝ運命の力は不思議だ。」と云つて、跳ね起きて机に向ひ、書き初めたのが、「運命論者」である。

獨歩氏が「運命論者」を書き初めた翌朝、フラリと椽側に小さい風呂敷包を下げて立つて居る者がある。「原田君か、運命に囚はれたね。」と云つて顏を見守る。原田君は何の意味か分らず、「眞人をしたからやつて來た。」と云ふ。「此方も眞人だ、かくまつてやらう。」と云ふ調子で、其日から

だ、君、此の小說を讀んで誰れだか當てゝ見給へ。」などゝ大得意であつたものだ。余も此の高野巡査が大好きで、性格なども好く知つて居るが、「全く好く寫されて居る。」と感心した。

獨歩氏は淡泊な人であつたから、想ふに此の點に於て侯爵と意氣相合つたらしい。此の駿河臺時代には余も度々遊びに行つた。二六新聞の先の近藤（荊妻の兄の宅）へ來て、毎晩「アラビアンナイト」の話をして子供を喜ばせたり、荊妻の兄をつかまへて碁を打つたりしたが、余は碁が大嫌ひなので、傍に居ては直ぐ寢て了ふ。其事を後に話したことであるが、獨歩氏が後、飯房町に居た頃、余は無理に玉突へ連れて行かれたが、余は玉突も大嫌ひなので、床几に坐つた儘、こくり〳〵とやり初め、遂に高鼾をかいたので、「弔花を寢さすには碁を打つか玉突へ連れて行けば好い。」などゝ笑はれたこともある。獨歩氏は議論に於て一歩も讓る人でなかつた。或る時侯爵と議論を鬪はして毫も屈せず、其聲窓外に洩れて、爲めに巡査は喧嘩ではないかと、大いに警戒したと云ふやうな滑稽もある。

西園寺侯も風流、獨歩氏も多趣味、駿河臺の生活は餘程面白かつた樣であるが、或る日突然余の許に來て「僕は染々感じたことがあるから、今日から君と二人で鎌倉へ行かうと思ふ。」と云ふ（如何なることを感じたか、遂に明らかにしない）。余も少々面喰つたが、「宜からう、」と直ちに打ち連れて鎌倉に行つた。

鎌倉の停車場を出て、別に當てもなく歩き廻つて、權五郎神社の傍に行つた。其所に貸し別

馬鹿にはされぬなどゝ、自分の事のやうにやつきとなつて、まだ馴染の薄い余の爲めに世話を燒いて吳れた。其頃獨歩氏と能く往來して居たのは、此の間まで報知新聞に居た牛島氏と、岡落葉氏、高野巽氏等で、高野氏とは後ちに「家庭文學」「靑年文學」などゝ云ふ雜誌を出したこともあつた。

余は獨歩氏と七八歲も年が違ふから、話も自然合はないだらうと思つて居たが、獨歩氏は何も彼も打ち明ける方の主義で、書生などゝ一緒になつて、哲學、宗敎、文學等に關する議論を鬪はし、少しも勿體ぶつて大家面をする風がなかつたので、誰も彼れも獨歩氏には親しみ、中には氣の毒な程ぞんざいに口を利いた者もあつた。何時も高野、岡などの人々と會合して、蕎麥か何かをおごり、一杯機嫌の月夜などには、山王の方を步いて、「岡君一つ吟聲をやれ。」などと興に任せて自分も高く聲を張つて詩吟をやつたこともある。獨歩氏の無邪氣な、快活な、高い調子の笑ひ聲は、今も尙ほ余等の耳目に殘つて居る。

幾許もなくして獨歩氏は西園寺侯の家に寄寓したが、侯爵は非常に優遇したもので、親しく獨歩氏の室を見舞つて掃除をさせ、特に秘藏の軸を掛けさしたり、心を盡しての歎待に「實に居心が好い。」と云つて居た事を覺えて居る。

亦侯爵の門番をして居る高野と云ふ巡査があつたが、これが實に奇人で、何時しか懇意になつて、能く話しに來たものである。小說「巡査」は此の高野巡査のことを書いたもので、「何う

も、殆んど一家の見を有して、民聲新聞を中心とした星亨其他の人々とも交り、外に尾崎行雄、矢野龍溪、其他政治に關係ある人々とも、親密に往來して居た。其當時に於ても文學上の友人はあつたが、硯友社だとか、根岸派だとか云ふ風の文學者ではなく、外國文學を研究するに熱心な、田山花袋氏、中澤臨川氏など、新らしい方面の人々とばかりであつた。其當時より龍土會はあつたが、極めて微々たるもので、文學者として交友の廣くなつたのは、雜誌經營以後、即ち第三期に入つてからである。

今每日新聞に居る岡落葉氏や原田東風氏や、及び余は如何なる方面の友人かと云ふと、文學上の友でもない。政治上の友でもない。然うした趣味を離れて、今少し深い、個人の種々なる關係上の友人で、或る時は一つ家に起臥生活を共にした家族的の交遊であつた。

余と獨步氏と始めて相知つたのは明治三十三年夏のことである。其頃獨步氏は民聲新聞の編輯をやつて居たが、やがて同社を退き、赤坂氷川町の宅に閉ぢ籠つて、久し振りで氣樂に讀書が出來ると云つて喜んで居た。獨步氏の紹介で民聲新聞に小說を書いのが、余が小說に筆を執つた初めで、其小說の因緣から、獨步氏と深く懇意になり、獨步氏が民聲を止した後も、相變らず親密な交際を續けて居た。

當時余は放浪生活をして、隨分困つて居たが、獨步氏は其事を聞いて、余の爲めに下宿を周旋して吳れ、自分の宅にある書籍器具を持ち運んで余の宅に飾り、斯うすれば下宿の奴等に

一轉して、第四期の生活を見たのであらうと余は信ずる、來るべき第四期の生活と云ふのは、即ち第一期の生活に似て、今少し渾然たる生活である。第一期の生活を繰り返して、大いに獨歩氏の獨歩氏たる面目を發揮したに違ゐない。殊に病床に於ける獨歩氏は確かに其傾向を示して居つた。

「人は余を目して自然主義と云ふ。而も余自身は然らず。或る意味に於て、天地宇宙に對する人道主義なり。されど余自身は何主義なるかを知らず。自然主義にても可、理想主義にても亦可なり。余は何主義なるかに關せず。」と始終云つて居た。此の第四期の活動を見ずして長逝したのは、誠に殘念である。

余は、以上第三期に分つた中で、第二期に於ける獨歩氏と、最も親しく接近して、其間に於て仄見えたる獨歩氏の人格に依り、多くの感化を受けた。獨歩氏の一生を書くものとしたなら、此の時代を書くの必要がある。

獨歩氏は種々なる方面に知己を有する人である。單に文藝上の友人のみではない。あらゆる方面に友を求めた。以て其趣味の範圍の極めて廣かつたことが推察される。政治に趣味を持つて政治の友人もあつた。新聞雜誌の經營に盡瘁して、其方面にも知己があつた。西園寺侯は政治、宗教、倫理などを問題として交つた。今の雨聲會などに於けるが如く、單なる文藝上の交りではない、今少し眞面目なる交誼を結んで居た。獨歩氏は文學のみならず、政治にも宗教に

鎌倉在住前後の獨歩氏

齋藤弔花

國木田獨歩氏の生涯を三期に分つことが出來ると思ふ。第一期は其青年時代に於ける宗教的生活である。最も熱心なるクリスチャンとして、眞面目に誠實に神を信じた信仰の時代である。其時代に於ては、文士としても、詩人としても峻烈な思想を持つて居た。熱烈火のやうな戀のあつたのも其時代である。酒も飮まず、煙草も吸はず、極めて謹嚴なる生活をして、今日の素地を其時代に於て作り上げた。

第二期は報知新聞記者、民聲新聞などを經營した時代から、鎌倉を放浪したまでゞある。其當時は、文學者としてよりも、其切れるが如き俊鋭なる才を他の方面に活用したので、即ち純潔なる感情に滿ちた青年時代より出でゝ、社會の各方面に向つて、盛に苦戰惡鬪した時代である。

其第三期は極めて最近で、新聞や雜誌の經營から離れて、純文學者に返り、今迄の思想修養を具體的に示した時代である。國木田獨歩氏をして、天、今少しく命を借せば、必らず第三期より

品は恐らく一篇も無かつたやうに記憶して居る。或は「歸去來」（新小說に掲げられた）が其時分てなかつたかと考へられる。君が入社すると間もなく、「武藏野」と云ふ單行本が出たので私にも一部くれた。私は社では別に親しくせず、反つて感情の衝突などがあつた位だが、歸宅すると、熱心に「武藏野」を讀んだもので、作品に對する尊敬は少しも變らず、矢張崇拜者の一人であつた。君の顏を社で見ても何んの氣もしなかつたが、作品を讀んで居ると、興味津々として卷を措くに忍びなかつたのである。

酒は其時分にも可なり飮けたらしい。遊びも其の頃からぽつ／＼初めたやうだ。連中の內で、そんな方面のことを「うどんくひ」と云ふ通語が出來て居た位である。新聞が廢刊する頃には、酒は隨分進んで泥醉すると云ふやうな噂も聞いて居た。煙草も盛んに喫んで居た。

私の考へでは、君は新聞記者として筆を執るよりは、編輯などゝ云ふ、どつちかと云へば、いろ／＼工夫を凝らしたり新趣向を考へたりする經營家の方の才を持つて居たやうに思ふ。

新聞は一ヶ年位ゐて廢刊し、其後再び小規模のが創められ、今日迄これが續いて居る。

獨歩氏が病院に居られた時、ひどい我儘で看護婦も隨分弱つたが、職責上だまつてはゐられないので、獨歩氏の氣に入らぬことでも管はず言ふ。それを又獨歩氏がひどく癪に障つて、よし彼女の弱點は俺が知つてゐるから、イザとなると復讐してやると大に力んでゐた。一面にこんな無邪氣な子供らしい所もあつたのだ。

であつたらう。其の外には高橋鬼川君や原田東風君、畫工の小島沖舟君などが居た。年齢を云へば、國木田君の三十二三が一番年長で、後は皆二十七八の血氣盛んな青年であつた。實に一種の青年結社とも云ふべきもので、隨分滅茶々々な點も無いでは無かつた。私はこんな青年ばかりでやるやうな新聞は是れ迄も、これから以後にも無からうと思はれる。

國木田君は文藝談こそしなかつたが、新聞については實に熱心で、精勵で、實行不實行は第二として、いろ／＼聲を大にして發言し、種々な計畫を立てたりなどして、新聞の經營をして居たのである。毎日々々出勤して、怠けるやうなことはなく、實に職務に忠實であつた。月給は六七十圓位であつたらう。

仕事の出來る出來んは別問題として、其の態度が熱心で、眞摯であつたのは事實であるが、人を使ふと云ふことに至つては、餘り上手では無かつたと私は信ずる。何となれば餘りに自分の主張ばかりを通さうとする結果、人の言を用ひぬと云ふ風があつたからである。これと同時に、氏の當時の性格として、閥をこしらへると云ふやうな傾向があつたのは、蔽はれぬことである、社會に向つては兎に角、新聞社では偏狹な行ひもあつたやうだ。併し一面には極めて、チャイルヂッシュなところがあつて、常にお山の大將たらんとする傾きがあつた。私とは仕事の上の衝突がよくあつたので、始終何と云ふことはなく、すれ／＼になつてゐて、感情の好くなかつたこともある。で勢ひ私が君に向つて反抗的になつて居たのも事實である。其頃君の作

隨分繁忙を極めたのである。それから毎日國木田君と顏を見合せたのだが、只編輯上のことを打合せするだけで、外に文藝談と云つたやうなものは少しもなかつた。私は三度の內一度位は暇々に大いに清談をしやうぢやありませんかと云つて見たが、國木田君は大いにやらうと云つたゞけで、ついぞそんな機會を捉へることは出來なかつたのである。之と云ふのも無論新聞の事務が多忙を極めた故爲だつたらうが、君は其の時分文藝に多少遠ざかつて居たやうな氣味がありはしなかつたかと考へられる。さもなければ、如何に多忙な中にあつても、少しはそんな話も試みられたらうにと思はれるのだ。

私の知つて居る限りで云ふと、君の新聞記者生活はその時が最後であつた。其前には報知新聞に出て居たさうで、國民新聞へ入社したのが最初であつたのだ。文藝に遠ざかつて居たと云ふ理由としては、その時分は政事の方に興味を持つて居たのではないかと思はれる。サークルがサークルであつたし、千葉縣から代議士候補に推されて出ると云ふ噂も慥に、民聲新聞時代の前後であつたと覺えてゐる。

社は京橋の三十間堀であつた。家と云ふのは元は西洋料理店か何かであつたさうで、二階の二間が編輯室、下が事務室になつてゐた。印刷所だけは外にあつたのだ。そして其の新聞が又實に面白い、星亨の機關新聞で星が金を出してゐたのは事實である、星に親近の井上敬二郎君が監督で、主筆が佐久間秀雄君、編輯長が國木田獨歩君、三面が私で、外交長は中島六二郎君

していよ／＼入社することになつたのである。で社へ行つて見ると、編輯局には始めて入社した幾多の面々が集つて居た。其の連中と云ふのは、先づ佐久間君は勿論、高橋鬼川、中島信二郎その外山崎林太郎、井上敬次郎君も居られたやうに覺えてゐる。要するに新聞に關係がある人がみな集つて居た。其の中に白皙痩軀どつちかと云へば小柄の才子風の男が居た。私は其の人が何と云ふのか名さへ知らなかつたが、暫らくしてから佐久間君がこの人が國木田獨歩君だと云つて紹介した。そこで初めて初對面の挨拶をしたのである。見ると、其の態度が如何にも俊敏できび／＼して、いかにも、新思想を抱いてゐる新進氣鋭の俊才らしい青年であると思はれた。

兎に角始めての場合であり、種々新聞上のことで混雜して居たので、親しく話を交へることは出來なかつたが、國木田君は、只一語「お互ひに喧嘩をしながらやりませう。」と云つた。其の意は蓋し、君が編輯長で、私が三面主任であつたからである。さう云つて國木田君は、俊敏な眼付で私を見てにこ／＼笑つた。

これが最初の會見である。私はその人物に非常に鋭い點があると思つただけで、格別なつかしい人とは思はれなかつた。作品を見るとさうではないが、會つて見て實際さう感じたのである。

新聞は翌年の元旦を以て發刊した。大晦日には社に泊りがけで、初刷を書いたやうな始末で

> 獨歩氏の葬儀の濟んだ翌日、赤坂の宅に會した故人の知友數氏が扇子に寄せ書きなした。
> 絃絶情殘（弔花）　一歩三十年（青果）　天地萬古在此身再不得（收二）
> つゆばれのわらやの軒に干せるまゆしろき日を君が喪にゐし（花袋）
> 一時雨また降出てゝ秋の暮　（故獨歩氏吟……落葉）
> 猪野來て虎がみ墓に手向けたりたま／＼えたる紅のそばつ花……富士いふもとにゐて獨歩氏によせし（臨川）

民聲新聞時代の獨歩氏

三島霜川

私が國木田君と相識つたのは民聲新聞に入社した時であるが、君の作品はずつと以前から愛讀して居た。二十七八年の日清戰爭の時に國民新聞に續載せられた「愛弟通信」を見て始めて國木田哲夫なる名を知り、その文章がうまいのに感服してゐた。それから後も種々の雜誌に散見したものを好んで讀んで、私は獨歩崇拜者の一人であつたのだ。其頃は無論、文名も無く、作が出ても評判に上らない位であつたが、私は早くから隨分愛讀してゐたので、「河霧」や、「源おぢ」それから「武藏野」みな面白いと思つて讀んだものだ。

民聲新聞へ入社したのは三十三年のくれ、慥か十二月であつたと思ふ。當時私は富士新聞に居たのだが、友人の佐久間秀雄君から入社してはどうかとの勸誘があつたので、早速それに決心

なしたのも偶然でないと思はれる。其から入社後間もない話だが、村井弦齋君と初對面の挨拶に「僕も文士ですから」と云つたとの事で、其頃から文藝に對する眞面目な希望はあつたに相違なからうと思ふ。

國木田君の性行に就ては私の知つてゐる範圍に於ても隨分面白い事がある。一體に洒落で而も話上手な方でしたから何時も編輯局の會話は國木田君が中心となつて居た。或時は隨分亂暴に酒も飮んださうだが、醉ふと必ず極端な事をやつたとの事だ。確か紅葉館でしたらう宴會の席でお膳渡りをすると云つて客膳の上を歩いたとかで大笑をあつた事もあるが、殊に面白いのは自分の車夫に向つて「君々」と友達扱ひにして、時によると二人とも醉つて國木田君は俥の蹴込に寢て車夫がふら〳〵歩いて歸るのも珍らしくなかつたとの事である。何しろ肌合の面白い人好きのする性質であつた。

其他國木田君の嘘についてだが、仲々嘘の多い方で、私なぞは屢々其手に罹つたが、其嘘が誠に無邪氣で、別に恁うといふ腹があつての嘘でなく、自分では平氣でゐるのだから腹を立つ事も出來ない。何事に依らず淡泊で「君は嘘を云ふから駄目だ」と云つても「さうか」と平氣で笑つて居て別に氣にも留めなかつた。亦時々同僚なぞと衝突しても直ぐ忘れて舊の通りになると云ふ風で、私なぞは國木田君の顏を見れば何時も感情を一掃されて隔意なく話す氣になるのが常であつた、それは何處となく感じの宜い美しい性格があつたからだと思はれる。

を與へて了つた、其は君等は新聞記者の癖に那麼に事理に暗くては困るぢやないか、當局には當局丈の考がある、目下渡韓條令を規定して發表しやうとしてゐるのに………と火の樣に怒つて遂ひ口を滑らして了つたので、國木田君は其儘倶樂部へ歸り渡韓條令發布の報告をした。この一條は最もよく獨歩君の遣口を發揮したものと思はれる。大體始めから相手を怒らせやうとかゝつて奇功を奏するなぞは確かに卓越した伎倆を待たねばならぬ事である。

尤も一面に於て恁ういふ伎倆を有すると共に、亦一面に於ては仲々怠ける方で、一概に云へば新聞記者としては平凡な一ヶ年を送つたとも云ひ得られる。と云うて政治熱がなかつたのではなく、甚だ深い興味をもつて政治家に接近しつゝあつたらしい。結局職責としての興味でな自己性來の興味を有つて居たらしく見受けた。

這麼風で當時國木田君は伎倆を現はす機會がなく、否寧ろ自分からも作らうとも仕なかつたが、北清事件の起る前即ち退社する時、西園寺侯爵を評論して見たいからと云ふので、退社後筆を採つて二十七回に渉る長篇の評論文を寄せられた、其は「人物と其半生」なる題下に可成世間の注意もひき喝采も博したものである。この評論を讀んで始めて國木田君の價値をも認め退社を惜んだ樣な譯であつた。

其から近年獨歩君の文名が世間に喧傳される樣になつて思合はされるのは、小栗氏か紹介された時の言葉に「國木田君は小説も書く」と云はれた事で、爾後幾年かの研究が今日の盛名を

た氏の報知社時代は、逐近年の事の樣に新らしく胸に浮んだ。

國木田君が入社したのは確か三十二年の春で、矢野先生の令弟小栗貞雄氏の紹介であつたと思ふ。小栗氏は非常に國木田君を信用して何事に依らず世話をして居られたので、多分矢野先生に紹介したのも同氏であつたらうと思はれる。

文士としての獨歩君に就ては多く語る材料も記憶しないし、報知社時代に於ける氏は其天賦の技量を發揮する舞臺が無かつたので、終局三十三年五月に退社する迄一ヶ年間の新聞記者として活動した獨歩君の二三に就いてお話する事にする。

入社以來獨歩君は二面の政治外交を擔任されて專ら外務省方面に出入して居つたが、萬事精悍の氣で遣り通すと云ふ風で、時には奇想天外的の效果を收めた事もあつた。其は有名な恒屋正服と云ふ志士が朝鮮京城で爆裂彈を製り或冒險的な計畫をした事が現はれて捕縛され、大疑獄が起らうとした時、日本の新聞は筆を揃へて恒屋の輕擧を批難し當局者の取締を警告したが、外務省の方針は五里霧中で寸毫も知る事が出來なかつた。すると當時外務省擔任の新聞記者から組織されてゐた（今日もつゞいてゐる）霞倶樂部の人達も餘り外務省が口を噤んでゐるので困つてゐたが、丁度國木田君も霞倶樂部の一員として此問題に關與してゐて、其ならば一つ倶樂部を代表して當局者の意見を叩いて見やうと時の外務省參事官赤羽四郎氏に面會し、口を極めて政府の無能を攻擊辯難した。これを聞いた赤羽參事官は非常に立腹して一言のもとに解決

かも知れぬが、何分私は記憶が鈍いので能く覺えて居らぬ。唯獨歩氏は人の名前なんぞを記憶して居ると云ふことが極く不長所であつた。それに自分で理屈をつけて、名前は無意味なものが多く、其人物にしつくり當てはまるやうなのは滅多にない。只、單に人間の符牒に過ぎぬ。そんな無意味なものを覺えて居ることは出來ぬと云ふのである。それで、始終逢ふ人でも自分は名前を記憶しないから、些つと呼ぶのに困ると云つて居た。

だから人の宿所などは無論覺えて居ない。極く親しい友人でも、人が其宿所をたづねると、町名番地を覺えて居ないから、俺れが連れて行つてやると云ふやうな風であつた。

獨歩氏は新體詩を一時大にやり、歌も少しよんだやうだが、俳句を作つたことは恐らく誰も知るまい。唯一度私は聞かされたことがある。それは

一時雨來た降り出てゝ秋の暮　　獨歩

と云ふので確か三十四五年頃のことゝ思ふ。(落葉氏談)

報知社時代の獨歩氏

村上政亮

國木田君が亡くなられたのは、文壇の爲に惜むべき事で、其と同時に私の舊い記憶から甦つ

御馳走したことがある。其席上で、佐々木の娘で信子と云ふ人を見染め、お互ひに熱烈な戀をして、結婚したのが先の妻君であつた。其結婚に就て蘇峰先生なんかは、可けないと云つて頻りに注告したものであるが、例の氣象で、頑として其言を聽かなかつた。が、間もなく二人の間は破れて、獨歩氏は其爲め人生の最も痛慘な事實を嘗めることになつた。その事に就ては別に語る人があると思ふから、深く立ち入つた話は省いて置く。

豐後の佐伯に教師として行つて居た時のことは、詳しく知らないが、三十二年から三年にかけて、民聲新聞を經營した。それは、編輯の方は勿論、會計迄切り廻はして隨分勉められたが賣口は思はしくない。蘇峰先生はそれに就ても又勸告して、君は然う云ふ新聞をやつて居ると、廣告を出さねば惡る口を書くぞと云ふ風な事にならぬとも限らぬ。然うすれば君の身體に疵がつく事になるから、どうしても早く止して了ふ方が好い。田舍新聞の三面を書いても、身體に疵が付かない方が好いぢやないかと、浸み〳〵と注告した。其注告が原因したかどうか知らぬが、間もなく民聲社を止して了つて、其後、矢野龍溪氏の近事畫報をやり出した。それ以來のことは、多くの人が知つて居る所で、却つて私共の知らぬ所が多い。

以前の民友社時代には、國民の友に能くスケッチ風のものを書いた。武藏野中にある「川霧」などゝ云ふものが、其一番最初の作物である。

民友社時代に、特に獨歩氏の奇行とか、逸話とか、其人物を活躍したやうな出來事はあつた

三九度の式に用ゐる三つ組の杯で、まだ花嫁も見えぬうちに、花婿の小杉君と二人で飲み初めた。そして盛に議論をしてゐる所へ他の親戚の人達が來て吃驚したと云ふことだ。(滿谷國四郎氏談)

民友社時代の獨歩氏

中村樂天

明治二十三年の春、青年文學會と云ふものを起して、『青年文學』と稱する雜誌を發行した。執筆者は、杉村縱横、菊地謙讓などゝ云ふ人々が主で、國木田獨歩氏は少し遲れて入つて來た。其時分の獨歩氏は、新體詩とか、小說とかの純文學の方でなく、能く人物論なんか書いて居た。中に德富蘇峯論などは、些ッと面白いものであつたと記憶してゐる。

その後明治二十七年日清戰爭の時國民新聞の從軍記者となつて戰地に赴き、其通信文の冒頭は、何時でも愛弟足下と書いて寄來した。即ち令弟收二氏に宛てた手紙の體にして書いたものである。之れは愛弟通信として人の能く知る所である。それで、當時國民新聞社では、皆、國木田氏兄弟のことを「愛弟々々」と云つて呼んで居た。

そして、日清戰爭が濟んでから、婦人矯風會の佐々木豐壽と云ふ人が、新聞記者を招待して

し盡し、土地の人が氣付かない、知らない場所をも悉く捜つた。尤も佐伯といふ所は實に風景に富んだ所で、前には杳渺たる太平洋、蓊鬱たる島、白沙靑松、山、河、殆ど天然の巧を盡した感のある所だ、恁ういふ絶景に魅せられた獨歩君が永く自然の愛慕者となつたのも無理はないと思ふ。東京へ來てからも日曜毎に郊外に出掛けた、それも早稻田の邊から富山が原、駒場の邊へ掛けて、灌木の間を歩むのが好きであつた。

獨歩君の交友は文士中にも多いが、一人として心醉するまでには至らなかつたと言つて宜からう。心醉とまでは行かぬが非常に敬服して居たのは、德富蘇峯、矢野龍溪及び植村正久の三氏で、これだけは逢つても逢はなくつても記臆に殘る先輩として推服して居たやうだ。友人で獨歩君のことをよく知つてゐるのは前に田村三次君、後に田山花袋君、然し二人とも佐伯時代のことは知られまい。

僕から見た獨歩君、それは少し言ひ惡い、が僕は何處までも熱の人、血の人であつたと思ふ。德富氏の弔文の中にもあつた通り希望もあり、計畫もあり人の世話もよくした。北海道開墾のことは立消になつて了つたけれど、あれも非常な熱心なものであつた。熱血の人といふのが一番好い形容詞であらうと思ふ。

小杉未醒君とは非常の仲よしで、小杉君が結婚の際は媒酌人になつた位だ。その結婚の席で面白いことをやつた。三

六年頃からの友人、まあ田村三次君と同じやうな殆ど會心の友ともいふべき仲であつた。で引越して來た晩、今井君が飯と總菜を持つて來て呉れた。それが又馬鹿に美味かつたので、後々までよく話の種子になつたものだ。その後獨歩君は從軍記者となつて渡淸したので、三番町の家を疊んで平河町の五丁目へ引き越した。丁度それと入れ代りにお父さんやお母さんが來られたのだ。勢ひ六人生活も解散といふ譯になつたのである。僕の一緒に住んで居たのは極の僅か、たつた二ヶ月ほどで別にこれはといふやうな話もない。何しろ獨歩君が持て囃されるやうになつたのは「愛弟足下」の通信文が出てからで、それまでは世人に注目もされず、別段心に殘つた事件もない。

佐伯では英學と數學とを受持つて居られた。鶴谷學館といふものは生徒數も少ない小さな塾で、丁度その時分、二派に分れて居た。一は國木田派ともいふべきもの、一は漢學派で、國木田君はその自派には心服されて居た。これは同君が雅量の人たるを證する一逸話であるが、或夜反對派を自宅に呼んで深更まで話したことがある。然し然うして話しはしたが、對手をして感服せしむるまでには至らなかつた。が、後でその反對派の一人は不思議な緣で靑報社に入つて獨歩社時代まで國木田君の部下で働らいた。石丸蒼鷹といふ人で、今も東京に居るといふことだ。

獨歩君が佐伯に居る時分には全く佐伯の景色に心醉して居た。景色の好いところは殆ど跋涉

る上に、得意の警句は口を衝いて出て、殆ど應接に遑なかつた。嘗て人生問題に就いて談話をしてゐる時、僕思ふに運命は立體だね、と言ふから何故ですと聞くと、だつて人間と云ふものは、八方が塞がれば、上か下かへ抜けるより外仕方がないぢやないか、と言はれた。萬事が此調子です。（平塚篤氏談）

佐伯時代及び上京當時の獨歩氏

尾間明

二十七年の九月、慥か六日だつたらう、獨歩君は自分が教師をして居た佐伯の私立鶴谷學館の生徒四名と令弟の收二君とを引連れて上京した。最初は麹町の三番町に下宿して居たが五日ばかりすると家を捜がして南榎町に引き移つた。そこで六人して自炊した。その時分には竈もなければ釜もない書生生活で、神樂坂まで食パンを買ひに行つてそれを食つて居た。そのパンが、半斤一錢二厘と云ふひどいもので、隨分質素な生活であつた。そしてその連中が何して居たかといふと誰一人定まつた學校に行くでなし、室を別けて銘々勝手に勉強して居た。

それから國民新聞社に入ることゝなつて、榎町ではあまり遠いといふので又三番町の二十六番地邊へ引越した。丁度その隣家が辯護士の今井忠治君の家で。今井君といへば獨歩君と明治五

が、龜吉君にはそんな悠長な、呑氣なことは到底出來ない。二言三言で決しないと、直ちに爪を以て勝敗を決する。其性質は極めて感情的で、ねちくちしたことはやれない。あり丈けのことをぽつぽとやつて了はねば氣が濟まぬ。獨歩氏が獨歩社を經營した時代に、いろんな雜誌を濫發したのは、獨歩氏の獨歩氏たる所で、所謂獨歩式なのである。文學上の生活も然うであつた。獨歩氏は一瓣開き二瓣開いて咲いた花ではない。パッと咲いてパッと散つて了ふ。之れは子供の時から最後迄續いて居た性格である。

獨歩氏は人の下になると云ふことが大嫌いな男であつた。學校から歸つても、復習などは少しもしないで、自分が隊長になつて山や川に行き、松の木を折つては可けないと云つてもそれを折る。取つては可けないと云ふものでも取る。所謂餓鬼大將になつて盛んにいたづらをして歩いた。自分が首席に居たので、何時でも弱者を率ゐて歩き廻ると云ふ風で、級の上の人にでも絶對的服從などは決してしなかつた。會つた時に、私は幼時のことを話すと、氏も感慨に堪へぬものゝやうに、あの頃はいたづらで隨分人を困らしたものだ、其頃の君は物も言はず、自分の喋べるのとは正反對に、全く蛇のキャラクタアだと云つて大いに笑はれた。其よく喋べり、よく惡戯をした龜吉君は、もう長逝して了つたのだ。考へれば夢のやうな氣がする。

獨歩君ぐらゐ座談に巧みな人は珍らしからう。どんな些細な事でも君の口から聞くと非常に興味が加はつてく

がり、怒つて相手を電のやうに素早く引つ掻いて置いて、ぷいと逃げて了ふ、其の爲め能く悶着を起したものである。

そして、龜吉君は能く女の子をいぢめた。手毬などついて居ると其中に入り、手毬を取り上げて、隱くして、女の子を能く泣かしたものだ。餘りいたづらをするので、時々同盟して、大勢で龜吉君をいぢめることがあると、龜吉君は其鋭い爪を使用することも出來ず、敏捷なる動作を以て逃げることも出來ず、其時は萬事休して、只大聲を上げてオイ〳〵泣き出す。其泣き聲が又餘りに大きいので、人々は手出しをせずに逃げて了ふと、後で赤い眼を剝いて見せたり、舌を出したり、尻を叩いて見せたり、大いに惡口して、人々が再び引き返すまでには、蝙蝠の如く逃げ去つて了ふ。で、一度だつて痛い目に逢つたことはない。

その頃の獨歩氏の、文章上の智囊は分らない。確とは覺えぬが、學科の中で數學が一番好く出來たやうに思ふ。數學の好く出來た人が、詩人となつたのだから、其所に些つと矛盾があるやうに思ふ。

今日になつても、子供の時の性質が、國木田獨歩を爲して居たのは、其詩人的性格である。詩人になると云ふことは其いたづらなる龜吉君時代から分つて居た。學科の成績も天才的で、性質は熱血で、氣の長いことは大嫌ひ――と云ふよりは其性質として出來なかつた。他の子供は長々と議論して決しないと、次ぎの休憩時間を待つて、更に再び議論をすると云ふ風であつた

一名赤猿とも云つた。獨歩氏は其頃非常に血色の好い少年で、顔の色はいかにも赤く眼が少し釣り上つて、耳がぴんとして居た。それに小さな子供で、素ばしこく、人を引つ掻くところが、丁度猿に似て居るので、其時から由來して赤猿と云ふ有難からぬ渾名は生じたのである。

がり龜と言はれ、赤猿と渾名されて、實にいたづらをしたものであるが、それで居て惡る氣がない、無邪氣な所があつたものと見えて、人に眞底から憎まれて排斥されるやうなことはなかつた。私なども始終引つ掻かれた一人で、顔などには度々疵をつけられたものであるが、然し、仲は極めて好く、一緒に國木田氏の家の庭に花を折りに行き、母堂が其頃未だ小さかつた收二氏を背負つて出て來て、度々叱られた其時の顔が、今でもあり／＼と眼の底に殘つて、思ひ浮ばれる。

其頃、郷里の小學校では乘り戰さと云ふ一種の遊戯が流行つて居た。それは一人の體格の好い子供が馬に取り、其後ろに二人の子供が、馬の帶を掴んで、其上に一人の子供を乘せ、同じやうな陣立てを今一つこしらへて、其馬上の少年がお互ひに取り組んで格闘し、落された方が負けてある。で、馬になる子供は大きい子供が可いが、上に乘つて格闘する子供は、小さくなくては不利益である。で、龜吉君が能く上に乘つたものだ。然し、龜吉君が乘る時には、必らず爪を使用してはならぬと云ふ條件をつける。が、龜吉君は馬上の將軍となり、格闘中窮して來ると、窃かに其爪を利用して勝ちを制する。若し負けて落されると、龜吉君は大いに口惜し

し、龜吉君には一歩を讓つて居た。そこで級中の誰彼れは、龜吉君が他國の人と云ふ事もあつたらうし、又一つは嫉妬もあつたらうが、どうかして龜吉君を一番より落さうと云ふ相談があつた。然し、何分天才で勉强もしないで好く出來るので、どうしても落すことが出來なかつた。

其頃龜吉君の特色は喧嘩早いことであつた。熱誠男子でどうかすると直ぐ喧嘩を初める。然し悲しいことには龜吉君、其頃甚だ身體(からだ)が小さかつたので、喧嘩をするには體格が不適當であつた。幾ら元氣を出して力んでも、田舍の腕力黨に會つてはかなはぬ。百姓の子などの隨分筋骨の逞ましい者に會つては、如何な龜吉君でも、鷹に摑れた小雀のやうな憫れな有樣で、どうにも抵抗することが出來ない。其所で、龜吉君は恐ろしい武器を持ちだした。それは刄物でも何んでもない、天然に與へられた所の武器である。即ち蜂の有する針の如く、龜吉君の武具はその爪であつた。自分よりどんな大きい子供とでも喧嘩すると、直ぐ其長く延ばした鋭い爪で、相手の顏を引つ掻く、其又引つ掻きかたの素早いことは、殆んど目にも止らぬくらゐで、引つ掻いて置いて、捕まるとひどい目に逢はされるから、すうと雲の如く逃げて了ふ。だから、どんな强い子供でも、龜吉君の爪にかゝつては負けねばならなかつた。

で、吾れ〳〵の仲間では其頃獨歩氏のことを、がり龜と渾名したものである。鄕里では、人を引つ掻くことを形容して、がり〳〵掻くと云ふ、それでがり龜と云ふ諢名は出來たのだ。又、

が、別に相手にされぬ程ではなかつた。何分其當時からの秀才で、總ての學科が中々好く出來た。大抵級中でも一番で、三番と下つたことは終に無かつた。その一番になるのも、他の人々のやうにせつせと勉强して一番になるのではない。至つて不勉强な方で、決して學校から歸つても復習するなど丶云ふことはなく、歸ると直ぐ道具を投げ出して、山や川に餓鬼大將となつて行つたものである。名を成してからも隨分放縱であつたやうだが、彌張り其頃も放縱で、勉强は少しもせず、悪戯ばかりして居て、それで一番二番と級中の首席を爭つたのであるから、其秀才であつたことは云ふまでもない。

それに授業中でも、別に一生懸命に本を讀み、勉强するなど丶云ふことは決してなく、十五分間の休憩時間に、人にするいたづらを考へたり、其いたづらの準備をする方に氣を取られてゐた。讀む振りをして机の下に手を隱くして、紙を裂いて御幣をこしらへ其れを人の襟元に挿して、知らん顔して後ろで吹いたり、紙をちぎつてそれを圓めて人の首筋に投げ込んだり、隨分ひどいいたづら許りして居た。そして、目先の非常に早い人で、一心にいたづらをして居る時でも、敎師が見るやうなことがあると、ぱつと止して知らん顔をして、熱心に今迄本を讀んで居たやうな顔をする、其素ばしこいこと丶云つたら、決して敎師の目に止まるやうな下手なことはしなかつた。そんな不勉强で居ても、何しろ頭が鋭いものだから、何時でも級中一番の席を去らない。其頃市山秀助と云ふ非常におとなしい子供で、熱心な勉强家が居つたが、然

甚だ稀れな方である、之は若しや小學校時代に一緒であつた國木田龜吉君（獨歩氏の幼名）ではなからうかと氣がついた。さう氣がついて見れば一刻も猶豫は出來ない、早く調べて見やうと思ひ、それには丁度國民新聞に居つた宮崎湖處子君は懇意なので、『愛弟通信』の筆者は國木田龜吉君ではないかと聞きあはせた。すると、今は龜吉とは云はぬが、よく調らべて見ようと云ふ返事で、其後更に、なんでも一度名を更へたことがあると云ふ話を聞いた。これで九分九厘迄相違がないと決めてしまひ、兵隊から歸へると直ぐ、君は若しや幼名を龜吉と云つて私と一緒に山口の學校に通つたことは無いかと手紙で云つてやると、私は其當時の龜吉で、君もよく覺えてゐる。誠に懷かしく思ふから是非遊びに來て吳れと云ふ返事が來た。で、私は番町の獨歩氏の宅へ行くと、出て來たのは幼時の獨歩氏に些とも變らない獨歩氏である、（獨歩氏は幼時より死ぬ迄顏變りはしなかつた。）お互に「ヤア」と云ふやうな譯で、君は幼時の龜吉君其儘だ、ちツとも變りがないと云へば、さうか、君もあの頃の君そツくりで變つた所がない、何しろ暫らくだ、大に語らうぢやないかと其日は長い間色々な話に耽つた。十二三年に別れて逢つたのが二十八年のことであるから、全十五年と云ふもの、お互に其消息を知らなかつたのである。

それから話は十二三年前の小學校時代に戻るが、その頃私の鄕里では、妙に他國の者を疎外する風があつて、小學校に於ける獨歩氏に對しても生徒仲間で幾らか然う云ふ傾きはあつた

『國木田獨歩』其二

小學校時代の獨歩氏

永田新之丞

　國木田獨歩氏は、播州の生れであるが、嚴父は裁判官であつた爲め、方々へ轉職して私の鄕里防州の山口へも來られた。それは何年頃であつたか、隨分古い事だから記臆して居らぬ。私と一緒に學校に行つたのは、私の九つの時で確か明治十二三年のことであると思ふ。

　二三年學校に一緒に通つてゐたが、お互の境遇上何時しか別れてしまつた後は、忘れるとはなしに忘れて音信不通になつた。所が明治二十七年日淸戰爭の際、私は軍人として軍務に從事してゐると、其當時の國民新聞に『愛弟通信』と云ふ從軍記事が連載してある。私は其れを面白く讀んだが、更に注意を引いたのは、國木田と云ふ執筆者の署名であつた。國木田と云ふ姓は

弔辭 （青山葬儀場にて）

文壇の畏友國木田獨歩君の靈に告げまつる君と予とは同學の縁もありながら生前に相語る機會なく今日却て此齋場に弔辭を捧げる身となつた人間の離合ほど測り難いものは無い君の最期を聞くに君は死を思はずして生を思ふの人であつたと云ふ生きて飽くまでも人間悲哀の源を究めるのが君の天職であつたと見える身を殺いて骨に及ぶの悲哀と眞の爲に痩せたる姿とは君の文學である生の人眞の人悲哀の人此意味に於いて君が近時の我が文壇に於ける地位は日月の如く明かである思ふに君の志は熾熱になつて今後の人に感傳するであらう予はむしろ君を知ること遲かりしものゝ一人として茲に滿腔の悼意を捧げるといふ。

島村瀧太郎

○

獨歩國木田哲夫君、君の逝ける翌日、親友故舊皆な湘南茅ケ崎の一屋に集り、君が爲めに香を薫し、君が爲めに誠を致し、悲痛哀悼止むところを知らざりき。野花は君が棺を飾り、濤聲は讀經の聲に和し、梅雨晴の夏の日影は田舍家の軒の蘭の白きを照したりき。あゝかゝる日かゝる田舍、かくして君が遺骸に侍せんとは、何の日かわれ思ひし。君よ、君が遺骸を燒けるの地は、君が知れる茅ケ崎停車場を東に距る半里、舊東海道の松並木を北に外れたるところ夕の露草の葉に繫かりしよ。越えて二十七日、君の遺骨は親戚朋友に護られて東京に着し、今二十九日、此青山共葬墓地齋場に靜粛なる佛式を行ひ、終りて以て君を君が家の墓塋に葬らんとす。今、これを君に告ぐ。嗚呼哀哉。君が明治文壇に於ける功蹟に就ては、われまた何をか云はん。君が才は世既にこれを認め、君が作は人既にこれを重んず。唯憾むらくは、新に興れる文藝は猶君の力に待つところ多く、君の志もまた未だ其半を酬ひざるに蒼天忽ち其魂魄を奪ひ去る。われ等志を同うするもの、誰か流涕號泣せざるを得ん。君の一生は窮の一字よくこれを盡せり。されど君の訃一たび世に傳へらるゝや、知ると知らざると、皆哀悼の意を表し、山村僻地にして猶君の遺書を抱きて泣くものあるに至る。窮すと雖も、かくの如くなるを得ばまた榮ならずや。あゝ公にしては君のごとき天才を失ひ、私にしては君の如き親友を失ふ。言短く意盡きず。嗚呼哀哉。尙くは饗けよ。

田山錄彌

れて居る。性格も躍動して居るし人生の相と云つたやうなものが犇と迫つて來る。

獨歩君はあゝした人間を好く知つて居るのだらう。心の底迄も見拔く程知つて居なければ、到底あれだけには書けない筈だ。兎に角會話のうまいことは驚嘆に價する、よく行き屆いて居て、丁度搔ゆい所に手の屆くやうな感がある、なる程と頷かせるのだ。

「濤聲」から以に後出た作も悉く面白く讀んだ。「都の友へ、B生より」や、「濤聲」の中の「波の音」は評判が好かつたやうであるが僕はまだ讀んで居ない。「竹の木戶」は描寫がうまい、あの簡潔な文章が益々よくなつた。世間では一轉機があつたとか云つたが、矢張り獨歩式の特長は少しも變らない、描寫が多少變つて居たが、相變らず才筆であつた。決して性格だけが出て居るのではない。

まだ外に隨分作があつたやうだ、「文章世界」に出た「渚」は眞んのちよつとした短いものだが、よく描かれてあつて、非常に面白いと思つて讀んだ。

獨歩君もこれからがまだ〳〵見ものであつたし、立派な作が出來たであらうが、惜しいことをした。併し、今の作だけでも、永久に殘る價値は充分にあるのだ。

など他人の眞似の出來ないものだ。長いもので「酒中日記」と云ふのがあるが、どう云ふものか僕には餘り好い作とは思はれ無かつた。要するに獨歩は短篇作家だ、長いものよりか、短い者に傑出したのがあるやうに思はれる。尤も「酒中日記」は、空想でこしらへたものだと聞いたが――。

「運命」の次ぎに出た「濤聲」には、中々好いのがあつた。「號外」などは最も好いものだ、世間では餘り評判が無かつたやうたが、僕は「號外」を讀んで、すつかり感服した、あの才氣の煥發した、一種の閃きの發するやうな筆致は實際案をうたしめる位だ。字句の間に或る「力」が潜んで居る、潑溂として居る、あの中の人物はそれ〱モデルがあるんださうだが、何と云つてもあの作は好かつた。

いつだつたか、獨歩君に會つた時、僕が、「號外」に感服したことを述べると、獨歩君笑つて、「ありや醉つぱらつて書いた小說だ。醉つぱらいの小說だ」と云つたことがあつた。

それから、僕の獨歩君の作について感服する點は會話のうまいことである。一寸見ると、ぞんざいなやうな、出たらめのやうであるが、隨分苦心が籠つて居るだらうと思ふ。譬へば「濤聲」の中に「二少女」と云ふ極めて短いのがある。主人公は電話交換手か何かをしてゐる少女であつたが、其の會話が實にうまい、活きて居るやうだ。一寸讀むと、廣津柳浪式のゆき方で會話もさうであるが、極めて客觀的に寫してあつて、その中にも他と異つた獨歩君の獨特な所が現は

たらしい。併し、「武藏野」が「國民の友」に續載せられた時は、一部に於いて、大分評判が好かつたやうである。

でも、僕などは他の人に比べると、多く讀んで居る方だ。獨步君のは大抵は短篇で、それに文章が簡潔でキビ〳〵して、早く讀めると云ふ處から讀み出すのだが、さあ一度讀みかけると、最早終り迄讀んで了はなければ措く事が出來ない。これが他の作家の作と相違のある點では無からうか。始めの内は、是非讀まなくちやならんと云ふやうな義務的な考へもなく、こりや乾度面白からうなどゝ云ふ期待もなくまあ短かいから讀んで見やう位の積りで讀みかけると、あの文章――獨步式の他の模すことを許さぬ深い鋭い力に魅(チャーム)されて了ふ。潑溂とした氣にうたれる、心から讀むやうになる、て思はず一氣に讀了することになるのだ。

「武藏野」集中のものは餘り知らないが、「獨步集」のものは皆讀んだ。これと云つて批を打つやうなものは一篇もない。「夫婦」「正直者」「第三者」みんな面白い。これ等は性格小說(キャラクターノベル)とでも云つて好いだらう、人物が皆活きてゐるのだ、潑溂として聲があるやうだ。「富岡先生」だけは、餘り感服が出來なかつた。

「春の鳥」「少年の悲哀」などは、皆印象の深い作であるが、殊に「少年の悲哀」は、描寫のゆきかたが、餘程自然派的だと思はれる。

「運命」も好い。大抵讀んだ。文藝界などにも出たのが澤山あるやうだ。「運命論者」「惡魔」

「牛肉と馬鈴薯」は理屈で出來て居る。然し、其理屈も獨歩氏の筆に上ると、非常に情趣がある。併し其理屈は一面から云ふと、氏の作物を通じての缺點ともなるであらう。「牛肉と馬鈴薯」の中にもあつたやうに、獨歩氏の理屈は驚きたいと云ふ事である。其理屈は獨歩氏の特長で、決して獨創ではない。理屈には然うした弊が伴ふ。で、却つて理屈のない「正直者」や「少年の悲哀」「女難」などの中に傑作があるやうだ。殊に女難はすぐれたる作物で獨歩氏が最も客觀的態度を以て書かれたものぢやないかと思はれる。

近來の作物では「渚」を非常に深い興趣を以つて讀んだ。

獨歩式の特長

徳田秋聲

獨歩君の作品を始めて讀んだのは「糸くづ」と云ふ短篇であつた。それが掲載されたのは「國民の友」で慥かに明治三十年頃だつたと思ふ。書き方も、想も共に面白く、當時僕などの眼からは非常に珍らしく讀まれた。これは多分「武藏野」に收められたかと思つて居る。

それから後は暫く獨歩君の作を讀まなかつた。世評も無かつたし、又餘り多く筆も執(とら)れなか

寫、其深林の底に跪座し瞑目して常つて入跡を許さなかつた自然の威迫を切實に痛感する主人公の感懐、さては、新開地の人情風俗など、例の極めて鋭い眼を以て觀た描寫は、從來の文學に其例を見ない光彩を放つて居る。

獨歩氏の一生を見來れば、何時も何をかもくろみ企てて居る。そして敏鋭な、犀利な計畫を立て、其立派なる所の計畫に迷はされて、本來天性の文學には、精神の全力を傾注されなかつたやうに見える。獨歩氏は文學を單に文學として見るものを嫌はれて居たやうな傾きが話の折々に伺はれた。其創作には、何時も窮迫の時代に執筆された工合で、それを以て生活の助けにされたらしい。が、然し、いざ執筆の場合には極めて眞面目に、最も嚴肅に飽くまで藝術家的良心を持して創作されたので、獨歩氏の作物は何れを見るも悉く立派な作物である。其邊に大いなる矛盾が見えて居ると云ふことが、非常に面白い。西洋の大なる藝術家も其例に洩れなかつたやうに思ふ。

個々の作物に就て言へば、武藏野中にある作物で、題は些と忘れたが水車小屋を書いたものがある。余はそれを愛讀して措かない。其作物は、獨歩氏が霞ケ岡に住つて居た當時、家の裏に實際在つたのを、其儘書いたものである。その作物は、獨歩集などの作物の或る閃きであると余は信ずる。

獨歩集中では「牛肉と馬鈴薯」「第三者」「少年の悲哀」「正直者」「女難」などを傑作だと思ふ。

ことだと思ふ。今年の早稻田文學に、「予の自然主義」と云ふ一文を書いて、此の大自然との間に何等の關係交渉を認めず、只、人事に齷齪たることのみを書いて居る今の自然主義なるものには慊らないと云つてあるが、獨歩氏の立場から云つて、尤もなる言であると思ふ。所が、それ程自然に對して憧憬渇仰の深かつた獨歩氏が、豐後の佐伯時代――田舍學校の敎師として自然の美に親しみ極めて淸楚なる生活を送つて居られたものが、人生の道に乘り出してからは、非常な苦痛に會ひ、人一倍人生の酸味を味はれたと云ふのは、實に運命の不可思議なことゝ思はれる。殊に其獨歩氏が、人事の中でも最も活動的な戰爭に、一度びは從軍記者として、一度びは雜誌經營者として、活動を試みられたのは、獨歩氏本來の性質より見て、誠に不可思議なる事に思はれる。それと云ふのも獨歩氏の性質の一面に、絕えず活動的な、事業と云ふ風なことを夢みて居られたからでもあらう。けれども、獨歩氏は到底事業家ではない。實世間に出て、實世間と共に盛んに活動して行き得られる人ではない。所詮藝術家である。北海道に行つて、あの千古の大深林に入つて其所を開拓し、理想せる安住の地を作らうとせられたのであるが、それは今日より見れば、獨歩氏の一の空想に止まつて、北海道に行つて、決して北海道の地に一つの鍬を入れたのでもない。只、其紀念として、「空知川の岸邊」の一篇を得たのみである。而も「空知川の岸邊」は吾人に取つて大なる土産である。余は此の「空知川の岸邊」を限りなく愛讀して居る。あの蒼茫極りなき北海の大原の中にある千古の大深林の寂々寥々たる自然の描

獨歩氏と其作物

蒲原有明

國木田獨歩氏の作物を通じて、人生の見方の皮肉なのは、人生と所有苦戰惡闘を經た結果であらう。若し、獨歩氏にしてこの苦戰惡闘がなかつたなら、或は小説を書かれなかつたかと思ふ。

獨歩氏は、然う云ふ質の根本から云つても、眞實の詩人である。詩人と云つても狹い意味の、即ち小説家に對する詩人である。初め、熱烈なるキリスト信者であつた時、英國の湖畔詩人ウォーズオースに渇仰せられたと云ふのも、極めて自然な成り行きである。今年になつて、讀賣の日曜附録に、「砂漠の雨」と云ふ散文詩を書いた。余はその作を興味深く――獨歩氏の性質から云つて、意味あるものと思つて見た。詩人としての獨歩氏が、今迄小説を書いて居た、それが病床に入つて忽然として、あゝした物を書いた。其所に或る深き意味ある如く考へる。天今少し獨歩氏に命を假せば如何なる傾向に進んで行かれたか、多分、あゝした散文詩の方面に進まれたことゝ思ふ。

獨歩氏ほど、自然に渇仰し、自然を憧憬された人も、明治文學の初まつて以來、甚だ少ない

といふのであるが、その書き起しの「悠久にして不可思議なる、生死を吐呑する、此の大宇宙、爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる此大自然」といふ一節は、獨歩氏一家の人生觀を明らかに言ひ現はしてゐるやうに思はれる。『濤聲』の序の代りに載せてある『秋の入日』といふ獨歩氏自作の新體詩の「要するに悉、逝けるなり！在らず、彼等は在らず。云々」といふ一篇を誦んで見ても、流轉消滅の人生を圍繞し支配して、儼乎たる永劫の沈默を守る自然の威力に、慴伏して慟哭する趣きがある。獨歩氏の作風には一體にロマンティックな脈があつた。而してそれが幾年かのうちにいろ〳〵に變つても行つた。しかしながら、この自然の威力の前に慴伏し慟哭する心もちは、前後を通じて獨歩氏の人生觀の根柢であつたやうに思はれる。人生はうら悲しい、寂しい、泣いても、もがいても、自然の力、じり〳〵と吸ひつけてゆく目に見えぬ自然の磁力運命の力には敵はぬといふ心が、つねに獨歩氏の人生觀の根柢に横はつてゐたやうに思はれる。作品を離れて、親しく獨歩氏その人を想ひ浮べて見ると、一層その感が深い。獨歩氏に就いては、いろ〳〵想ひ出すことが多いが、何だかセンティメンタルな心もちになつて、はつきりと纏めることが出來ないから、これだけにして置かう。

つぱらつて居て、何のことだか要領を得なかつた。初對面の挨拶もしないで盃を突き付けられ、僕も亦だまつて盃を返した。然し、其時の感じは甚だ好かつた。新らしく話をするやうになつて見たらば、面白かつたであらうにと、今でも思つて居る。

作風の一部に就きて

片上天弦

獨歩氏の作風の全體を論ずるといふことはむづかしいから、たゞその作風の一部に就いて、一寸氣のついたところだけを言つて見よう。

今年の二月の「早稻田文學」に、『ワーヅワースの自然主義と余』といふ獨歩氏の文章が載つてゐる。あれの結末は、

悠久にして不可思議なる、生死を吐呑する、此大宇宙、爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる此大自然、事實中の大事實當面の眞現象に就ては何等の感想をも懐かない文人が、如何に巧みに人間の事實を直寫したからとてそれは一藝當たるに過ぎない。斯くて文藝何の値ぞ、所謂る自然主義何の値ぞ。

歩は獨歩として置けば好いのだ。

◎獨歩氏の文壇に於ける地位は、何れ問題となるであらうが、自ら欺かざる僕の考へを云ふと、其技倆に於て、又、其文壇に及ぼしたる影響に於て、共に彼れは一流の人ではない。少なくとも彼れの過去は、然う大したものではなかつた。然し乍ら、惜しむべき將來があつた。彼れに若し十年、二十年の齡を假したならば、右の評價は一變してあつたかも知れない、返す〴〵も殘念なことである。

◎僕の讀んだものゝ中で言へば、「運命」中の「空知川の岸邊」が一番面白かつたと思ふ。「運命論者」には、部分的な面白い所はあるが、全體としては餘り感服しない。「竹の木戸」などは、作風の一轉化を示すと云ふ意味に於て注目に値ひするけれ共、作其物の價値は、然う大したことはないと思ふ。

◎最後に一言附け加へて置く。以上は僕の僞らざる所感ではあるが、所感其物を公平穩健とは必ずしも思はぬ。何故なれば、僕の頭は反撥的であるからである。世間が餘りに持ち上げ過ぎて居るやうに、僕の目に映ずるからである。自ら欺かざる而して公平穩健なる獨歩論は、之れを半歳の後、一年の後、或は五年十年の後に讓る。

◎僕は或る所で、後にも先きにも只一度獨歩氏に會つた。然し、其時獨歩氏はぐでん〴〵に醉

ると、褒め役は外にあらう。獨歩氏は僞りの嫌ひな人であつたと聞くから、僕は、獨歩氏の作品に就て、僞らざる所感を述べて見やう。

◎獨歩氏の作風は、今日から見れば、それほど新らしい物ではない。硯友社全盛時代に於てこそ、あゝ云つた書き方も、非常に目新らしく見えたかも知れないが、所謂自然主義の呼び聲と共に、文壇が一廻轉してから後は、獨歩氏は必ずしも新流風を代表する作家ではなかつた。

◎獨歩氏は性來のロマンチケルである。其傑作と言はるゝものに於いて、特にロマンチックの傾向を示して居る。

◎獨歩氏は、此の近年に現はれた作家中、最も好く其個性を發揮した人である。獨歩氏には、徹頭徹尾、模倣踏襲の跡がない。十數年以前に於て、既に今日の作風を持つて居た。それと共に、今日の新傾向に追從せんことを念としなかつた。

◎獨歩氏は偉大なる作家ではない。然し、氣のきいた作家である。

◎獨歩氏には、始終一種の稚氣とも云ふべきものが付きまとつて居た。但し、それは最も詩人らしい人に於て、最も屢々見る所の稚氣である。僕は、あの稚氣を愛せざるを得ない。

◎獨歩氏が、ツルゲネーフに似て居ると云ふ人があるが、僕は然うは思はない。ツルゲネーフの極く初期のものなどは、多少の影響を獨歩氏に及ぼして居るかも知れないが、全體として餘程兩者の間が隔たつて居る。それならば誰に似て居るか、そんな事を穿鑿する必要はない。獨

なければならぬ。然るに『多情多恨』遂に其消息を見ることが出來ないのである。則ち矢張、巧妙なる洋裝文學たるに過ぎざることゝなつた。

其描く人物は山中一軒家に住む無學な樵夫でも可い、裏店に住む熊公八公でも可い、此等の人物は天地玄妙の理など知るわけがない、宇宙觀も人生觀も有つたものではない、たゞ社會の尤も平凡なる一員たるに過ぎない、但し若し之をしも描くべき詩料とするの價値があるならば、矢張り之を描くに天地間に其生を托する哀々たる一生靈として之を觀なければならぬ。

今は唯獨歩を悲しむの情に心亂れて、再び其總ての作を繰返す暇が無い。以上はほんの記臆の限りを述べた丈だから、錯誤もあらう、脫漏もあらう。それはどうか許して下さい。(七月二日記)

僞らざる僕の感想

生田長江

◎獨歩氏を長い間埋沒さして置いた人達ちが、今は無暗矢鱈とか、つぎ上げて居る。殊に此際であ

して入れて貰ひたい。『夕立』などゝ云ふ佳作もある、其他にも一つ二つあつた。此間收二さんに聞いたら『富岡先生』も萬朝へ應じて失敗したものを書き直したものださうだ。

獨歩は作を始めた時分如何なる點で當時隆盛だつた硯友社一派と考が異つて居つたか、それは新聲社が明治三十五年四月に出した『現代百人豪』の第一に、賴まれて餘義なく彼の書いた「紅葉山人」と云ふ一文を讀めば分る。中に曰く――

新時代の要求とは何であるか、人を社會の一員として視るばかりでなく、天地間の生命として觀んことを求むるのである。

又曰く――

彼等（紅葉山人一派を指す）は遂に自家を社會の一員として見、且つ學び且つ力め且つ戰ひ、且つ笑ひ且つ泣き且つ叫ぶの外、此不思議なる、此無窮無邊なる天地の間に介立して、其玄と其妙と其大とを痛感し、而て煩悶するが如きことを多く爲なかつたらしい。即ち彼等の寫す人生は社會と個人との交渉たるに過ぎない。

又曰く――

『多情多恨』の鷲見柳之助も同じ事である、鷲見其人は紅葉の描ける如き偏屈人、泣蟲、正直漢なら其で可い、彼をして妻の死を見て人生觀に苦しましめよとは言はない。たゞ之を描く處の紅葉其人は何所までも柳之助を生と死の不思議なる法則に支配せらるゝ此天地間に置いて見

獨歩は又芝居にならぬ小説の元祖である。近頃でこそ芝居にならぬ小説が多少世間に認められて來たが、つひ四五年前迄は獨歩がその芝居にならぬ小説を書いて苦しい生活をして居たのだと思ふと今昔の感に堪へぬ。

獨歩の作物には獨歩一流の解決がある、理想がある、結論がある。無解決でも無理想でも無結論でもない。獨歩は常に自ら「人間學」の教授だと威張つて居た。確かに獨歩は人情哲學の學者であつた。單に「描寫する人」では無かつた。

獨歩に『非凡人』と云ふツルゲエネフ(『アンドレイ・コルソフ』)の飜案と、『絲くづ』と云ふモオパッサンの飜譯と、『決鬪家』と云ふツルゲエネフの飜譯がある。獨歩が直接に西洋小説を紹介したのは斯う三つだけだ。中で飜案の『非凡人』が一番傑れて居る。この飜案を見ると獨歩とツルゲエネフとが如何に接近して居るかがよく分つて面白い。『決鬪家』は名前だけで實は獨歩の譯ではないと云ふ事だ。

この他に獨歩はワアヅワアスの詩に註釋を附けて出した事がある。その本はつひ失くして了つたが、その註釋の矢張獨歩式であつた事だけは覺えて居る。縱に細長い袖珍本だつた。

『濤聲』以後の作は近日『第二獨歩集』として出るさうだが、私は其中に出るだらうと思つて居る中では『渚』『肱の侮辱』『二老人』などを愛讀した。

若し全集出版の計畫があるなら、獨歩が萬朝報の懸賞小説へ投書して當選したものなども採

（五）キャラクタア、スケッチとも云ふべきもの。

『源おぢ』『忘れ得ぬ人々』『巡査』『富岡先生』『非凡なる凡人』『號外』等。

大凡此五通りの間を彼方へ行つたり此方へ來たりして居たやうだ。素より此分類の何れにも當てはまらぬ作はある。全體分類と云ふ事の無理な事も分つて居る。然し獨歩の作で傑れたものは何だかみんな此五つの分類の中へ這入るやうな氣が以前からして居たので、それで書いて見たのだ。キャラクタア、スケッチには淋しい人とか零落した人とか世に捨てられた人とか時代に遲れた人とかゞ多い。獨歩が斯かる人物を好んで書いたのは確かにツルゲエネフの感化を受けたのだ。自然に對する新しい研究もツルゲエネフに負ふ所のあつたのは無論だが、これは主としてワアヅワアスから來て居る。概說すれば獨歩は人間をツルゲエネフに學び、自然をワアヅワアスに學んだのだ。

獨歩は第一人稱小說の開祖であると言つても好い。彼の作には早くから第一人稱の說話があつた。『運命論者』『女難』『正直者』等は殊にその傑れたものだ。

獨歩は又手紙小說をよく書いた。『第三者』『湯ヶ原より』『夫婦』等皆然りである。又『酒中日記』等の日記體小說も書いた。『惡魔』の如き大部分隨筆から成つてる小說もある。小說の中に圈點のあるのもこの『惡魔』が始まりだ。これらは確かに舊來の小說に新形式を加へたものだ。

獨歩は昔から戀を解いた、夫婦を解いた。獨歩は昔から宗教を解いた、運命を解いた。そして死ぬまで戀――夫婦――宗教――運命を解いて居つた。

『牛肉と馬鈴薯』の中にある「驚き」を欲する熱望は、『獨歩吟』の中の『驚異』と云ふ新體詩に既に出て居る。『空知川の岸邊』にあるやうな北海道生活を欲する念慮は早く同じ『獨歩吟』中の『山林に自由存ず』に出て居る。『富岡先生』の前に『渠』(「武藏野」の中の『まぼろし』を見よ)と云ふ作のあるのを見ても、彼の變らないと云ふ事は分る。

彼の作物は凡そ左の五種に分ける事が出來る。

（一）　自然を書いたもの。

『武藏野』『小春』等。

（二）　戀愛及び夫婦問題を書いたもの。

『わかれ』『歸去來』『牛肉と馬鈴薯』『第三者』『湯ヶ原より』『夫婦』『鎌倉夫人』『戀を戀する人』等。

（三）　宗教問題及び運命を解いたもの。

『女難』『牛肉と馬鈴薯』『正直者』『運命論者』『酒中日記』『惡魔』『帽子』等

（四）　少年時代の追想。

『少年の悲哀』『春の鳥』『馬上の友』『畫の悲しみ』『日の出』等。

故獨歩の作物に就て

小山内　薫

私は獨歩の作は餘程早くから好きで讀んだ。從つてその作に就ての智識は多少あると自ら信じて居る。批評ではない、智識である――それを述べて見たい。

私の思ふに獨歩は確に天才である。修養鍊磨して成つた小說家ではない。その小說は大抵默して居る事が出來なくて書いたものだ。その小說にして意識的に文學製作上の新しい試みをやつたものなどは一つも無い。彼は思ふ儘筆の行く儘に書いたのだ。彼は文學者的臭味の無い人だ。舊來の文學者から見れば彼は素人だ。彼は所謂文學者ではない、唯の人間だ。文學者が文學を書いたのではない、人間が人間の事を書いたのだ。

獨歩の作物は初から終まで變らなかつた。新體詩が文章體になり、文章體が口語體になつたと云ふやうな外見上の變化はあつた。けれどその書いて居る事見て居る事は昔から同じだ。『源おぢ』から『渚』に至るまで少しも變らない。獨歩が若し新しければ昔から新しいのだ、獨歩が若し豪ければ昔から豪いのだ。

なく、失望もなく希望も無く、たゞ空然として眼を開き、耳を開いて居る』

『余は時雨の音の淋しさを知つて居る、然し未だ甞て、原始の大深林を忍びやかに過ぎゆく時雨ほど淋しさを感じたことはない。これ實に自然の幽寂なる私語である。深林の底に居て、此音を聞く者、何人か生物を冷笑する自然の無限の威力を感ぜざらん。怒濤、暴風、疾雷、閃電は自然の虛喝である。彼の威力の最も人に迫るのは、彼の最も靜かなる時である。高遠なる蒼天の、何の聲もなく唯だ默して下界を視下す時、甞て人跡を許さざりし深林の奥深き處、一片の木の葉の朽ちて風なきに落つる時、自然は欠伸して曰く「あゝ我一日も暮れんとす」と、而して人間の一千年は此刹那に飛びゆくのである』

* * * *

國木田氏の文章は、時にやゝ蕪雜にして、連絡欠けたる感あること無きにしもあらず。ツ氏の文章とは、大差ありといふべし。されども、國木田氏の、その思想の要領たる所は、如何にしても、これを言はんとする精力の、そこにも表はれたるものとして、これをさへ貴ぶ人は少なからざるべし。

要するに、國木田氏の如き性急なる作者には、事件の複雜なる作品よりは、事件の單純なる作品の方適することは疑無かるべし。

『牛肉と馬鈴薯』及び『巡査』の如きは完璧ならむ。

作物皆、感情の流露なり。從つて、作者の所期は、歸趣を明確にするにあるは、疑無からむ。されば、事件の遷移、境地の組立等には、やゝ無理なる箇所無きにしもあらざるべし。『運命論者』の如きは、その一例なり。

氏の作品に接して、何人も快く感ずるは、その作品を通じて、作者の氣の利きたる人物の一斑を覗ひ得らるゝことなるべし。氏の作品は、確に才人の作品なり。

氏の作品には、作者の鋭利なる觀察力、一種諷刺の力、悲哀寂寥の感情等、明かに表はれ居れり。

聞く所によれば、氏は、露國のツウルゲエネフの作品を愛讀せられたりといふ。而して、如上の三點に於て、ツ氏の感化を受けたりと見るべきところ甚だ多し。唯だ、彼此天分の大小に甚だしき懸隔あるは、生國の大小及學識の深淺に起因するところ極めて多かるべし。一例を擧げむか、氏の作品の特徴たる、何とも云へぬ、落著きたる、所謂灰色の空氣は、國木田氏の作品には深くは現はれ居らざるが如し。

今左に、『空知川の岸邊』中より、ツウルゲエネフ張りなる所を引證す。

『雨と霧との爲に薄暗くなつて居る室の片隅に身を寄せて、暮近くなつた空の雲の去來や輪をなして回轉し去る林の立木を茫然と眺めて居た。斯る時、人は往々無念無想の裡に入るものである。利害の念もなければ、越方行末の想もなく、恩愛の情もなく、憎惡の惱も

けれ共、獨歩氏の作物には、總べての作物を通じて、人生に對する嚴肅な意味が充實して居て、只、浮いた男女の浮かれた話ぐらゐなものを材料として書いて居る世間並の小説家とは、遂に其選を異にして居る。それだから、獨歩氏の作物を讀むと、他の人々の小説と違つて、何所か胸にしんみりと來る所がある。其所は獨歩氏の作物の非常な特色である。或は天下一人だと云つても好いかも知れない。

私は直接に獨歩氏を知らぬが、間接の話しに聞くと、獨歩氏は非常に感情の熱烈な人で、種種な事實に逢遇した人のやうである。獨歩氏は其自己の觸れた事實・經驗より得た實感を僞らず大膽に書いた人である。それで、獨歩氏の作物は他の人々の小説とは異つて居たのだ。それを世間が認めなかつたのは、全く世間の好尙が幼稚であつたので、獨歩氏の作物に感服するやうになつたのは、世の中がそれ丈け進んだのである。然し、感服しなかつた時代に比べて、感服するやうになつたのは進歩には違いないが、今一層進歩すると、又感服しないやうにならねばならぬ。

作物皆感情の流露也

馬場孤蝶

國木田氏の小説は、一言にして言はゞ、氣を以て勝る小説なり。今少し詳に之を言はんか、

として發行してから、世評に上つたと云ふのは、作物其物に價値が加はつたのでもなければ、其ねうちが異なつて來たのでもない。個々に公にして居た時には、未だ其作物を鑑識することの出來なかつた世間が、「獨歩集」を出す時代になつて、初めて其眞價を解するやうになつたので、つまり世の中の好尙が進んで來たのである。

私は、獨歩氏の名前が、「獨歩集」に依つて知られる前に、獨歩氏の作物を讀んで、些つと面白いと思つた。然し、今日世間で渇仰されて居る程、製作其物には感服して居ない、私の思ふのに、今日世間で獨歩氏を渇仰するのは、製作以外に獨歩氏に何か大なる所以あり、人と異つた偉いところがあつて、後には必らず大なる價値ある製作を出す人であると云ふやうな期待を獨歩氏に確認して、其期待に對して大いに渇仰して居るのではないかと思ふ。私は其れ等の人人のやうに直接に獨歩氏を知らないから、獨歩氏がどんな人物であるかどんな思想を抱き、どんな抱負を有する人か、全く知らないので、從つて、今迄現はれた製作以外に、獨歩氏にさる希望を確に囑して、其希望に價値を認めて渇仰することは出來ない。

獨歩氏の病床に於ける談話筆記が或る雜誌に出て居たが、其中に、今迄書いたものは、之れから大いに成さんとする所の土臺に過ぎぬ、と云ふやうなことを言つてあつたが、或は之れから大いに成す所があつたかも知れぬ。然し、少なくとも今迄現はれ來つた所の製作、それ丈けには、今日渇仰する程大なる價値を見出すことが出來ぬ。

獨歩氏の作物と世間の好尚

內田魯庵

私は、實の所獨歩氏の作物に就てお話しする程、獨歩氏の作物を精讀して居らぬ作物に就て、彼れ此れ批評めいたことを云ふのは、故人に對して失禮でもあるし、且つ私自身としても餘り心好くないことであるから、批評のやうなことは一切言はぬとして、若し私の名前があるために雜誌が賑かになると云ふなら、獨歩氏の作物全體に就ての感想を、極く簡單にお話しする。

忌憚なく云ふと、私は獨歩氏の作物に就ては、世間で今云ふやうに、それ程感服することは出來ない。と云ふと獨歩氏の作物に渇仰する人々は、詳しく讀みもしないで、そんなことを云ふのは淺薄であると云ふであらうが、私は、私の讀んだ範圍で少なくも然う感じたのである。「獨歩集」が出る以前は、獨歩氏の作物に就て、餘り彼れ此れ云ふ人はなかつたやうである。それが「獨歩集」が一度び出ると、世の中の人々は其作に價値を認めて、一時に騷ぐやうになつた。然し、獨歩集に收められた作物は皆舊作で、一度びは公にされたことのあるものばかりである。其一度び公にされた作物が、其當時は何の反響もなくて、却つて後年之れを「獨歩集」

る一人の巡査を捉へて其巡査の動作行動を描き、巡査なる人は斯う云ふ人であつたと云ふ、其所が面白い。即ち低徊趣味なる意味に於て、『巡査』を面白く讀んだのである。

　余は高濱虛子氏に其話をしたことがある。所が虛子氏は、『巡査』は嫌ひだと云ふ。面白くないと云ふ。あの敍述が自然でない、どうも拵へたもの丶やうに思ふ、不自然であると云ふ。然し、私の讀んだ時には、別にそんな感じはしなかつた。

『酒中日記』は、人は褒めて居たやうだが、私は餘り感服しない。一口に忌憚なく云つて了へば、要するに不自然な所が多いやうに思はれる。では何所が不自然なかと問はれ丶ば、一々本を繰つてお話しせねばならぬが、不自然な所が多い爲めに、讀みながら感興が乘らなかつたやうに思ふ。

『竹の木戸』は惡いとは思はぬ。然し、あれが近來出る他の人々の短篇を抽んで丶面白いとは思はぬ。殊に獨步氏の爲めに、褒める程のものではない。批難を云ふと、あのお源とか云ふ女が、終りに首をくゝるのは不自然だと思ふ。却つて殺さない方が自然である。若し殺すなら、今少し緊張さして殺した方がよからう。

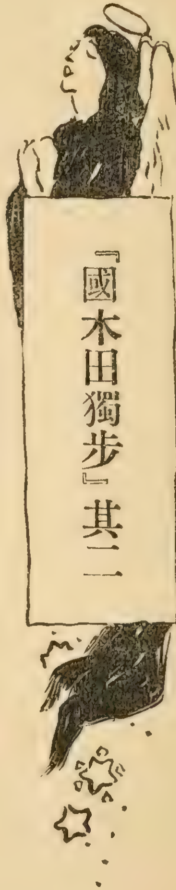
間を描き出したもので、其巡査が好く出て居る。此の篇の面白味は、恰度チエホツフか誰かの書いたもので『爺』と云ふものがある。其「爺」の面白味が、『巡査』のやうなあゝした面白味である。巡査なら巡査、爺なら爺を現はしたのは、巡査がどうしたと云ふ事を書いたものではない。爺がどうしたと云ふ事を書いたものではない。只、巡査なる人は斯う云ふ人であつた、爺なる人は斯う云ふ人であつたと云ふことを書いたに過ぎぬ。其所が面白いのである。巡査なら巡査に就ての觀察を書いたものだからして、前の『運命論者』とは其面白味が違ふ。余の言葉で云ふと斯う云ふものは低徊趣味と云ふ。巡査がどうして、それから斯うしたと云ふやうに、原因結果を書いたものではない、其巡査が明日はどうなつても、明日のとは關はない。只、巡査其物に低徊して居れば好いのである。小さんが醉漢の話しをする。聽者は其醉漢の話を只樂しんで居れば好いのである。其醉漢が明日の朝になつて何うしたとか、斯うしたとか云ふことを聞く必要はない。聞かなくても醉漢其物の所作行爲に樂しむことが出來る。即ち、筋とか結構とか云ふものが面白いのではなくて、一醉漢なるものに低徊して、其醉漢の醉態を見る其事に興味あり、面白味あるのである。それを余は低徊趣味と云ふ。普通の小説は筋とか結構とかで讀ませる。即ち、其次ぎはどうしたとか、斯うなつたとか云ふ事に興味を持ち、面白味を持つて讀んで行くのである。然し、低徊趣味の小説には、筋、結構はない。或る一人の人の所作行動を見て居れば好いのである。『巡査』は、巡査の運命とか何とか云ふものを書いたのではない。或

言葉を使用して、批評は虚僞になり易いものである。況して、漫然讀んだ作物の古い記臆を喚び起して云ふのだから、とても完全な批評などゝ云ふ事を期することは出來ない。で、其事は豫め斷つて置かねばならぬ。

『運命論者』は面白いと思つて讀んだ。實際面白いと云ふ感があつた。然し、其面白いと云ふ感じは愉快と云ふ感てはない。只、氣であつたのだ。あの作物が自然派の作物であるかどうか余は知らぬが、『運命論者』を讀んで得た感じは、恰度スチヴンソンを讀んで得た感じに近い。スチヴンソン、プラス或る物の面白いと云ふのは、只、氣で面白いのである。ウテヴンソンの書いた作物は突飛である。然し『運命論者』の作者は、此の作物を、只、氣で書いたものではない。千人中只一人あるか無いかと云ふやうな、最も珍らしい事件を借り、其事件に依つて、人生の或る物を言ひ現はさうとしたので、スチヴンソンの作物とは、其趣きが大變違つて來る。然し、スチヴンソン、プラス、エッキスの方を云ふのではない、私の今面白いと云つた意味は、此の『運命論者』の中に現はれた所のスチユエーション、即ち主人公の境遇及び所爲に、ロマンチツクエーアを帶びて居る其事が面白いと云つたのである。それはエッキスの方にも面白い所があるにはあるが、余は世間で云ふ程、大なる價値を認めて居ない。此の『運命論者』プラス、サムシングに就ては餘り感服することが出來ないのである。

次ぎに今余の記臆に殘つて明らかなるは、『巡査』だけである。『巡査』は只巡査なる一人の人

所が、或る日理學博士の寺田寅彦氏が來て、「獨歩集」を讀んだかと云ふ。一向知らないと云ふと、大變面白いから是非讀んで御覧なさいと云ふ。寺田寅彦氏の「獨歩集」が面白いと云つた意味は、其頃流行の小說と違つて居て、新らしくて面白いと云ふのである。確か幸田露伴氏の「天うつ浪」と相前後して出た時だと記憶して居る。兎に角、寺田氏は非常に褒めて居た。世間では斯う云ふ小說を何故默つて居るであらうか、今少し褒めなければならぬ筈だと、頻りに殘念がつて居た。で、それは余も見たいものだと、早速本屋に行つたが無い。寺田氏に借りやうと思つたが、生憎寺田氏も人に貸した儘になつて、手元になかつたので、それなり「獨歩集」は讀まずに了た。其後雜誌に出たのを時々讀んで居る中に、第二獨歩集と云つたやうな「運命」が出たので、早速讀んで見た。然し其「運命」も全部讀んだのではない、其中の三四篇しか讀んで居らぬ。で、余の獨歩氏に於ける智識は、「運命」に於ける一部分と、其他諸雜誌に散見したものをほんの少し讀んだに過ぎないので、余の獨歩氏の作物に對する智識と云ふものは極めて淺い。で、他の獨歩氏の作物を全部遺漏なく讀んだ人や、又、幾度でも繰り返して讀んだ人々のやうな、批評の出來る譯もない。それに讀んでから時日も經つし、又讀む時にも、今日あるを豫期して讀んだ譯でもないから、何うも記憶が極めて茫漠として居る。讀んだ當座未だ印象の新らしい時にした所が、面白いと感じた所でも、批評するとなると、其面白いと云ふ感じを言ひ表はす爲めに、無理に言葉を工夫して、實際自分の面白いと感じた其感じとは、かけ離れた



獨歩氏の作に低徊趣味あり

夏目漱石

余は個人として國木田獨歩氏を知らぬ。西洋から歸つて六年になるが、歸つた當時は、殆んど日本の文壇の様子を知らなかつた。どんなものが流行つて居るのか、何人の作物が歡迎されて居るのか、雜誌などの種類でも、どれが文藝雜誌で、どれが商業雜誌だか、然うした事は全く知らなかつたのである。其中に、家に來る若い學生などの話に聞いて、少しは文壇の消息が分るやうになつた。然し獨歩氏に就いては知らなかつたのである。古く、新體詩なんかを書いて居た當時、獨歩氏の姓名だけは知つて居たが、小説家としての獨歩氏は全く知らなかつたのである。

るが、蔭では始終その人々のことを心配して、兎や角案じて居た、然し面と向つては感謝の言葉一つ述べたことがない。

獨歩氏は決して人を疑はなかつた。「あらゆる人を信じてあらゆる人に賣らるゝとも、あらゆる人を惡んであらゆる人に斥けらるゝに優る」と言つて居た。獨歩氏は元來世評に注意しない人と聞いて居た。然し病氣にかゝつた後はよほど神經が鋭敏になつたらしく、自分に關する記事は如何なる小問題と雖も或は喜び或は怒つて居た。

獨歩氏の口癖は簡單明瞭といふことであつた。如何なる問題にても簡單明瞭に處決することを喜んだ。葬式の晩未醒君が「獨歩氏の法名は簡單院明瞭居士に限る」と言つた。確にその通りだ。彼は複雜を惡んだ、間色を惡んだ。

「すべてのもの皆逝けるなり」これを以てこの談話を結ぶ。

れる眞似をして自ら慰めて居つた。そして「もし僕が死んだらこれを石井君に贈れ」と言つたので、收二君が戯れに「人に遣るほどなら僕に呉れろ」といふと、「名器は人を選んで殘すべし、石井君以外天下この釣竿を殘すべき人なし」と笑つた。

僕は獨歩氏の枕頭に近づく事殆んど二ケ月間、然し獨歩といふ人は自分の身のまはりに他人の手を歡ばない、だから僕は此二ケ月の間に痰壺を取つてやつたことが二三度、新聞を讀んで聞かせたことが二三度しかない。僕が身體に觸つたこともない。たゞ觸つたのは臨終の晩に驅け付けた時だけだ。僕が驅けつけた時には眼を瞑ぢて脣が死色を呈して居た。いきなり僕は手に縋り付いた、そして胸に手を置いた、胸は僕の手よりも熱かつた。これが僕が獨歩氏の身體に手を觸れた始めである、そして永久に最後となつた。

骨を揚げに行つた時は涙の落つるのを禁じ得なかつた、人目無い松原の中で泣いた、他人の手を歡ばぬ、我儘な獨歩氏も、骨になつては我々の箸の先で自由にされる。彼の負け嫌ひの獨歩氏にして、もし靈があつたらさぞ口惜しく癪に障る事であらうと思つた。

獨歩氏は一面肝癪持ち、强情張りなると共に一面には非常なる愛すべき優しい心を持て居た、嘗て植村正久氏が病床に訪れた時泣いて面を擧げることが出來なかつた。舊師の手に縋つて、たゞ此の煩悶より救つて呉れ、助けて呉れと願つた。植村氏の前に於ける獨歩氏は極めて從順なる、そして極めて謙遜なる弟子であつた。奥さんやその他に對しても隨分無法に怒る時もあ

關するあらゆる書籍を讀み、又北海道歸りの宣敎師友人等を叩きてあらゆる智識を吸收した、そしてあらゆる方面より北海道を研究し盡して後行つたのだ。だから如何しても移住は成立しなくてはならぬのだが、失敗した、といふのは枝葉はすべて出來上つても、北海道移住といふ根底が空想だつたからだ。戀そのものすら何時も空想に始まつて居る。そんな風に根底を空想に置いて實行に着手したのだから敗れるのは素よりその所だ」と言つて居た。

蘇東坡が陶淵明の詩を評して曰く「淵明作詩不多、然質而實綺、癯而實腴」と、移して以て獨歩氏の文章を批評することが出來る。獨歩氏の文章は甚だぞんざいで書きなぐつたやうであるが、實は一句々々非常な苦心を以て洗錬彫琢した結果だ、文章に於ての獨歩氏は非常な苦心をして居つた。常に曰く「僕は手紙一本でも葉書一本でも書きなぐるといふことは出來ない、非常な苦心を以て書く、病氣になつてからはその苦心が億劫なので、ツイ〳〵友人にも疎遠になつた」と言つて居た。元陳繹詩譜に曰く「情眞、景眞、事眞、意眞」と、以て獨歩氏の作品を評すべしである。又蘇東坡が「實錄」といふことを言つた。獨歩氏の小説なぞは確かにその實を錄するものだ。

獨歩氏は癒つての第一の望は小説を書くことゝ釣をすることとであつた。此度石井研堂氏に送つた釣竿の如き非常に珍重して居たものだ。死ぬ二日前の日令弟收二君がその釣竿を見せて貰つたが、獨歩氏は手を觸れることをも許さなかつた。そして十管ほどを接いで、病床に綸を垂

つて何とも云へなかつたさうだ。でも「まあ盆栽位がいゝでせう」と慰めて言つた。すると獨步氏は非常に喜んで「それに限る、盆栽も造つたのじや詰らない、實生から育てゝみなければその趣味がわかるまい」などと喜んで居た。

獨步氏の病中枕頭愛誦した本は新刊書籍雜誌の外、バイブル、陶淵明集、聊齋志異、二十八人集、水滸傳、碧巖錄、維摩經、菜根譚、そんなものだつた。他に粗食養生論とか、强肺術とか、治肺實驗談等の本が十部近くもあつた。あれほどの强情我慢な人も病氣にはよほど弱つたと見える。

思ふても殘念なは今一度筆を執らせたかつたことだ。自分でも談一度(ひとたび)藝術の事に及ぶと身が戰(ふる)へるほど書き度いと言つて居た。短いものでは「渚」を早く完成し度いと言つて居た、その中の二、三の趣向は殆んど文章となつて頭に出來て居た。その一つなぞは僅(やつ)と一枚半ばかりのものだ。それすら終に書き得なかつた。長いものでは吉田松蔭を主人公として或る小說を書き度いと言つて居た。これはよほど得意のものらしく、松蔭を假りて自分を書くのだと言つて居た。

獨步氏は自分で自分を「予は空想實行家也」と言つて居た。「予が一生は確かに空想の連續である、戀に敗れて北海道に逃れしも、獨步社を經營せしも、政事家たらんとせしも、すべて空想なのだ。殊に北海道行の如きは全く同地に移住する覺悟にて二月(ふたつき)の間每日圖書館に通ひ北海道に

獨歩氏は我儘な――憎いほど我儘な人であつた。我々もあまりの我儘に憤慨して茅ヶ崎を逃げ出さうかとまで思つたこともある。然しその我儘たるや決して自ら高くしたり、自ら爲にする所があつたりするやうな、そんな卑しい心は決して存して居無かつた。畢竟は堅い自信と意氣との上に築かれた我儘だつたのだ。花袋氏、未醒氏その他獨歩氏に最も近づいた人は、例の癖とは知りながらも、その我儘に憤慨して、憎い奴、擲つてもやり度いと腹を立てる事も時々あつたといふ。然しその無邪氣な隔意のない氏の平常を見るとすぐその人達の怒りも解けたのだ。その例に、嘗て僕は氏と或る問題で爭つたことが只一度ある、兩々相下らす、少時爭つた、すると最後に獨歩氏曰く、「君は何と言つても駄目だ、僕は恁う言つて居るぢやないか」と言つて肩を結んで了つた。「僕は恁う言つて居るぢやないか」といふ一語に含まれた意氣と抱負は、獨歩氏の一生を通じて見られた。

獨歩氏は決して死ぬ氣はなかつた。或は遺言をしたり、悲觀したり或は悟つたりしたけれど、それは眞に死ぬと思つて言つた言葉ぢやない、死ぬその日まで死なうとは思つて居なかつた。現にその著書に就いての希望や、目論見やは何れも十年か十五年先を見越して言つたことばかりだ。死ぬ前の日鹿島櫻巷君が訪ねて來た時「僕の道樂は釣だ、然し、も一つ位ゐ道樂が欲しい、何にしたら宜からう」と相談をした。鹿島君はその直ぐ前醫者を訪ねて獨歩氏の病を聞いたから「最早二三日だ」と言はれたのだ。その病人から此のやうな相談を受けたのだから、胸が迫

て居るけれども、それは決して獨歩氏その人が自己を欺き人を欺くためにやつたものではないと思ふ。

獨歩氏は眞に怒り、眞に泣くことの出來た人だ。一體人間といふものは中々眞氣に怒れるものではない。七分怒つても猶三分の洒落氣を存して居るものだ。さほどでもない事に無理に怒つた顔をしたり、泣かぬでも宜い所に涙を流したりする、然し獨歩氏だけは怒れば眞に怒り、泣けば眞に泣いた。嘗て如何なる人に向つても、如何なる場合でも、決して自分の感情を枉げなかつた。新聞にも出て居たことだが、恁ういふ例がある。嘗て或る人が、近頃の自然派の悪口を言つて、「あゝまで人間の醜悪な方面を書くといふことは風教の上に非常の害がある。何故社會道德の爲めに人間の良い方面を書いて社會にその善事を勸めないか」と言つたことがある。その人は獨歩氏が非常に恩を荷つて居る人で我々から見ると如何しても反抗し得ぬ人であつたが獨歩氏はその人に對しても猶一言も枉げず讓らなかつた。そして忽ち泣いて「僕等は藝術の爲めに盡して居るんだ、彼等門外漢にそのやうな不謹愼な言を弄されるといふことは實に我々を侮辱したものだ」と言つて非常に憤慨した、その時傍に居た人々は慰めやうと思つていろいろ言葉を盡してみたが氏は如何しても聞き入れぬので、三人傍に居ながら、どうすることも出來なかつた。その時僕は獨歩氏を實に偉いと思つた。藝術には献身的だつたのだ。洒落にやつてるんではなかつたのだ。

神の子たる梁川氏、人の人たる獨步氏。僕は病床に於けるこの二偉人によつて示されたる人生の外に、より偉大なる宗教なく、より偉大なる文藝なく、而してより偉大なる生活なき事を信じて疑はない。少なくとも僕自身にとつてこれ以上偉大なる人生に接する事の不可能なる事を確信する。わが日本民族の中より斯くの如き二個の偉人を出したる事はわれらの永久に誇りとし光榮とすべき事である。

あゝ而も年をついでこの二偉人を失うたる吾人は何たる不幸であらう。昨秋梁川氏の骸を雜司ケ谷の墓地に葬つて泣いた吾人は、今や又青山の墓地なる獨步氏の新塚の上に涙を濺ぐの日に會したのである。今は徒らに故人の功業を云々する時ではない。たゞ吾らは心を同じうする滿天下の人々と、心ゆくまで哀泣の涙を共にしたいのである。

我儘な人

眞山青果

僕は獨步といふ人は嘘の吐けない人だと信じて居る、人に對してのみならず、自己に對しても矢張り吐けなかつたらしい。放浪時代には隨分世間の非難を招ぐやうな行爲もあつたと聞い

獨歩氏はあらゆるものを人に合した人である。梁川氏は靈の人であつて、獨歩氏は人の人である。

梁川氏は「病氣は癒らなくても好いが生きて居たい」と云つた。獨歩氏は「僕はもうこんなにグズ〳〵して居るのは厭だ、死ぬのか生きるのか早く決着がつけたい」と云つた。思ふに梁川氏は病みつゝもなほ靜かに自己の生を迴らん事をのぞみ、獨歩氏は病みつゝ活くる苦痛に堪へなかつたのであらう。梁川氏は肉を靈に活かさんとし、獨歩氏は靈を肉に活かさんとした。即ち梁川氏は内面寂靜の生活に安住し、獨歩氏は生の苦痛そのものと戰つた。梁川氏は病を解脱し、獨歩氏は病そのものを味つた。梁川氏は未來の解決と安住とを有し、獨歩氏はひたすら現實そのものと戰つた。畢竟するに梁川氏は肉を靈に收めて神に活きんとし、獨歩氏は靈を肉に合して人に活きんとしたのである。

二人同じ病に冒されながらも、梁川氏は病を解脱し獨歩氏は病そのものを味うた。病床に於ける梁川氏と獨歩氏とを比ぶれば、一は靜臥冥想の人、一は苦悶奮闘の人であつた。一は病める我れを離れて神の世界の人となり、一は病める我を絶對にして全き人格の人となつた。一は清崇にして而も寂寥、一は男々しくして而も悲壯であつた。一は清く想ふの人、一は強く戰ふの人であつた。あゝ二氏は人間の活きんとする二面の、その一に於てそれ〳〵最も偉大なる人格を示した人である。

同じ病床の中にある人ながら、獨歩氏は全く梁川氏と異つて居た。僕は獨歩氏を思ふ毎に、身は寢返りすらも出來ないまでに衰へ果てゝ居ながらも、滔々抱懷を吐いて止む所を知らないと云ふ痛快なる氏が風姿を面影に描くのである。あの光を持つたキッと見開いた眼なざし、絶え間なく何か不安さうに動いて居る瞳、力の籠つたあの口元、ハキ〳〵した、飾ッ氣のない、そして重味のある、力と熱とに充ちた、獨創的な、聽くものゝ胸の底までも泌み入るやうな話振、それ等を思ふと僕はいつでも獨歩氏がなほ活きて此の世にあるやうな氣がする。梁川氏は病氣の事などは殆んど口にする事がなく、至つて心中が靜平のやうに見えながらも、どことなく病める人と云ふ感があつたに比して、獨歩氏は盛に自分の病氣の事を語り、それについての自己心内の苦悶を語りながらも、何となく病み衰へたる人といふ感がしなかつた。梁川氏を以て靜寂、清崇な病人と云ふべくば、獨歩氏は正に熱烈悲壯な病人であつた。梁川氏は過去を語らず、又語るべき過去を持たなかつたのに反して、獨歩氏は變化に充ちた過去を有し、而も之れを追懷し、之れを語つた。梁川氏は現實の我を語らなかつたが、獨歩氏は些の修飾なくして自己を語つた。梁川氏は寂光の世界を語り、獨歩氏は動ける生の世界を談じた。梁川氏は發動せんとする生の力を沒して安住し、獨歩氏は發動する生の力のまに〳〵心身を動かした。梁川氏を以て肉を靈に沒收せしめた人と云ふべくば、獨歩氏は靈を肉に收沒した人である。梁川氏を靈活の人とすれば、獨歩氏は眞の人である。人格の人である。梁川氏は宗教に合した人であつて、

て、氏のあらゆる苦痛煩悶を超えたる聖姿法音に接する時、ただ何となき靜寂崇高の氣に化せられて、われ知らず「神よ」と念ずる心境に入るを覺えた。が、しかし足一歩現實生活の巷に踏み戻つて氏が閑寂の生活を思ふ時、何とは知れず淋しい、いたましい感の起るを禁じ得なかつた。氏は畢竟靈の人である。肉を靈に收沒したる人である。世界のすべてを自己の一心に集めて、ひたすらに内面生活の根底に沈んだ人である。氏の世界はたゞ一色の靈の世界である。複雜なる色彩の世界、縺れに縺れた現實の世界を、たゞ一つの白き靈の世界に收め、一縷の緒に現實の縺れを集めた人である。複雜なる色彩の世界を離れて居たが故に、複雜なる現實の惑ひなく、現實生活の絲の縺れによらずして、たゞ一筋の靈の緒を辿つたが故に、亂れたる悶えがなかつた。惑はず亂れずして靜かに〳〵自己内心の生命の絲をたぐつて居たのは氏の生涯であつた。

　若くして既に病の冒す所となつた爲めに、氏は終に動搖せる現實世界に出づる時を得なかつた。獨り靜かに退いて、氏はひたすらに自己生活の底に沈んだ。外に動き出でんとした生の力は、氏に於ては全く内に沈むで靈の力となつた。氏は飽くまで内觀の人である、靈の人である、肉を靈に收沒した人である。淋しくいたましくして、而も淸く徹したる氏の生涯は、まさしくこれ秋の趣である。秋に殘り咲く白菊、澄み渡れる秋の中空に蒼白く照る月影、それにもたとへつべきは梁川氏の生涯である。僕は病床中の梁川氏に接する毎に常に淸く靜かに、而も尊い感に撲れたと共に、一面淋しい、いたましい思を禁じ得なかつたのである。

與まつた病室の、後は竹籔につゞいた狹い庭に白菊の五株六株淸くさびしげに咲いて居たのが今でも眼に殘つて居る。これとは異なつて、僕が初めて故人（あゝもう斯う云ふ言葉を用ひねばならぬのか）國木田獨歩氏を茅ヶ崎南湖院の海に面した明るい病室に訪うたのは、今年の夏の初めの、新綠の匂ひ鮮やかな日であつた、おなじく病床中の二偉人に接するに一は秋、一は初夏に於てしたと云ふ事が僕のこの二偉人から受けた印象に誠に意味深い背景をなして居る。

秋と夏！病床中に見えた梁川氏と獨歩氏とに對する僕の感じの相異は、又その秋と夏とに對する感じの相異である。高く澄んだ空、靜止し沈默した地――僕が梁川氏に接した時の感じはこの感じであつた。豐麗な日を受けた靑葉の、夢と力と熱とのこもつた世界――獨歩氏より受けた印象は、これ正しく初夏の世界に對する感じである。而もその逝くや梁川氏は秋に、獨歩氏は夏であつた。秋と夏とは、ついにこの二偉人を思ふ僕の心を永久に離れざる背景である。

僕は梁川氏をおもふ每に、床の上に靜座して眼を半ば閉ぢ、掌を膝の上に重ねて、微かなく聲で彼岸の光明を語られた時の面影を思ひ浮べる。梁川氏は追懷を語られた事がなく、自己を語られた事がなく、又世間を語られた事を聽かない。氏は常に眼を閉ぢ、耳を塞いで、遠く靜かに心を澄まして、ひたすらに自己內心の靈聲を聽いた人である。あらゆる世界を自己の一主觀に集めて、その生命の底から湧き出づる悲哀の泉を汲み、神の源をたづねた人である。現世を離れ自己を沒してひたすら寂光の淨土に化せんとした法悅の人である。梁川氏の病室を訪う

も係らず、近代的の暗い苦悶の影などは殆どない。氏の思想には所謂デカダンの分子はない。世人は就中岩野泡鳴氏などは大雑把に氏を自然派作家の中に入れやうとしてゐるが、私には分類などは何うでも好いのだが、氏の作には所謂近代的の苦悶（ノルドウに嘲けられるやうな）は無いと斷言する。それよりも、寧ろ一種の道德詩趣を帶びた、品の好い同情同感の文學である。同情同感の文學でありながら、淺薄でないだけである。氏の作物は讀んで吾人に苦悶を增さしむる種類のものではない。

氏は年齡から言つても學歷から言つても、基督敎を棄ては棄てたが、植村正久氏や德富蘇峯氏の感化から全然解脫しては居らぬ人である。氏は德富氏や植村氏に依つて養はれた思想を英國式の眞純な感操の文學に表はしたのである。勿論それに依つて文人としての氏の功業は光つてゐるのである。（七月七日）

病床に於ける梁川氏と獨歩氏

相馬御風

僕が都下大久保余丁町の寓居に初めて故人綱島梁川氏を訪うたのは、四年前の秋であつた。

りながら好個の立志譚である。『空知川の岸邊』は北海道の未開の自然を描きながら、恰も其の荒涼たる自然の光景と對照の妙を得た人生の一部を表はしてゐる。『運命』中の二四六――二四七頁が殊にさうである。之れもまた『少年の悲哀』と同じ道德調を有してゐる。『濤聲』にも其の證跡を指摘するに苦しまぬ。

私は道樂に道德を嘲けるのも好まない。それと同時に無暗に在來道德を恐れはせぬ。世上の門外漢中に、自然派を以つて唯人間の獸的半面を描くものとのみ誤解してゐるものがあるから、其等の一派の同情を得んが爲めに獨歩氏を贔負（ひいき）の贔負倒しに道德思想家にして了ふのではない。唯氏の作は殆ど凡て人生の悲慘に對して同情の涙を濺いで居る、といふ點に於て道德的（モーラル）調子（トーン）があると言はうとするのである。氏は客觀的に唯人間の事實を羅列して滿足を得る人ではなかつたらしい。人生の事實を見て、直ちに嬉れしいとか悲しいとか言はずには居られなかつた人である。

私は是等の理由に依つて、此度（このたび）遺稿出版として上梓せられやうとしてゐる氏の『欺かざるの記』や『病牀錄』やに對して非常な渴望を抱いて居る。『欺かざるの記』既に題を聞いただけで氏が單純な藝術の人でなく、如何に精神の人、思想の人、性格の人であるかゞ分るではないか。氏は人の師たることの出來る人である。（小說の先生ではない。）

要するに氏は此の一二年來俄然として文名が揚り、所謂自然派の精粹と稱せられてゐるに

知れぬ。氏は小説家よりも論文家に適してゐる。氏は藝術の人といふよりも思想の人、性格の人である。内容の思想こそ相違はあれ、文人としての範疇(カテゴリイ)からいへば氏はカーライルとかエマソンとか云つたやうな人である。氏の生涯は小説家となる前に先づ精神問題の解釋を試みた閲歴を持つてゐる。思ふに氏は學問(多讀に)に熱心な人ではなかつたかも知れぬが、讀んだ書(ほん)だけは精讀した人であつたに相違ない。氏の思想には何處か漢學思想もある。孔孟の道徳思想がある。また勿論基督教思想もある。さうして書いた物が何處となく英國人種の思想に見るやうな物堅い誠實な道徳思想の閃めいて居るものがある。其道徳思想は勿論第二義の形式道徳ではなかつた。が、思想の底には何處やら自然人生に對する道徳的調子(モーラルトーン)が響いてゐる。『武藏野』には特にそれが多い。『獨歩集』もさうである。『女難』と『正直者』とは氏の作品中唯二つしかない肉感小説である。が、それさへ私には何處かに道徳的調子があるやうに思はれる。此の二作を讀んだ時の私の心地は何處からか或る道徳的苦痛が起つて來る。『少年の悲哀』は薄命な流れの女に對する一種の眞純(ジエニユイン)な深沈な同情の涙である。試みに其の文中の一節を引かう、

　其後(そのご)十七年の今日まで僕は此夜の光景を明白(はつきり)と憶(おぼ)えて居(ゐ)て忘れやうとしても忘れることが出來ないのである。今も尚ほ憐れな女の顔が眼のさきにちらつく。そして其夜、淡い霞のやうに僕の心を包んだ一片の哀情(かなしみ)は年(とし)と共に濃(こ)くなつて今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起してさへ堪え難い、深い、靜かな、やる瀬のない悲哀を覺えるのである。

『運命』集中には、殊にそれが多い。『馬上の友』と『非凡なる凡人』とは立派な藝術品であ

其の結果を見、また直接に氏の事業を關知せる人々から聞いた所に依つて判斷して見ても、氏は決して所謂事業家と稱する者に適した人でもなかつたらしい。繰返へして言ふ、氏は藝術家でも事業家でもない。單に性格の人思想の人である。

右の意味に於て試みに氏を西洋の文人に比べて見るに、雜と考へて見た所、氏は多くの關係に於て佛蘭西の小說家とは大に違つてゐる。佛蘭西人――文人も――は槪して藝術的人種である。演劇の盛な國である。遊藝の盛な國である。風俗の華美な國である。然るに獨歩氏は是等の何れを餘り好まなかつたらしい。さればとて氏は露西亞の多くの文人とも違つてゐる。成程氏はツルゲーネフとトルストイとを愛讀した。併しながら氏は此の國の多くの文人が理想としたやうに、小說を以つて（傾向小說の意にあらず）經國の事業に資せうとはしなかつた。ツルゲネーフを愛讀したのは、その自然の描寫に意氣の傾倒した所があつたらう。人生の運命を描いた所に寂しい哲學を發見したらう。が氏はツルゲネーフのやうな藝術の人ではなかつた。何れかといへば氏はトルストイ一流の思想家に近い。小說が何處か經典臭い處がある。

氏は大陸の文人に類するよりも英國の文人に多く似てゐる。氏は小說をも作つては見たが、氏の文人としての功業は小說のみに限つては居らぬ。それが單純な藝術家でない證據である。蓋し氏は好奇心と生活上の必要とから小說をも作つて見る氣にもなつたのではないか。論文を書いても小說を書いて得られたほどの收入が得られたならば氏は寧ろ論文家になつて了つたかも

かつたやうに思はれる。氏は小說家ではない、性格の人である。氏の作品が所謂小說的脂粉の氣を欠くは明かに其の證據で、小說は必ずしも脂粉の氣を有することを妨げぬ。佛蘭西の小說などは自然派作家の作とても皆な多少は此の脂粉の氣を有せぬものはなからうと思ふ。脂粉の氣を有せぬことを以つて自然派作家の特長の一つと考へたならば、それは大なる偏見である。作家も讀者も其の有無に就いて好惡のあるのは免かれぬが、それは畢竟單に好惡に過ぎぬ。併しながら批評家にして若し脂粉の氣を有せぬことを以つて最新自然派作物の特點として擧げやうとする人が假りにあるとすれば、それは考へ違ひである。獨歩氏の作物が特に脂粉の氣を有せぬは、主として獨歩氏の性格から來て居る。それが自然派小說の制約とは言へぬ。

自然派の作品の中には脂粉の氣を有する者もあらうし、また有せぬものもあらう。獨歩氏の作品が脂粉の氣を有せぬのは氏が自然派の作家であるからではない。自然派に籍を置かうと置くまいと氏は關からないのである。氏は自然派たるが故に脂粉の氣を脫して居るのではない。氏は自然の人として先天的に脂粉の氣を脫してゐたのである。

獨歩氏は藝術家ではないとまでは言ひ得ぬまでも、少くとも性行の上にも、はた其の筆の上にも匠氣の無い人であつたやうに思はれる。此の意味に於て、氏は藝術家といふよりも單に性格の人といつた方が一層適切なやうに思はれる。それと同時に氏はまた實行家でもない。私は氏が三十八年の生涯中實行した事業の成否に就いては直接に知らう筈もないが、遠方に在つて

どうでも宜しいと云ふ、純文學者肌と共に一方には企業家として成功し、所謂紳士的、エピキユレアン的性質があつて、此の二者が、常に暗闘しつゝあつたと思ふ。

◎所が同君自身は文學者肌の人である。其の人が一方に於いて、事業家たらんと欲したのであるから、其の經營が失敗に終つたのは、決して怪むには足らぬ。寧ろ當然の結果であると思ふ。そして此の失敗の經驗といふことが、同君の文學者的性向と結合して、茲に人生に於ける失敗者に對する深刻なる觀察を作つたものではあるまいか。同病相憐むといふことを聞くが、實に同君は、自身の失敗の經驗、苦楚あるが爲に、特に失敗者のために、普通の人の思及し難き心裡を看取し得たのであらう。

◎白狀すれば、僕は今日、同君の作品に對する管見を述ぶる程、多くの材料を持つて居らぬ。勿論作品の大部分は讀んでゐるが、批評的に意見を述ぶる迄に精讀してゐぬから、これで筆をとゞめる。

性格の人國木田獨步

德田秋江

獨步氏は遂に小說で名を擧げて死んだが、私が見た所では氏の長所(ベストパート)は藝術家といふ點ではな

「此の小說集中、一特色とすべきは、著者が此の社會より追ひ出されし人物、即ち社會の一員として住み能はざる程の人物を捕へたること是れなり。世の荒波に負けたる人物例へば『酒中日記』の主人公の如き、これ獨步子の最も得意とする所、讀みて感興の大なるを覺ゆ。また全體に通じて觀察の深刻なると、讀者に想像の餘裕を與ふる書き方、即ち餘韻ある筆法とは、よく彰れて異彩を放つ。」

◎僕は今日に至るまでも、此の管見は、決して誤つて居らぬと信ずる。殊に獨步君の經歷から見て、なほ更に此の卑見の謬なきを信ずるものである。

◎獨步君は、文學者として成功したことは、言ふ迄もないことであるが、而も一方から睨めば、其生涯はたしかに失敗の歷史であると言はねばならぬ。其の失敗の歷史は、文士としての同君には、何等の損害をも及ぼさぬ。同君が近事書報社や、獨步社經營に失敗したことは、文士としての國木田獨步の價值を減少するわけではない。

◎併し文士たる位地を離れたる國木田君に就いて見れば、失敗は失敗である。さらば何故に其の失敗を招いだのであらうか。

◎思ふに同君には二種の性向が常に暗鬪しつゝあつたのであらう。文學者として世態人情を觀察するといふ性向。これは寧ろ同君が晚年に自覺した點であらうが、兎に角其の本來の性質と、他方には、事業家としての成功を願ふ志があつたと思ふ。世俗的、物質的、榮華的などは、

常に暗闘せる二種の性向

長谷川天溪

◎獨歩號を出版するに就いて、何か同君の作物に關する意見を書けといふことであつた。これは當然の御希望で、僕としては進んでも書かねばならぬことであると思ふ。何故なれば僕自身は、國木田君を知つたのは、比較的に新しいことであるから、同君の性行に關しては多く知らないから、何か言ふとすれば、作品に關する外に、問題は無いのである。

◎何時頃、僕が獨歩君を知つたかと言ふに、確かには記憶して居らぬ。勿論同君の作を讀み、其の名聲の高かつたのを知つてゐたのは餘程前からではあるが、面會したのは、たしか田山花袋君のお宅であつたと記憶してゐる。時は三十五年頃か。

◎全體僕は忘れぽい方で、殊に僞樣のことに關しては、殆ど無頓着であるのみならず、日記すら書かぬ方であるから、同君と知つたのは何時頃であるか、確實には言へぬ。併し其の時が初てゞ、一所に酒を飲んだのが、故川上眉山君、蒲原有明君、などであつたと思ふ。

◎獨歩君が『運命』を出版された時に、僕は『太陽』誌上に、左の紹介を書いたことがある。

ぢやないか」と言つたらば、その時は「今日は子供を連れて居るから又來やう、大久保から戸塚へ出る近道を發見したから、これからはチョイ／＼來るよ」と言つて門口から歸つて了つた。それからだん／＼又悪くなつて今年の春は到頭茅ヶ崎へ行くやうなことになり、終にその儘僕の所へは二度と來る機會がなかつたが、茅ヶ崎の病院の方へ眞山君と始め訪問した時には、今までは愚痴などあまり溢さぬ性質の男だつたけれど、多少か心細かつたと見えて「今こそ人も訪問して呉れるし、新聞などにも彼れ是れ書いて呉れるけれど、是て半歳の一年のと續いたらば、訪ねる人もだん／＼なくなるだらうし、世間でも忘れて、獨歩は死んだと思つたが、未だ生きて居るのか、といふやうになるだらう。然う思ふと心細いね」と言つて淋しげに笑つて居た。然し獨歩君のその豫言の通り、せめて一年でなくとも半歳でゞも宜いからもう少し生かして置きたかつた。訪問者も減ぜず、世間でも忘れて了ふにはあまりに早く死んだ。當人も頻りに言つて居たことであるから、せめて全治とは行かぬまでも一度中癒りでもして、少し其處らを歩いたり、好きな釣の一度もさせて死なせたかつた。のみならずあの小松と砂ばかりの茅ヶ崎には隨分倦き／＼して頻りに東京へ歸りたがつて居たから、出來るものならば東京で死なせ度かつたと思ふ。獨歩君の死體を假住居の別荘から擔ひ出して、そして舊東海道の夜道を燒場まで送つた時には、何となくもの足らないやうな「あゝ旅で死んだ人」といふ佗しい感があつた。

何故君自身の天分の文學を專心にやらないのだ」と言つたらば、君は眞赤になつて憤つた。「野心とは何だ、野心といふべき言葉には一種の賤むべき意味がある、僕の獨步社經營はこれでも僕自身の抱負と自信とを以て行りつゝある眞面目なる事業だ、局外の者の口を挾むのを斷じて僕は許さぬ」と言つて、甚く僕に食つてかゝつた。僕は無論そんな意味で言つたのではない只君が十年埋沒されて居た眞價も認められて來た今日、此際大に自分の天才を發揮した方が宜からうと言つたに過ぎなかつたのだけれど、君はひどく〳〵癪に障えて憤つた。一寸憑ういふ風の人間だつた。その癖獨步社解散當時には僕なぞも或る事情から君のところへ行つて居たが、あれだけの事業をやりつゝ完全なる帳簿一冊もないといふ行り方で、獨步社の早く倒れたのも一つは事務員などに好いことをされた爲である。

獨步君は滅多に泣き言や愚痴を言はぬ性質の人であつたが、今度病氣になつてからは、時々心細いことも言つた。丁度去年の夏だつた。僕が戸塚へ引越して間もなく、君は下總の轉地先から大久保に歸つて來て、或る日のこと白地の筒つぽを着て飄然門口にやつて來た。久しく逢はなかつたから「如何したの、君は大變惡るいやうに聞いて居たから一度見舞に行かうと思つて居たが、今見れば一向そんな樣子も見えない、病氣の方は如何かね」と訊いたらば「なあに、ほんの喉が惡いだけだ。僕も君にも言はれたが、今度はいよ〳〵專心に書かうと思ふから未だ〳〵十年や二十年は死んぢや耐らない」と言つて居た。「まあ久しぶりだからビールでも飮まう

のだから云はれる方では隨分痛かつたに違ひない。僕なぞもやられた方だが、殊に龍土會に於ける君の生田葵山君をやつゝける調子は同人間でも有名なもので、それが又殆ど毎會なのだ。と言つて別に仲の惡いといふ譯でもなく、只生田君の作品や態度が何となく癪に障つて顏さへ見ればやつゝけ度くなる、然しそれに或る潜んだ惡意があるといふんでもないから、生田君も憤(おこ)るには憤られず、いつもやつゝけられては閉口して、後では爲方なしに笑つて居たものだ。恁ういふ傾向が他の、たとへば異性問題とか或は又生活上などにも盛んにあつたらしい。現にこれは僕が結婚當時であつた、僕の所へやつて來て夜一時頃まで一緒に酒を飲んだことがある、その時だ、田舍から出て來たばかりの家妻(かない)を捉まへて、君が得意の婦人禽獸論を滔々と始めて婦人を罵倒した時には、田舍氣質(かたぎ)の何も知らぬ、年の行かぬ僕の家妻(かない)のことだから大に面喰つた。すべてが然ういふ調子であるが、それが單に罵倒であつて皮肉でない、加之(のみならず)その調子に一種の烈しい熱がある爲めに聞いて居る者が驚きこそすれ、不快には思はないやうだつた。

これは例の獨歩社の經營に君が苦しんで居た頃のことだ、慥か一昨年の暮であつたと思ふ。龍土會の忘年會を柳橋の柳光亭で開いたことがある。その時には獨歩社も大分難關に陷つて、しかも獨歩君は健康を害して非常に窶れた顏をして出席した。僕も君も少し醉つた時に、僕はしみ〴〵感じて「君さういふことをして居た日には頭腦(あたま)も害するし、身體(からだ)もだん〳〵損(そこな)ふばかりだ。君は君自身の不得策なことに身心を勞して居るよりも、そんな野心は一切棄てゝ了つて、

つて居たことにも、あの聰明な獨歩自身は或る決心と或る抱負とを以て、その着手した事には全力を傾倒したものだ。そして自分の精神上肉體上の精力を消耗するのを少しも顧みなかつた、といふのがその根底に「誠」があるからで、從つて事業その事業は失敗に終つても、其處には必ず焰のやうな光彩が伴つて居た。現に彼の生命を奪ひ去つた病氣の如きも獨歩社經營時代の過勞に因るといつても宜いのだ。

そのやうに彼は如何なる事業にも「誠」を以て終始した。爲に往々同じ時に同じ誠を大小輕重の多方面に同じやうに注がうとした。その爲に一方には非常にその誠が美しく輝くと共に、一方には却てその誠が反對の結果を致すの已むを得ないことがあつた。彼に對して彼を誤解し、彼に惡聲を放つものは多くその反對なる結果を受け、或は見たものに過ぎないのだと思ふ。

獨歩君の爲人はといふと最も自然な人、ナチュラルマンとも云ふべき人だつた。人の思惑とか、世間體とか或は又見えとかに一向氣を置かず、左右を顧眄することもなく、感情の赴くに任せては隨分思ひ切つた事も云つた。人に對しても自分が信じ感ずるまゝを無遠慮に發表して隨分歯に衣着せぬ罵倒もしたものだ。然し是は獨歩君の性癖が拗けて居たのではない、所謂直情徑行といふ方で、只その天眞を飾らず僞らず露出したものに過ぎないのだ。だからその惡口や漫罵も決して底意のあつたものではない。雖然知らざる人には怨をも買ひ誤解もされたらう。獨歩君の惡口は皮肉こそないが頗る熱烈なもので、それを只鋭くやつゝけやうとかゝつて居た

い」と言つて笑つたといふことを聞いたが、それは少し間違つて居る、獨歩位嘘の嫌ひなものはないといふ意味は普通にいふ正直者とか、單に嘘を云はないとか云ふやうな世俗的の意味ではないのだ。獨歩君にしてからが、此の紛々たる俗世界に處し紛々たる俗人と交渉するに就いては世人相應の嘘も言ひ心にもない空言も使つたらう、何人にしろ借金のことはりには體の宜い言譯をするやうなものだ。だから或る人の笑つた如く獨歩位嘘を吐く奴はないと迄は知らぬが然し獨歩にしても人並の嘘は言つたに相違ないと思ふ。雖然彼が嘘は嫌ひであるとか、誠の人であるとかいふ意味は處世上の意味ではなく、あの人の内部生活の上に於けるその摯實なる態度を言ふのだ。早い話が文學の事、つまりあれだけの作品を出した――その作品に潜んで居るところの眞率なる態度は云ふまでもなく、世人も略知つて居る彼が青年時代の戀愛問題、信仰問題、何れか彼の切實なる「誠」を表白したるものに非るべきだ。次いで彼が政治家にならうと思つて新聞の政治記者たりしも、或は獨歩社を經營したのも、其れは決して、彼の自信なく抱負なき人間が或るチャンスに依つて事業家となり政治家となつて、運よく成功したらばそれで遣り通さう成功せざればいゝ加減に他に移らうといふやうな、然ういふ浮薄な考へでやつたものではない。彼はその爲す事毎に必ず斃れて已むの強い熱誠と深い自信とを以てやつた。彼は文學に於て自分の天才を信じ自分の赤誠を披瀝した如く、我々局外者より見ては「如那いふ事をやつて居ては獨歩自身の不利益で　如那いふことは獨歩の長所でない」といふことが明白にわか

反抗心で書く、所が國木田君のは然うでなかつた。藝術上の反抗はあつたらうが、コンベンシヨンに對する反抗といふやうなものはなかつた。同君のは反抗ではない皮肉で、それが天性の皮肉であつたのだ。これ國木田君の自然主義が歐洲のそれと相違する所である。要するに同君の自然主義は學問としての自然主義に非ず、キヤラクターとしての自然主義であつたのだ。

君の作には決して出來不出來がなかつた。これ君が一行と雖も一字と雖も自ら動かざれば——自ら感ぜざれば書かなかつたが爲である。だから作品も極めて少ない。君は決して金の爲に書かなかつた。否金の爲に書くといふことが君には不可能であつたのだ。然るに金の爲に書き得ざる獨歩をして尙且つ金の爲に書かざるを得ざらしめた社會は、誠に慘酷なものと言はねばならぬ。鎌倉時代に於ける君の境遇は正しく是であつたのだ。

「誠」の人獨歩

小栗風葉

一口に言へば獨歩君は「誠」の人である。だから爲すこと行ることには必ず根底に「誠」の一字が非常の熱を以て燃えて居る。病中或る新聞に「獨歩は噓の嫌ひな男である、噓を言はない男である」と書いてあつたのを見て一部の人が「ナニ噓が嫌ひなものか獨歩位噓をいふ奴はな

の儘に推し進んだからで、十七八位の頃の心持ちと竹の木戸時代の心持との間には自ら辿るべきスロープが出來て居る、君は悟るといふやうなことは無かつたが、始めから終りまで詩人的な、ナチユラルな所が一貫して居る。細かくいふと宗教時代――宗教といへば實行的であるから勢ひ、なるだけ美しい、立派なことを行らうといふ氣があつて、それが爲め君が藝術家としての立場も理想に適つたことを目的とする時代があつた。これが即ち「武藏野」時代だ。然しそれとても僕の（その時分の）空想的作物なぞとは性質を異にして矢張ナチユラルな所があつた。それから年を經るに從つて次第に作家としての立場を考ふるやうになり、態度が純客觀的になつて來た。鎌倉時代即ち獨歩集時代が此の時で、前の宗教時代の主觀的な思想がなくなつて來た。その時代に肉慾小説が二つある。「女難」と「正直者」とが是だ。これは肉慾が人生に及ぼす影響を書いたもので、決して肉慾そのものに興味を以て書いたものではない。實の所國木田君は肉慾小説の祖である。その以前にはあんなものはなかつたのだ。然しあれだけ客觀的になつて居ながらやはり何處か詩人的の所が殘つて居て、全く主觀を脱することが出來なかつた。その時分よく僕がゾラやモーパツサンの話をしたものだが、あれほどまで極端な所に立ち入ることは到底君には出來なかつたのだ。何故かといふと一面にはロマンチツクな所があつたと共に他の一面には自分のキヤラクターがそんな卑しい汚ないことを欲しなかつた爲めである。今の自然派は「今までコンベンシヨンに囚はれて居た、それが癪に障る」といつたやうな一種の

てある。要するに國木田君は隨分非難すべきことや、矛盾したことや、擯斥すべきことをもやつた。然し他から見てこそ矛盾しても居り、非難すべきことでもあつたらしいが、國木田君自身に取つては何處までも自然なのだ、茲が君の價値のある所だ。だから僕等と交際しても、思つたことは人が如何思はうとズン／＼言つて了ふ。少し位他が不愉快に思ふことをも介意はず言つたものだ。然し根本は正直であつた、これは是非覺えて置いて貰はねばならぬ。根本は正直で策略など弄するやうなことは決してなかつた、だから何を言つても平氣だ。これ君が偉い所であり、藝術家たり得たる所であらう。而して叉事業に失敗した所以も茲にある。元來君は頭腦の極めてクリヤな、事の利害得失を直に辨別し得た人で、もし恁ういふことを言つては對手が赤面するといふやうなことでもあると一言もそれに言及さず、飽くまでも他の弱點に付け込むといふやうなことの決して無かつた人だ。だからさういふ理知を利用すればどんなことでも出來たのだが、然し君には世間的な所がなかつた。畢竟正直なシンセリチーな人であつた。もし今少し狡い所があり世俗的に利口な所があり、感情を押へる所があり、克己があつたらば、あんな失敗をやつて、肺病になつて死ぬやうなことも無かつたらうものをと頗る殘念に思ふ。殘念には思ふが然しこれが君の不朽の人たる所以であることは云ふまでもない。

作品に就いて云ふと、君は最初から最終まで殆ど規則正しい傾斜面を上つて居つたやうなもので、忽然として斷岩絶壁に出會すやうなことがなかつた。これ君が自己を中心として自然

自然の人獨歩

田山花袋

僕は國木田君を自然の人と言度い、何處までも自分の考を以て押し進み、自分の爲さんとする所を爲し、毫も世の所謂コンベンショナルや道德やに支配されなかつた。それは多少か克己の念はあつた、然しイザとなると忘れて了ふ。忘れて了つて自然に、意の赴く儘に任せる。僕が國木田君に影響を受け且つそれを恩惠として居るのはやはり此の何者にも支配されず、自然に動いて行く形にある。僕は空想者であり且つ又實行者である。だから恁ういふ事をしては世の中の人が非難するだらう、攻擊するだらうと云ふやうなことはやはり厭だ、止さうといふ風になる、まあ克己心の勝つた方だ。所が國木田君は然うでない、何所かナチユラルな所があつて既に其域に達して居たやうだ。僕等の考へでは空想は要するに空想であつて事實ではない。つまり空想は空想、事實は事實と別物になつて了ふ。然るに國木田君には空想は事實だつた。「空想するといふことが既に俺の事實ぢやないか」といふ風で、どんな美しい夢みたいなことでも國木田君に取つては事實だつたのだ。これが國木田君の大きい所で、君が二十か二十一位の折に書いたものを、今日讀んで見ても猶且つ不朽の分子に富んで居るのを發見する所以

私は國木田君の作物を讀んで見ないから能く知らぬが、私の所に來る學生の中には非常に同君の作物に感心して居る人がある。「作中に現はれてゐる煩悶も苦惱も實に切實な人生の聲である」と言つて非常に感服して居る。然し國木田君から見るとそれらのものも虛僞――と言つてはあまり强すぎるが、何しろ切實なる實問題に觸れた眞の苦悶の聲とまでは行かなかつた、とまあ此頃の獨步君は思つて居たものと見て差支ない。然う考へて居たゞけ、それだけ此頃の煩悶も烈しかつたらうと思はれる。で死といふ實問題と直前相面した時、その問題があまりに新しくて、惑亂した自分には殆ど手の付けやうもない。爲す所を知らぬと云ふやうな、極言すれば狼狽した形があつたかとも思はれる。

勿論是は私が只然う思ふだけで、事實果して然うであつたか如何かは知らぬ。然し令弟收二君に對して「死は彼岸に達する努力なり」と言つたとか聞いて居る。これは私が同君に訊いてやつたこと〻殆と一致して居るから、或は信仰を得て死んだのぢやないか知らんと私も內心嬉しい次第であるが、然しその後に猶煩悶が續いたといふから或は然うでなかつたかも知れん。何しろ私は單にその徑路だけ示されて、その歸結を見ないのであるから、國木田君が最後に於ける信念の有無の奈何を覗ふことが出來ぬ。然し大體に於いて信仰は無かつたと言うて宜からうと思ふ。

信仰上の獨歩

植村正久

國木田君は明治二十三四年頃、未だ早稻田專門學校在學時代に學友の田村三次君などと一緒に私の手で洗禮を受けた。教會はその頃一番町教會といふのであつたが、今は無い。その間には格別云ふこともないやうだ。豐後の佐伯に行つてからも信仰は持つて居て、生徒や友人等にも大分宗教の話しを聞かして居たといふことだ。現にその頃君の手で導かれた信者の一人が今私の教會にも居る。マアその時分は熱心であつたというてよからう。然しそれからは色々と世の中の波に揉まれ、苦い經驗を嘗めて信仰も何だか曖昧になつたやうに見えた。

それから今度の重病だ。大久保時代から大分煩悶して居たやうに見える。それが茅ケ崎に行つてから更に切實に激甚になつたやうだ。是れが同君の信仰の復活せんとする傾向と見れば見られる。病中國木田君が私にすべてのことを自白し懺悔した言葉のうちに恁ういふ事があつた。「私は是まで屢々人生とか、煩悶とか、向上とかいふことを考へもし書きもした。然し今にして考へるとそれは皆私に取つて虛僞であつたやうに思はれてならぬ。誠に愧づべき次第である」とこんなことを言つた。

處は氣運の然らしめたものに相違ない。

尤も獨歩社の晩年になつて吾輩(わし)は國木田君に忠告した事がある、早く社の事業を誰かに讓つて專心文筆によつて身を立てたら寧ろ苦勞が無くて宜からうと勸めたが、什麽も乘かけた船で左樣も行かなかつたらしいが、今日になつて見ると、彼の時――吾輩(わし)が忠告した時一切事業の責任を捨てゝ煩ひなく思を文筆に凝らしたならば從來既に現はれた佳篇傑作よりも、最(もつ)と勝れた作物を遺(のこ)す事が出來たらうと思ふ。

然し國木田君が獨歩社をやめて文筆の境に這入つた時は、既に病氣が募つて居る時であつたのだ。充分振ひ得べき伎倆をもつて居ながら空しく病氣の爲に時機を失したのは文藝の爲にも國木田君の爲にも一方ならず殘念に思ふ。實際いま一二年達者にして置きたかつた。而して靜かに机に倚つて縱橫な創作に從事して欲しかつた。

國木田君の亡い後に於ても知己友人の諸君が並(なみ)ならぬ親切を盡されるのを見て、確かに國木田君は文筆以外に美しい德性のあつた事が證明される。吾輩(わし)は重ね〳〵國木田君の逝去を追悼する一人であると敢て云ふ。

料理店から吾輩の處へ訴へて來た事もあつたが、此等も決して世間で聞くやうな悪意からでなく、只例の眞直な氣性からやつたので、無邪氣な罪のない方であつた。恁ういふ滑稽を仕出來すかと思ふと亦一方には强い沈着いた處があつて、例へ如何なる失策があらうとも愚痴を零したり泣言を云ふやうな女々しい事はせず、極めて無頓着に、而も必ず頭腦をひねつて盛り返したのには常に感服して居つた。

畫報社の雜誌を引受けて獨歩社を組織してからの事業は失敗に終つたが、これは決して國木田君の戰の罪ばかりでなく、全く時勢の然らしむるものがあつたので、其證據には獨歩社の畫報許りでなく博文館も富山房も相前後して畫報の發行を止めて了つたのを見ても分る。其原因と云ふのは現時の日本に於ける寫眞版の技術は非常に發達して多くの日刊新聞が其日〳〵に目新らしい寫眞を掲載するから、之に對して月に一回か二回發行の畫報が競爭しやうとするには餘程珍奇な寫眞を集めなければならない。これが甚だ困難な仕事でさう〳〵續く筈がないから、當然畫報は失敗に終るべき運命を强ひられて、立行かない事になつて了ふ。

本來西洋に於ける畫報發達の起源は黄楊版に始まるので、日刊の新聞には黄楊版が間に合はぬ處から畫報の必要がある、歡迎されると云ふ順序に發達したが、寫眞版の發達した現代では到底さうは行かない。結局雜誌畫報類の侵すべき餘地が狹められつゝあるので、獨歩社の畫報が失敗したのも、戰爭が終つた爲めでもなければ、國木田君の經營が悪いのでも無い、歸着する

此點に於て國木田君は少くとも滿足して逝かれた事と思ふ。

吾輩(わし)が最もよく國木田君を知つて居るのは近時畫報時代で、一時の編輯は任せきりであつたから部員を雇ふにも出すにも何事によらず萬事依賴して置いたが、事務の遣方(やりかた)をみると大雜束(さつぱ)なる可き性質と反對に頗る緻密で、表紙の意匠でも說明でも細かい處迄行屆いて、例へ一枚の挿畫でも經濟的に仕上げる工合などは確かに性格の一面を發揮してゐたと思ふ、這麼風に至極熱心にやつて吳れたからこそ畫報其他の雜誌が隆盛であつたので、決して戰爭と云ふ好氣運のみに歸する事は出來ない。大部分は國木田君の周到な注意と熱心によつて成功したものと云はねばならない。

其から國木田君の得意時代とも云ふべきは、二十七八年の二ヶ年で、其頃は雜誌の景氣はよし、從つて家計上の心配はなし、思ふ樣に友人などの世話も出來たから割合に心に暗い影も射さず、才に任せて切り廻して行かれた、卽ち得意時代であつたらうと思はれる。

一體國木田君の性格は頗る愛嬌に富んでゐて、人好きのする美しい點が多かつたやうだ。分り易く云へば、天眞爛漫の語を以て形容し盡されるので、吾輩(わし)の前では謹直にして居たが、時としては思切つた事もやる。或時の如きは吾輩(わし)の知つて居る料理店(ちやや)へ——尤も國木田君も一度位顏馴染はあつたらう——二三人の友人を連れて宴會の歸途(かへりがけ)に押かけたが、何分夜も更けて居ると云ふので斷(こと)はれたと見える。すると非常に立腹して靴の儘座敷へ上つたとか上らぬとか後(あと)で

心から後悔した事はない。收二君に逢つた時にも、何故悪ければ悪いと早く知らせて呉れぬと、愚痴を云はうと思つたけれど、聞いてみれば意外にも同じ茅ケ崎に居た收二君すら臨終の間に合はなかつたとの事で、畢竟緣が無かつたと悔む外はない。

國木田君も私に逢つたら云ひたい事があつたらう、私も云ひたい事は澤山あつた。舊い友人だけに隨分無遠慮に云つた事もあるが、私は國木田君の晩年まで其の作品が評判の宜かつたのを欣んで居た。

誠に國木田君を失つた事は文藝界の恨事であると同時に、個人としても追悼の念に堪へない次第である。（文責記者にあり）

余と國木田獨歩

矢野龍溪

國木田君の遺骨が著いた時赤坂の宅を訪ねたが、國木田君を失つた文壇の失望より以上に妻君遺族の悲痛が氣の毒に思はれる、雖然近年――殊に亡くなる以前に於て著しく文名が揚り眞面目なる努力の結果があらはれたのは欣ぶべき事で、隨分世間には死後幾年かを經て始めて眞價を認められ知己を得る人も多いのであるから、同じ事なら生前に好結果をみた方が嬉しい、

ぐするのは間違ひだ、止した方が宜からう。」

之が最後の忠告であつた。實際私は獨歩社が瓦解したと聞いて密かに欣んで居た、其は決して事業の失敗を意味するので無く、この失敗の爲に國木田君が町人、仕事師となりさがらずに、自己の天職によつて身を立てる事が出來る時の來たのを欣んだので、更に

「お前さんは薙刀を使ふ人ぢやない、九寸五分の短刀を縱横自在に使ふ可き人だ、彼の李長吉が旅中錦嚢に句を盛るの心懸と、腎を刻み肝を彫るの用意とを忘れてはいけない、濫作は尤も愼む可きである。」

と切實に忠告した。此事は餘程感じたと見えて、友人にも國木田君が話して居たさうである。

上述の順序で私とは深い關係もあり非常に其の病狀も氣になつて、是非一度は茅ケ崎を見舞はふと思ひ乍ら遂忙しいので好い機會もなかつた、其でも夏になつたら暇を見て出かける心算で居た。父洪水老人は一度訪ねて行つたが、時々私から何か送つてやつたのを欣んで居たさうである。

其から眞山さんや何かの書いたもので見ると、病人も仲々元氣が宜さうなので安心して居ると、夜の十二時頃電報が屆いて「哲夫九時に死す」との報知があつたので、噓ぢやあるまいかと夢の樣な氣がした。翌朝取るものも不取敢茅ケ崎へ驅けつけた譯であるが、實に私はこの位

う云ふ意外な言葉を聽いて驚いたが、這般の消息は私にはよく分らずに濟んで了つた、致し方が無い話である。

其以來國木田君が女に對する考が一變したと噂するものも有つたが、少なくとも渠の生涯に於ける事件で爾來この波動を受けた影響が各方面に現はれて居たらしく思はれる。

ざつと這麽話であるが、この事件の經過を熟く知つて居らぬと、國木田君の作品に接する場合にも興味が少なからうと思ふ。雖然この不幸も或は却つて文學者としての立脚地から見れば僥倖であつたかも知れない。國木田君の苦い經驗は必らず多くの讀者に向つて無形の教訓を與へたものが有らうと考へられる。

私は小說の事は委しく知らないが、一番好きなのは佐伯時代に寄來した書翰、次に「愛弟通信」、で武藏野の評判も聞いて居た。

私が最後に國木田君と逢つたのは一昨年の冬で、收二君と二人私の邸へ呼んで晩餐を共にした時であつた。其頃は既に獨歩の名が文壇に知れて居たのだが、私は國木田君に恁う云ふ忠告をした。

「お前さんは何處までも短篇が豪いのだ、成るべく練つて些く作つて年に一篇か二篇會心の作を發表しなさい、然うしたら乾度佳いものが出來るだらう。毎日、新聞へ載せる樣なものを書くのは天品の眞を滅ぼすものだ。………お前さんは事業家ぢや無い、算盤をもつて仕事にあくせ

宛然人が二人になつた樣で以前の國木田君の仕事とは受取れない、其處で私も什麼も變だと注意して訊てみると、切りに三田へ往來して居るとの事にさてはと驚いたが、戀に囚はれた二人は何時か夫婦約束まで出來て了つた。雖然信子の母が承知しない、密かに信子に配すべき人が極つてゐたさうで絶對的に不同意を言張る、娘の方でも言張る、國木田君も亦絶對的に約束履行を主張する、一時非常に大問題となつたが結局佐々城の友人で潮田千勢子と云ふ人が仲に入つて、不承々々に佐々城を納得させ結婚を許す事に迄話が運んだ。

其處で潮田夫人と竹越三叉君と植村正久君と私とが列して、舊楠本男爵邸前の長屋の樣な家で結婚式を擧げて一段落は着いたが、其でも佐々城は兩人を東京に置く事は成らんと云ふので、若夫婦は手鍋をさげて逗子へ赴いた。其頃逗子には未だ私の邸が出來なかつたので、父や母は或家の一部を借りて靜養して居られた、處へ國木田夫婦は私の兩親の借りてゐる其亦一部へ置いて貰ふ事になり、襖一重を隔てゝ私の父や母と共に生活して居た。程なく佐々城の心が解けて東京へ歸る樣になつたが、二十九年の春花見時分に夫婦と收二君と連立つて花見に行つた歸途に、用事があるから外へ廻ると云つて女は獨り姿を匿して了つた。丁度私は病氣で疲てゐると此知らせがあつたので、甚だ怪しからんと心當りを探して見ると、佐々城と親しく交際して居た築地の浦島病院へ逃げて行つてゐる事が分つたけれど、什麼しても死んでも國木田君の處へ歸らぬと強情を張り通す、僅か半年前には親に反いて自分から進んで結婚したものから、恁

た――深井君と三人で南鍋町の三橋亭で食事をした時、其なら僕も從軍しやうと云ふので、早速國民新聞記者として軍艦千代田へ乘組む手筈になつた。所が艦長の內田正敏氏が一方ならず可愛がつて何かと特別な便宜を與へて吳れたさうで、「愛弟通信」は當時紙上の異彩として歡迎されたものだ、國木田君が初陣の功名は實にこの「愛弟通信」によつて知られたのである。

一體軍事通信の總てが無味乾燥な舊套を脫し得なかつた裡に、獨り國木田君は令弟收二君に送る書翰文體の形式をもつて刻々の報道を續けたので、兄は千里の波に浮んで戰艦に搭じ、弟は吾社に停つて興味ある通信を受けた。收二君は十八位であつたらうか、幾分私も力になつて同じく專門校へ通はせて置いた事もあつた。兎に角「愛弟通信」は評判もよし亦傑作でもあつた。

序だからお話するが、聽て戰局も終を告げ國木田君は目出度く凱旋した。すると私の友人で三田四國町に住んで居た佐々城豐壽と云ふ女傑が凱旋のお祝に國民新聞から從軍した記者諸君を招待して一夕の宴を張つた事がある、無論國木田君も招かれて行つた。いろ〳〵御馳走があつて私も興に乘じて詩を書いたり何かして居ると、佐々城の娘で信子と云ふのが切りと斡旋に努めて「雪の進軍」とか其他二三の唱歌を唄つた、これが非常に國木田君にインプレッションを與へたと見えて、遂に戀の病におちた。――尤も私はずつと後で知つたのだ。

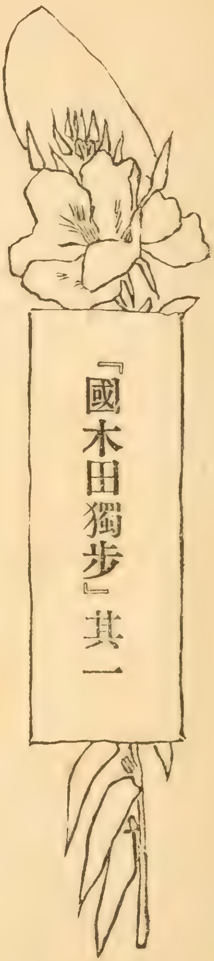
其後國木田君の樣子ががらりと變つて、民友社の編輯も校正も手につかない、非常に間違ふ。

之が交際の始であつたのだ。

其から國民新聞記者となつて千代田艦に乘組む以前、さう確か三十六年の事で、矢野樣が鄕里佐伯の學校に教師が欲しいが適當な人材はあるまいかとの話で、私は不取敢國木田君を推薦した。當時は渠も眞の若輩で果して教師として什麼であらうかとの杞憂もあつたが、斷然佐伯行をすゝめた動機は、只國木田君を東京に置きたくない、黃塵萬丈の都を去つて田舍で靜かに勉强させた方が將來發展の要素を作るに必要と思つたからであつた。

果せるかな之が非常に藥になつた、佐伯に於ける一ヶ年の修養は後年獨歩の名を文壇に高からしむる基礎を作つた大切な時代で、御承知の通り佐伯には山もある、海もある、自然の感化を受くるには尤も適當な佳い所なので、國木田君は教鞭を執る傍ら山と海とに親しみ、世間の煩さい事を忘れて心ゆくばかり修養をした、其頃屢々私の處へ寄來した書翰は實に美事なもので密かに天下の奇才として感服して居つた、恐らく渠が生涯に於ける文藝作品のうちでもこの書翰は有數の佳篇として珍重する價値は充分あつたらうと信じて居るが、保存して置かなかつたのを今になつて殘念に思ふ。

其うちに丁度日清戰爭の火蓋が切れて、現時日本銀行に居る深井英五君と私と廣島まで大本營に從つて　陛下のお供をする少し前、二十七年の九月十日過ぎに國木田君が飄然と上京して社へやつて來たので——其頃から渠は社員同樣に考へて居るし私の方も隔てなく交際して居つ



予の知れる國木田獨歩

德富蘇峯

始めて國木田君と逢つたのは二十五年頃と思ふ、丁度其の頃國木田君は東京に來て早稻田の専門學校に勉强中、私の舊の門人達も大勢通學して居つたのと懇意になつて、度々氷川の邸へ遊びに來る様になつた。

其頃から年配に不相應な老けた意見が――老成とでも云ふべき思想を仄めかして何事に依らず大きな事を云つて居たが、私は大變面白い男と思つて普通の人以上に念を入れて談じて見た、吉田松蔭やグラッドストンに關することや、其他文學に政事に甚だ興味深い談話を交換した、

民新聞の從軍記者として、千代田艦に乘り込んで戰地に行き、戰ひ終つて歸るや、民友社に入つて國民之友の編輯に從事した。理想郷を建設しやうと北海道に行つたのも此の頃、ラブ談のあつたのも其時代である。

其後暫く逗子に居て、民友社で出版する少年傳記叢書など書いて居たが、半年ばかり京都に遊び、歸京して澁谷に閑居した。武藏野を書いたのは澁谷時代である。山路愛山氏の近所て、宮崎湖處子も、道玄坂に下宿して居たので、能く往來した。田山花袋氏と知つたのも此の時で、後一緒に日光に行き、其所で半僧生活をして、「源叔父」を書いた。それが小說を書いた初めてである。

「欺かざる記」は二十六年から日光に居る頃まで書いたが、之れからは自分の思想は小說に書くと云つて止してある。それが兄の一轉期で、其後のことは人々が皆知る所である。

方に於ては青年文學と云ふ月刊雜誌を發刊したが、これが中々賣れない。千部も印刷すると三百ぐらゐは殘る。それで印刷代に不足して、着物なんかを質に置いたこともある。約一年にして廢刊して了つた。

其後金森通倫氏が經營の自由新聞に些つと入つたことがあるが、社の都合上二ヶ月て退社した。退社する時、給料として、幾らかを包んで呉れたので、歸つて開けて見たら、僅か三圓であつた。二ヶ月の月給が三圓なので、呆然として云ふ所なく只大笑ひした。然し、自分が働いて得た最初の金だと云つて、牛肉を食つて了つた。

其後二十六年の夏、蘇峰先生の紹介により、矢野龍溪先生の推薦で、豊後の佐伯に、鶴谷塾――舊藩主の經營――の教頭として行き、英語と數學とを教へた。此の佐伯に於ける一年の生活が、兄の文學者として立つ、最も修養の時代であつたと思はれる。景色は好い上に生活が樂なので、人間は淳朴であるから兄はすつかり氣に入つてしまひ、殆んど毎日町の後ろの城山を眺め、近郊を散歩し、日曜には塾生を連れたり、或は一人で其自然の中を驅け廻つたものだ。其當時非常に熱心なクリスト信者であつたことは、日記を見ても明らかである。能く、教會へ行つて演説したことなどが書いてある。

二十七年日清戰爭が始まると、兄は逆志禁ずる能はず、初め一年の約束で佐伯に行つた故、鄕黨の止めるのも聞かずに、塾生であつた四人の青年を連れて上京し、間もなく國

は一里ばかり隔つて居る田布施村の小さな小學校の放課後三十名ばかりの生徒を集めて、英語、數學を教へて居た。それに依つて、鄕黨に自分の理想を吹き込むつもりで、暴風雨の日でも管はず隨分熱心に通つたものである。休みの日には、皆を連れて山登りをした。そして歸つて來ると文章を書かせた。私も其時小學校に通つて居たので、其塾に行つて山登りもした。兄は其時二十一歳であつた。

其塾を一年許り續けて居たが暑中休暇中、麻鄕より二里ばかり隔つた麻里布と云ふ所へ海水浴に行つた。或る夕暮れ、濱を散歩して居ると、其時俄に思ひ立つたらしく、私と一緒に出京しやうと云ひ出した。私も一議に及ばず贊成して、直に二里の道を携へて家に歸り、父の許可を强請して、一兩日後に上京した。それは明治二十五年の八月末であつた。

上京して麴町中六番町に下宿し、學校には入らず、交友と相往來して居た。其中には前云つた今井忠治――先年京都で判事をして居る時、腦を患つて死んだ。中々の秀才であつた。――だの、熊本の人で今は鄕里に引つ込んで居るが、九谷眞熊と云ふ人などゝ往來して居た。(九谷と云ふ人は、非常に感情の熱烈な、文章のうまい人であつた。)其他今郵船會社に居る引頭百太などゝ云ふ人達と一緒に靑年文學會を起して、時々談話會を催し、德富蘇峯先生、坪內逍遙先生、森槐南先生など文學上の先輩を聘して講話を聞き、一

が直に止して早稲田の英語専門學校の英語專修科へ入つた。そこを卒業する前に早稲田に英語文學科と英語政治科とが初めて出來たので、兄は政治科に入つた。其後學校が面白くないと云ふので二年ぐらゐで退校し、靜かに修養する目的を以て、當時一家の在住して居た周防の麻郷の山村に歸つて來た。其時、ウェブスターの、インターナショナル、ヂクショナリーや色々歐文の政治歷史の書物を買ひ込んで來て、毎日讀んで居つた。餘程勉强して居たやうに思ふ。

其中、塾を設けることを計畫した。近頃見出した舊い草稿中に斯う云ふことが書いてあつた。

空想に描きしことの實際に現はれ來るほど愉快なるはなし、吉田松陰の熱心なる崇拜者なりしかば、余も亦彼の最大なる事業ともいふべき、松下塾の如きを起して、郷黨を集め、所謂精神教育を施したしとの空想を懷き居たり。余は此の空想をば郷黨先輩の一二に語りて其贊成を求めたれども、彼等は其空想の甚だ美なるを賞賛するのみ、これが實行に力を藉さんとはせざりき。

されど、余の熱心は決して冷却せざるなり。如何にもして此志を貫かんものと、其機會の來るを、油斷なく待ち居たり。（獨歩手記）

之れに依つて見ると、大いに吉田松陰に私淑してゐたことがわかる。そして麻郷と

ゐる。

當時の兄は非常な元氣者で隨分手にをへぬやんちやであつた。けれども讀書は大變好きで、中にも「佳人の奇遇」「經國美談」「西遊記」などは最も愛讀したものだ。暑中休暇で歸省した時、朗々聲を張りあげて「佳人之奇遇」を讀むのを屢々聞いた。讀書に次いで耽つたのは繪畫で、チヨーク畫をよく書いてゐた、歸省中、近所の人の肖像畫を書いてやつたりして大分得意であつた。

其頃に面白い話がある。或る夏の歸省にメリケン帽を被つて來た。所がまだ秋あたりではメリケン帽を見たことがないので、其れを被つて歩るくと、子供等がワア〳〵囃し立てる。或る時私と一緒に歩るいてゐると、例の通り子供等が寄つて集(たか)つて、囃して果ては石を投げつけた。兄は非常に狼狽し、その帽子を懷に入れて一散に逃げた。きかんい氣の兄ではあつたが、心は弱い方であつた。

其頃今井忠治と云ふ親友が一年ばかり前に上京して、學問をするなら東京でなくてはならぬと云つて、頻りに出京を勸めて來た。血氣盛りの頃だから矢も楯もたまらず、まだ早いと云ふ父を無理に承知さして上京することゝなつた。父は大阪まで送くつて行かれた。確か其頃は山陽線は通じて居なかつたと思ふ。當時父の考は法律學をやらせるつもりであつたので、兄は出京するや一寸神田邊の法律學校に入つたらしい

せめては悅べ、わが露の世の殘夜に君を送りて泣きし吾等は、文藝史の白日の前に、相對して寛晤し訓育せられ得るの幸あるを。玆に獨歩號を編して一個不朽の金字塔を築く。故人が靈前に捧げんが爲に、後世史家に貽さんが爲に。

獨歩の半生

國木田收二

父は播州龍野藩の人、母は下總國銚子の人である。明治四年七月九日銚子に生れ、東京に於て育てられた。當時は下谷區徒士町なる藩公の屋敷に居たのである。明治九年父が裁判官として山口縣岩國に轉任になつたので、一家を擧げて同所に住むことゝなつた。そして兄は岩國小學校に入つたが、父は又々山口に轉任されたので更に山口の今道小學校に入り其處に寄宿した。當時の校長は山口伸一と云ふ人で、兄は近年まで文通して居られた。

今道小學校から進んで山口中學校に入つた頃、一家が又萩に移つたので、兄は同中學に寄宿し、そこから高等中學に進み、間もなく出京した。僅か十七八才の頃と記憶して

於て、短篇小說流行の先驅たるに於て、その描寫の方法に於て、すべて他人者未だ拓かざるの地にゆき、他の之れに跟隨し來れるとき、氏はすでに杳かに前方にあるの觀ありき。國木田獨歩の名は必らずしも紅葉がありし其れの如き抱括的名彙ならざるも、少くとも此の五文字を明治文藝界より控除せば、いかばかりわが文藝史は寂寥を極めたりけむ。由來先行者は、手らその新拓の途を懇ろに整ふるの遑を有せずして、必らず半ばにして先ばしりするの觀あり。新しきことを稱ふる人、必ずしも新しき事を全うする人にあらず、然かも獨歩氏は自ら機運を促成すると同時に、作家としてまた傑作を出せり。されば『獨歩集』その他の作品は、エポックを劃せるものとして紀念すべきものなるのみならず、又藝術品として後昆の爲めに大理石に刻むに足る。先行者として巧妙なる作家を兼ぬ。

獨歩氏も亦一代の人豪なるかな。

天若し年を假さば、わが爾後の明治文壇は更に幾層の震愕と瞬目とを此天才によりて贏ち得たるやも知るべからざりしに、湖畔詩人が所謂大自然を搖藍として生れたる氏は、そを永遠の臥榻とすべく、還りゆきぬ。吁嗟。

じ、深刻に見たる、ありのまゝの人生は、賦氣なき筆に鑄られて白紙の上にのぼり來りぬ。此時にあたりて湖畔詩人の自然主義を醇化して、新たなる自家の自然主義を作りたりし國木田氏は、久しく晦れたる草萊の間より、猝かに中央に現はれ來りぬ。

此時に當りて世に出でたるものは『獨步集』なりき。氏が不人氣をも念とせずして、孜々として久しく作し來りし短篇を集めたる『獨步集』は、此の時に出でぬ。機運『獨步集』を呼び、『獨步集』機運を更に促進し、燧石は相打ちて火を出すところ、國木田獨步の名はエポックメーキングの麒麟閣にかゝりぬ。

まことや明治文藝は、自然主義の勃興によりて其のキイノートを變へぬ。今まで浮遊せりし渾沌たるものの此處に始めて定まる。一『獨步集』必ずしも此の氣運を隻手に作りしものにあらざれども、然かも此の時『獨步集』の出づる事微りせば時運はかばかり迅かに回轉する事はあらざりしならむ。

前代文藝の光芒うすれて、輓近主義の文藝漸やく勃興するにあたりてより、獨步集は常に先行者（フオアランナー）の姿ありき。その人生觀照の態度に於て、その新技巧の點に

杳として何等の人氣をも與へざるに聊かも失望せず、他の人氣作者の習ひに染まず、顰笑苟くも他の爲めにせずして、己の爲めに笑ひ、己の爲めに泣き、己の爲めに怒りて、頂天立地、自家の歩むべき軌道をのみ歩みつゞけぬ。

此等の時代にあたりて湖畔詩人の感化を享けしもの何ぞ限らむ。而かも國木田氏ひとり此の感化を新しく躊りこなして、自家が精芒を此の間より抽き却て新興文藝の導火線となるを待たりしもの、たとひ機運の或は多少之れを然らしむるもの無きにあらずと雖も、氏の人格の豫言者若くは前行者的設彩に富めるものあるに主として是れよらずんばあらず。

時の勢は暗默の間に移りぬ。ロマンチックの時代來らんとして其の火未だ揚らざるに先ちて、自然主義的文藝はまづ來りぬ。田山花袋氏等の此の機運を助成したるは云ふまでもなく、風葉其他の作家もその傾向を漸次に作成して、日露戰後の文壇は、自然主義てふ四字を以て抱括的題目となさんとするの觀あり。前期文藝の中心たりし技巧過重、結構萬能の思想は、或る程度までは、かいなぐり捨てられて、新なる人生觀照の用意を有せる諸文人が、新なる眼を以て痛切に處

ものは、或る意味に於て、猶ほいまだ新創の期に屬し、小説界は、露伴の理想小説と紅葉の寫實小説との二大旆、世間の耳目にはためきて、柳浪と一葉と、猶ほ他の二三子を之れに加ふれば、その外の名は無くもがなの時代なりき。技巧過重と、結構萬能の念は、言はずとも文學者の肝膈に充ちて、人生の楔心より生るゝ痛刻の聲は、さしも『小説眞髓』の警鐘に愕されてより十年を隔てゝ後の此の黎明にすら、聞くを得ざりき。二葉亭、内田魯庵等の諸氏によりて、大陸作家の數作は飜譯せられ、ゴルキイ、ドデイ、チエホツフ等の短篇の紹介また、二三之れを見ざるにあらざりしかど、讀む人に其の心なし、何ぞさる新聲の迅に反響を起し得む。

此間に在りて氏はワーヅワースの『自然主義』に私淑して、大自然の化とともに流行するの修養に心を碎き、多く作らざれども深く思索し、博く讀まざれども切に感じつゝありぬ。深く自然を看、切に人生を感得せし當時の氏よりして、當年の文藝界が産めるところの諸作を通覽すれば、人生の徒らに花簪し粉鈿せられて、膩氣一味の外何物もなきを見る。されば國木田氏は此の硯友社王國の大勢に對しても、決して自家の行くべきところを迷はず、自家の作物に對して世間の

吁嗟國木田獨歩

明治四十一年六月、國木田獨歩氏逝く。

氏が文學的生涯の、比較的長かりしに比して、その聲價の中外を壓してひとり高かりし時代は、甚だ短かゝりき。國木田氏の名は、心ある人々に取りては、決して短時日の間之れを耳にしたるものにあらず。獨歩吟客の時代より、國民的悼歌の裡に去りし今日まで、常に耽朶倦くを知らざるの愛讀者は、氏の筆の四周に牽きつけられぬ。されば氏が文壇の人としての前半生涯は、他の跟隨を許さざる別個の軌道を馳する一遊星として、たとへば彗星のそれの如き怪しげの光芒を放つものに過ぎざりけれども、然かもその後半生に到りては、喬木の如く慘として文壇の中央に聳立し、枝頭に他の群小星を結びつけて、ひとり天下を俯瞰するもの有りしを見る。前に具眼者の瞳にのみ映りし獨歩の影子は、後に擴がりて、博く世を掩ふに到りしなり。

氏が獨歩吟客の名を以て、新體詩人の間にその名を聯ねし時代は、新體詩なる



國木田獨歩

死とは自覺の滅する事ならずや。

我等の智識は比較を好み、比較に依つて判斷の正確を保證す。

惰力にてレールの上を走る汽車が、遂に停止すべきを判斷するは比較法に依るなり。

死に近づくに連れて人は生存の自覺を次第に薄らがす者なり。然る以上、死は即ち生存の自覺の停止ならずや。

この一節は獨歩氏が四十年十二月頃の日記にかゝる、小說以外、恐らくは這種の文字の絶筆なるべし。――病牀錄所載――

味を讀者に與ふ可きを、疑ふ能はず候。乃ち單に文學的作品としても、之を江湖に推薦す可き理由ありと存候。況んや獨歩氏の現狀に對する同情者に於てをや。敢て推薦す焉。

▼裝釘の美稀に看る所

中央公論曰く、西園寺侯の題辭、德富蘇峯氏の序文があり、製本も甚だ美麗で、實に立派なる本である。殊に發行の主旨が最も美なので、一種の感動なしに此本を手に取ることは出來ぬ。風葉、花袋、秋聲、青果、白鳥、二葉亭、藤村、蘆花等を初め錚々たる作家の代表的作物が皆此一冊に收まつて居るのだから、現代の文學を窺はんと欲する人にも極めて都合よき本である。吾人は其內容の爲め、殊に其の美擧の爲め、本書の江湖に宣傳し、江湖に歡迎せられんことを希望するものである。

▼價亦極めて廉なり

萬朝報曰く、聞くが如くんば、獨歩の此の企あるを聞きて、流涕血を吐くとても倚諸君が厚誼に酬うるの作あるべしと云へりとか、蓋し文士に取りては之以上に病床の慰藉なかるべく、又之以上の名譽もなかるべし。本書成りて其の枕上に繙きたる時、彼は看護人の制止をも聞かず、耽讀しつゝ頻りに身に病魔あるを喞ちたりといふ、吾人は獨歩に於て其正に然るを信ず。菊判五百六十頁の美本にして一圓三十錢は價廉なりと云ふべし。

◉發行所　東京市麴町區土手三番町二十七　新潮社

國木田獨歩 病牀録

眞山青果編

總クロース函入最上製
定價八拾錢
小包料八錢

東京市麹町區
土手三番町二十七番地
新潮社

獨歩氏の死像　六月廿四日午後三時
死後十八時間の寫生　滿谷國四郎

病牀の獨歩氏＝茅ヶ崎の海　小杉未醒

思想の人國木田獨歩が病牀僞らざるの感想に聽け。是れ死に恐怖あれども禱ること能はざる近代的作家の死生觀也。戀に敗れて人生の悲劇を痛感せる人の戀愛觀也。新作風の魁をなせる天才の文藝觀也。あらゆる方面に興味を抱きて交遊最も廣かりし人の人物觀也。舌頭錐の如く鋭利に、言々悉く奇想を孕みて、警拔の文字隨所に拾ふを得べく、之を貫くに一道の眞氣を以てす。作家としての獨歩氏は世已に定評の存するあり、更に思想の人として奈何に偉大なる乎。此偉大あるが故に、作家として奈何に異色を示せし乎。之を事實に語るものは我が『病牀録』也。

病牀録目次一斑

死生觀

人物觀

戀愛觀

藝術觀

（以下略す）

[illegible]
營業稅と所得稅……
人生惟一の驚愕……
超越とは無關心也……
人間の生理慾……
疾病は不自然也……
直に大自然に面せる時……
同情は誇張せる感情也……
死とは自己を去る事也……
自ら殺し得る者に非ず……
淨められたる生涯……
やりきれなくて仆れた……
人生と信仰……
余の心の鍵……
處決し得ぬ惟一の問題……
男女の獸醫也……
看護婦は素人なるがよし……
學術は神に脅かしめたり……
喀痰は生の分解也……
余は枕席方丈の人也……

所謂最高の士……
胸中の小埒を徹せよ……
余の最も厭ふは怠け者也……
敵は多きを恥ぢず……
先づ其一人を仆せ……
友人は余の分身也……
頭冷熱手の德富蘇峰……
貧乏なりし西園寺侯……
花袋は余の親友なり……
臨川は狂熱の人也……
抱かれて寢て見たき風葉……
愛すべき未醒……
未知數孤雁……
打算に明かなる人……
空想に活くる蘆花……
秋骨は感じよき人也……
灘を越した酒の如き江東……
其三分を殘せ……

（以下數十項）

戀の經驗は甘し……
尤も痛切なる戀物語……
若き戀する人に告ぐ……
背きたる女を追ふ勿れ……
戀は一種の遊戯のみ……
要するに女は女也……
汚なき戀が覆はん爲め……
余は確に詩人かぶれせり……
裸體の寫眞をつきつけられた心地……
戀なき男女は種痘せざる人の如し……
戀の議論は決する時なし……
自尊心を傷けざる戀なし……
肉慾に走るは自然也……
自分の弱點を他に握ませず……
客を欺く賣婦なし……
女には惟一の武器あり……
ユーゴーに倣はゞ……
戀は多くオブラアト也……

最も誇りある過去……
余が前に萬金を積め……
余は各種の經驗を有す……
余が雅號の由來……
他を思ふ暇なし……
余は正直に告白す……
嘘を書かぬ事……
名乘るなら自然主義也……
余は伎巧派を以て居らん……

（以下略す）

田口掬汀新作



口繪　渡邊審也氏筆　着色版コロタイプ刷

裝釘　平福百穗　結城素明二氏　表紙金銀箔五種模樣

前編發行　大冊舶來紙刷　定價金八十五錢　送費金拾錢

發行所　不振會　東京府荏原郡入新井村

▲時　は明治四十年の梅散る頃より菊日和の天長節頃までの事

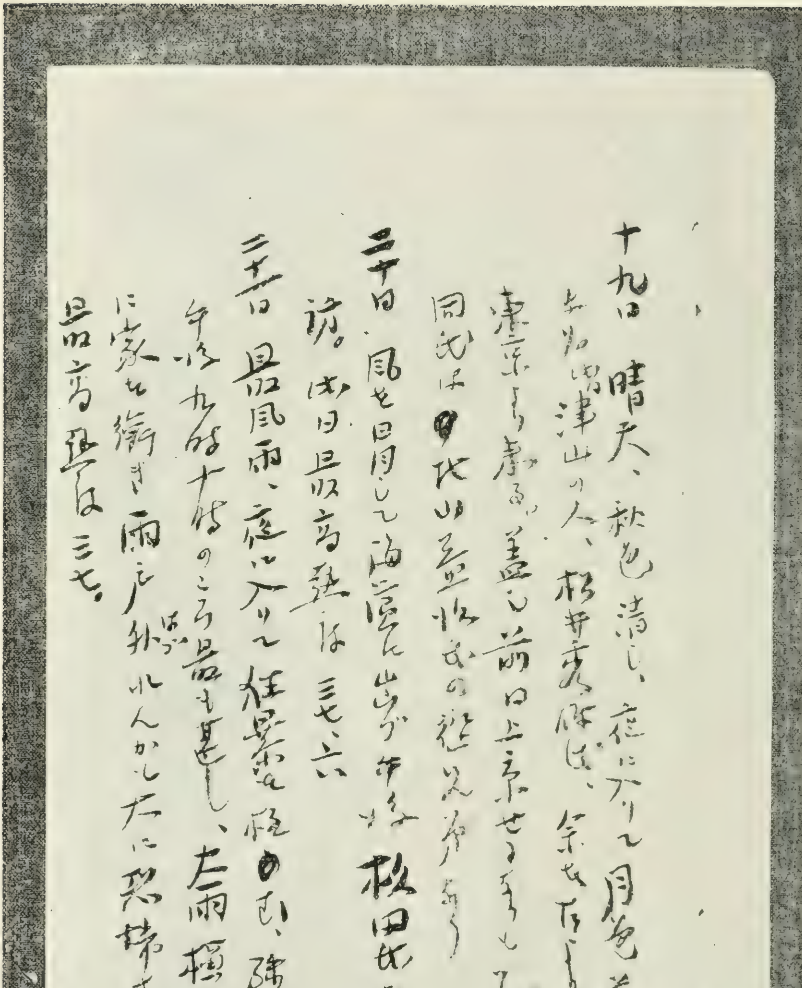
▲場所　は東京を中心にして南は大磯北は奥州白河に至る間

▲事件　は舊物を破壊せんとする新思想と在來の思想との爭鬪

▲人物　は現に諸君の周圍にありて諸君と倶に世に活動する實在の人間

▲讀者　は是に依て混沌たる現社會の奥の奥まで知り得るだらう

發賣元　東京神田表神保町　上田屋　同區同町　東京堂　京橋區中橋廣小路　梁江堂


十九日 晴天、秋色清し、庭に下りて月色美し
美作國津山の人、松井秀郎氏、余を訪ひて
東京より歸るに、蓋し前日上京せるなりと云ふ
同氏は日比山益收氏の從兄弟なり
二十日、風を冒して海岸に出づ、午後松田氏來
訪。此日最高熱は三七、六
二十一日 暴風雨、庭に下りて往來を眺め臥、殊に
午後九時十時のころ最も甚だしく、大雨横さま
に家を衝き雨戸外れんかして大に恐怖す
最高熱は三七。

獨歩氏筆蹟、前額記の一節……………………(病牀錄所載)



（青山の墓地）

（乙ノ一）

Данныя г. Ицуки [illegible] Маньчжуріи. [illegible] одно изъ [illegible] указываетъ на [illegible] нистраціи въ Маньчжуріи. Тріумвиратъ составляютъ: генералъ-губернаторъ, [illegible] жел. дор. и консулъ.

[illegible]

[illegible] предупрежденія [illegible]

Такъ освѣщаетъ настоящее взаимоположеніе Китая и Японіи г. Ицуки.

Въ слѣдующемъ № мы познакомимъ читателя со взглядами на этотъ же вопросъ графа Окума.

ФЕЛЬЕТОНЪ.

ГОВЯДИНА И КАРТОФЕЛЬ.

Разсказъ Доппо Куницида.

Переводъ съ японскаго.

На улицѣ Хонго, въ той части квартала Сиба, которая [illegible] Сарала, возвышается домъ европейскаго стиля, не особенно красиваго [illegible]. Прежде въ этомъ домѣ помѣщался клубъ „Мейдзи", но теперь домовладѣлецъ перемѣнился и самаго клуба уже не существуетъ.

Много лѣтъ тому назадъ, когда клубъ былъ еще въ расцвѣтѣ, въ одинъ зимній вечеръ окна столовой, помѣщавшейся во второмъ этажѣ, были освѣщены и оттуда по временамъ долеталъ до улицы громкій смѣхъ. Это явленіе было не совсѣмъ нормальное: клубъ почему то посѣщался только днемъ, а вечеромъ дымъ рѣдко поднимался изъ трубъ, возвышавшихся надъ кро[illegible].

Уже давно пробило 8 часовъ, но члены клуба, собравшіеся въ этотъ вечеръ, казалось, и не замѣчали этого. Никому изъ нихъ не приходила мысль, что уже [illegible]. Около подъѣзда стояли шесть пустыхъ рикшъ,*) а сами возницы забрались въ клубную кухню, гдѣ шла ихъ любимая игра „одна и шесть"**).

[illegible] за темнаго угла улицы неожиданно появился господинъ въ низкой шляпѣ, въ пальто съ приподнятымъ воротникомъ. Онъ быстро подошелъ къ входной двери и рѣзко позвонилъ.

Дверь распахнулась и на порогѣ показался одноглазый швейцаръ съ продолговатымъ лицомъ. Онъ былъ одѣтъ въ національный костюмъ.

-Г. Такеучи здѣсь?—спросилъ господинъ въ низкой шляпѣ тихимъ, спокойнымъ голосомъ.

— Да, они здѣсь. Какъ прикажете доложить?— вѣжливо, въ свою очередь, спросилъ швейцаръ.

— Вотъ моя карточка.

И господинъ подалъ швейцару свою визитную карточку, на которой мелкимъ шрифтомъ № 5-ый было [illegible] лифа „Ока-мото-эй-фу". Ни званія, ни профессіи не было обозначено.

Швейцаръ быстро пошелъ наверхъ, тотчасъ вер[illegible]

[illegible]

Господинъ въ низкой шляпѣ поднимался по лѣстницѣ позади швейцара; скоро онъ очутился въ теплой столовой съ сильно растопленнымъ каминомъ, сразу обдавшимъ его такимъ чувствительнымъ тепломъ, что ему сдѣлалось даже душно. Передъ каминомъ сидѣло трое членовъ клуба, а подальше отъ нихъ еще трое. На ихъ столахъ красовались нѣсколько бутылокъ виски*) и небольшія рюмочки, однѣ изъ которыхъ были полны, другія пусты.

[illegible] присутствующіе были уже изрядно выпивши.

Увидя вошедшаго Окамото, Такеучи поднялся съ своего [illegible]та и, предлагая ему стулъ, привѣтливо сказалъ:

— Садитесь.

Но Окамото не сѣлъ сразу. Обводя своимъ взоромъ всѣхъ шестерыхъ онъ замѣтилъ, что пятеро изъ нихъ были знакомы, хотя и не очень коротко, но одинъ былъ совершенно не знакомъ. Этотъ послѣдній господинъ былъ бѣловатой наружности, не то толстый, не то худой, но наружности весьма приличной.

[illegible] еще не знакомы! [illegible]

*) Рикша—ручная тележка, своего рода экипажъ.

**) [illegible] Просгрывающій [illegible]

***) Англійская водка.

(5)露文雑誌所載『牛肉と馬鈴薯』二葉亭氏の譯せるもの也。

(3)青果氏に宛てたる書翰は、六月二日始めて咯血せる時の自筆也(三日とあれど實際は二日也)



（病室の外觀）

南湖院に於ける獨歩氏と其病室

『戀ざめ』は發賣頒布を禁止せられたり！

吾社は更に『戀ざめ』の姉妹篇たる『風葉集』を公にして、風葉氏の作物に憧るゝ讀者の渇望を滿たさんとす。『風葉集』は、女性の描寫に於いて現代第一人と稱せらるゝ人の作、殊に『戀ざめ』と同じく、全然新たなる用意と覺悟とを以て筆を執れる傑作のみ也。

小説 風葉集

島村抱月氏序
小栗風葉氏著

最上製（價八拾錢
美本（小包八錢

驚くべき盛況、既に再版出來發賣中なり！

六月十五日を以て市上に出でたる『風葉集』は、十九日に至る僅に五日間にて本社には一部をも止めざるに至れり。斯くの如きは『二十八人集』と共に、近時の出版界稀に看るの盛況となす。第二版は、舶來最上等の洋紙を用ゐ、裝釘一層の注意を拂うて讀書界の大なる眷顧に酬ゐんとす。

出版 東京麹町區土手三番町 新潮社



二十九年（二氏、嚴父、獨歩氏母堂）



大久保時代（四十年）　上は令夫人也


明治三十九年


明治四十年


書齋に於ける獨歩氏

明治二十九年



明治二十五年



明治三十二年



明治三十年





右獨步氏小學校時代、中央收二氏、左方母堂



明治十九年(左方)



明治二十二年左方



明治二十四年(右方)

『國木田獨歩』目次

新刊二種

最新歌集

與謝野晶子作◎岡田三郎助、中澤弘光畫

舞衣

◎新しき歌壇に此の優艶の花を加へ情趣更に深し

（著者肖像挿入）

全　裝禎頗美麗

壹　正價金九拾錢

册　郵稅金六錢

櫻井女塾主

櫻井ちか子編

主婦之友

洋裝頗美麗

全一册

正價金壹圓

郵稅金八錢

米國教育及び家庭の制度を視察し歸朝後私塾を開きて專心敎育に盡瘁せる編者が親しく米人の家庭に學びたる新時代の主婦の心得を原語原文と對照して記載せる最良無二の家庭寶典にして併せて英語學習の好伴侶なり

記載略目次

食卓禮式の心得●獻立の一例●米國一般家庭に於ける一週間の仕事の日割●英文――小さき主婦●家庭重寶●ソップ之部●魚之部●玉子之部●肉之部●菓子之部●パンとトースト之部●雜之部●臺所の設計圖●臺所必用品の名稱等

發行所　東京日本橋　大倉書店　振替貯金二三八番

編輯に就いて

▲獨歩氏は遂に國民的悼歎の中に眠られた其死は新文藝界の大なる損傷ではあるが天下を擧げて心から其長逝を悼んだ事實を看て、我等はせめてもの慰とせねばならぬ。

▲獨歩氏は日本文學史の重要なる頁を占むべき人である、其正確なる傳記、其動すべからざる評論は、必ず公にされることであらう。奈何なる困難を排しても之を公にすべきことを望まねばならぬ。こゝに『新潮』七月號の體裁を全然改めて獨歩氏に關する記事を滿載したのは、獨歩氏を知らんとする世人の希望を滿たすと共に、後の獨歩傳を編む人、はた明治文藝史を稿する人に向つて材料を供したいと云ふ微衷からである。

▲訃報が傳へられてより漸く二週日で編輯を終つた、匆忙の際と云ふ言葉はよく用ゐられるが、之れ以上の匆忙はあるまい。十五日の定期發行日に出したいと云ふ希望からで、雨のひどく降る中を編輯局の諸氏は東奔西走された。勿論獨歩氏の閲歴でも作品の評論でも之で盡きてゐると云ふ譯ではない。まだ〳〵お話を願ひたかつた人は多いが、生憎旅行とか其他の事情で記者の希望を滿たす事は出來なかつた。併し約四十家を網羅して一卷二百餘頁の獨歩號を公にすることを得たのは、所謂匆忙の際としては、其苦心を認めて貰はねばならぬ。

▲こゝに特記して置く一事は、本書の九分迄は談話の筆記であることだ、そして發行を急いだ爲め校閲を經る事の出來なかつたものが多い。文責のすべて記者に在ることを一言して置く。なほ諸氏が記者の請を容れ、忙中特に執筆又は談話せられた好意は、深く感謝する所である。

國木田獨歩



新潮第九巻第壹號